

いけ しま
池 島 遺 跡

県営早水団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

いけ しま
池 島 遺 跡

県営早水団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、県営早水団地建替事業に伴い、平成13年度に宮崎県土木部建築住宅課の依頼により都城市池島遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡のある早水地区は南に早水神社、北東に島津氏関連の祝吉御所跡推定地など歴史に縁の深い場所にあり、近隣には、縄文早期の遺物や遺構が明らかになった白山原遺跡等がみられます。

本遺跡でも縄文時代早期から中世まで幅広い時代にわたって遺物や遺構が検出されました。都城北諸地区では類例の少ない弥生時代の貯蔵穴や平安時代の終わりから鎌倉時代の初めにかけて用いられたと思われる高麗青磁の皿や合子など、貴重な資料も見つかりました。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

例　　言

- 1 本書は、県営早水団地建替事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した都城市早水町3882番地外所在の池島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、宮崎県土木部建築住宅課の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年9月12日から平成14年1月31日まで行った。
- 4 現地の実測・写真等の記録は柳田宏一・柳田晴子が行った。
- 5 空中写真については㈱スカイサーベイに、グリッド杭設置については㈱旭総合コンサルタントに委託した。
- 6 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成・遺物実測・トレイスは柳田宏一・柳田晴子が行い、整理作業員が補助した。陶磁器に関する整理は柳田晴子が行った。
- 7 土層断面及び土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に掲った。
- 8 本書で使用した方位は座標北（G. N.）と磁北（M. N.）である。座標は国士座標第Ⅱ系に掲る。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S A … 堅穴住居跡	S C … 土坑	S E … 溝状遺構
S H … ピット	S L … 周溝状遺構	S M … 周溝墓
- 10 本書の執筆は、柳田宏一・柳田晴子が担当し、目次に明記した。編集は柳田宏一が担当した。
- 11 出土遺物その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	(柳田 宏一)	1
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査の組織	1	
第3節 位置と環境	3	
第4節 遺跡の層序	4	
第5節 調査の概要	4	
第Ⅱ章 調査の記録	5	
第1節 縄文時代の遺構と遺物..... (柳田 宏一)	5	
(1) 遺構	5	
(2) 遺物	13	
第2節 弥生時代の遺構と遺物..... (柳田 宏一)	24	
(1) 遺構	24	
(2) 遺物	31	
第3節 古代・中世の遺構と遺物..... (柳田 晴子)	46	
(1) 遺構	46	
(2) 遺物	53	
第4節まとめ..... (柳田 宏一)	58	

挿図目次

第1図 池島遺跡位置図	2
第2図 池島遺跡周辺図	3
第3図 基本土層図	4
第4図 第V層遺構分布図	6
第5図 集石遺構実測図1	7
第6図 集石遺構実測図2	8
第7図 集石遺構実測図3	9
第8図 集石遺構実測図4	10
第9図 集石遺構実測図5	11
第10図 第V層上面遺構分布図	12
第11図 縄文時代の石器実測図	13
第12図 縄文土器実測図1	18
第13図 縄文土器実測図2	19
第14図 縄文土器実測図3	20
第15図 縄文土器実測図4	21

第16図	縄文土器実測図 5	22
第17図	縄文土器実測図 6	23
第18図	第III層上面遺構分布図	25
第19図	竪穴住居跡実測図 1	26
第20図	竪穴住居跡実測図 2	27
第21図	竪穴住居跡実測図 3	28
第22図	竪穴住居跡実測図 4	29
第23図	貯藏穴実測図	31
第24図	周溝状遺構実測図	33
第25図	弥生土器実測図 1	38
第26図	弥生土器実測図 2	39
第27図	弥生土器実測図 3	40
第28図	弥生土器実測図 4	41
第29図	弥生土器実測図 5	42
第30図	弥生土器実測図 6	43
第31図	石器実測図 1・鉄器実測図	44
第32図	石器実測図 2	45
第33図	周溝墓実測図	47
第34図	溝状遺構平面図	49
第35図	B区溝状遺構断面図	50
第36図	S E 2・S E 10平面図	51
第37図	S C 2実測図	52
第38図	土師器・須恵器実測図	54
第39図	陶磁器実測図	56

表 目 次

第1表	遺物観察表（縄文土器 1）	14
第2表	遺物観察表（縄文土器 2）	15
第3表	遺物観察表（縄文土器 3）	16
第4表	遺物観察表（縄文土器 4）	17
第5表	石器計測表（縄文時代）	17
第6表	遺物観察表（弥生土器 1）	34
第7表	遺物観察表（弥生土器 2）	35
第8表	遺物観察表（弥生土器 3）	36
第9表	遺物観察表（弥生土器 4）	37
第10表	石器計測表（弥生時代）	43

第11表 遺物観察表（土師器・須恵器）	55
第12表 遺物観察表（陶磁器）	57

図版目次

図版1 遺構写真1	59
図版2 遺構写真2	60
図版3 遺構写真3	61
図版4 遺構写真4	62
図版5 遺構写真5	63
図版6 遺構写真6	64
図版7 遺構写真7	65
図版8 遺構写真8	66
図版9 遺構写真9	67
図版10 遺構写真10	68
図版11 遺構写真11	69
図版12 遺構写真12	70
図版13 遺構写真13	71
図版14 遺構写真14	72
図版15 遺構写真15	73
図版16 遺物写真1	74
図版17 遺物写真2	75
図版18 遺物写真3	76
図版19 遺物写真4	77
図版20 遺物写真5	78
図版21 遺物写真6	79
図版22 遺物写真7	80
図版23 遺物写真8	81

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成13年4月、宮崎県建築住宅課から県教育庁文化課に都城市早水町の県営住宅敷地について埋蔵文化財の有無について照会があった。敷地内は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、周辺及び隣接地等では、多くの遺跡が発掘調査されていた。

県文化課では早速、建築住宅課と協議を持ち、試掘調査を実施する旨を伝えた。試掘調査は、平成13年4月26～27日の2日間実施した。現地は建物が残っている上に縦横に走るコンクリート舗装の通路があり、トレンチ設定は各戸の庭にあたる部分の掘り下げに限定された。調査の結果、霧島御池軽石（通称御池ボラ）層（第Ⅲ層）が残っており、ボラ層の上の黒色土層から中世の土師器片が出土した。また、御池ボラ面での精査ではピットが検出され遺跡であることが確認された。都城市と協議のうえ遺跡名を『池島遺跡』とした。

試掘調査の結果から、建築住宅課と營繕課、文化課、埋蔵文化財センター間で協議を行い、平成13年9月12日に本調査を開始し、平成14年1月31日に現地での調査を終了した。

第2節 調査の組織

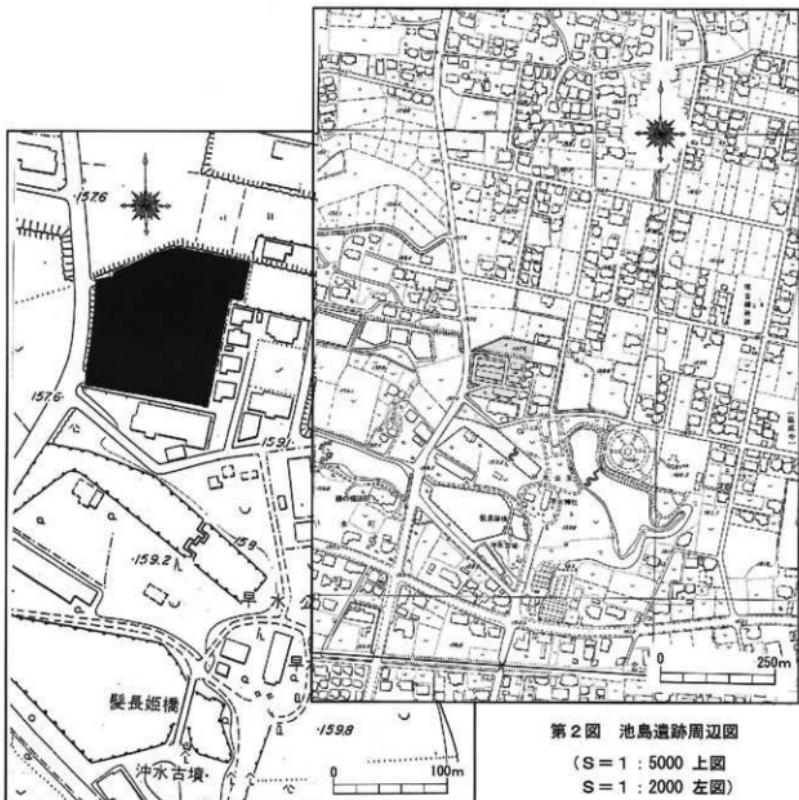
池島遺跡の発掘調査・整理作業・報告書作成については次の体制で実施した。

宮崎県埋蔵文化財センター

	平成13年度 (発掘調査)	平成14年度 (整理作業)	平成15年度 (報告書作成)
所長	矢野 剛	米良 弘康	米良 弘康
副所長 兼 総務課長	菊地 茂仁	大薗 和博	大薗 和博
副所長 兼 調査第二課長	岩永 哲夫	岩永 哲夫	岩永 哲夫
総務課 総務係長	亀井 維子	野邊 文博	
総務課主幹 兼 総務係長			石川 恵史
調査第二課調査第三係長 (調整)	菅付 和樹	菅付 和樹	菅付 和樹
調査第二課調査第四係主査 (調査担当)	柳田 宏一	柳田 宏一	柳田 宏一
調査第二課調査第三係調査員 (調査担当)	柳田 晴子		
調査第二課調査第三係主事 (調査担当)		柳田 晴子	柳田 晴子



第1図 池島遺跡位置図 (S=1:25000)



第2図 池島遺跡周辺図

(S = 1 : 5000 上図
S = 1 : 2000 左図)

第3節 位置と環境

池島遺跡のある都城市は宮崎県南西部に位置する人口13万人あまりの都市で、盆地の中央部にあり東側に三股町、高城町、北側に高崎町、山田町、高原町と、南側は鹿児島県財部町、末吉町、松山町、西側は同県霧島町に接している。

古くから交通・文化の中心地として栄え、平安時代の万寿年間に太宰大監平季基が藤原頼通に寄進した島津庄が成立している。江戸時代には島津氏の支藩が置かれている。

都城盆地は九州山地、霧島山、鰐塚山系に開まれ、大淀川の本流およびその支流が盆地内を貫流し、本遺跡のすぐ北側にも沖水川が東から西へ流れている。

池島遺跡は都城市的北東部に位置し、周辺が低湿地となる微高地にある。調査区は微高地の南西部にあり、南側は早水神社となり境内には沖水村古墳群の1号墳がある。北東方向に200mほど離れたところには島津忠久の館跡と伝えられる祝吉御所推定地があり、北に約100m離れたところには都城市文化課が調査し、縄文時代早期の遺物が出土した白山原遺跡がある。また、西に300mほど離れた位置で調査が行われた池ノ友遺跡では弥生時代から中世にかけて本遺跡と類似した造構が検出されており、両

第Ⅰ層	造 成 土
第Ⅱ層	軽石混じりの 黒色土
第Ⅲ層	霧島御池 輕石
第Ⅳ層	粘 土 質 の 黒 色 土
第Ⅴ層	アカホヤ 火 山 灰
第Ⅵ層	牛 ノ 脛 火 山 灰
第Ⅶ層 a	白い火山灰混 じりの黒色土
第Ⅶ層 b	粘 土 質 の 黒 色 土

遺跡の関係が注目される。

第4節 遺跡の層序

本調査区の基本土層は、第3図に示す通りである。第Ⅰ層は表土で、黒色土に砂利が混ざった層である。第Ⅱ層は軽石混じりの黒色土で弥生時代～中世の遺物包含層であるが層の上部は擾乱を受けているところが多い。第Ⅲ層は御池降下軽石層（御池ボラ）で約80cmの厚さがある。第Ⅳ層は粘土質の黒色土で縄文時代前期の遺物包含層である。第Ⅴ層はアカホヤ火山灰層である。火山豆石は確認できなかった。第Ⅵ層は牛ノ脛火山灰層である。第Ⅶ層は粘土質の黒色土の層であるが、上部に白色の火山灰（P11）が混入しており、その有無でⅦaとⅦbに分けた。Ⅶbの層から縄文早期の土器が多く出土している。

第3図 基本土層図

第5節 調査の概要

試掘調査の段階では文化層は御池ボラ層（第Ⅲ層、第3図参照）上面とアカホヤ火山灰層（第Ⅴ層）上面の2層の調査を行う予定だったが、本調査に入ってきたからの確認のための試掘でアカホヤ火山灰下の黒色土（第Ⅶ層a・b）から遺物（縄文時代早期の土器片）が確認され、計3層を調査することとした。

調査区は南側のA～F-2～4グリッドの範囲をA区、A～F-5～6グリッドの範囲をC区、北側のB～G-0～1グリッドの一段低い部分をB区とし、調査を開始した。B区は現状ではA区よりやや高くなっていたが、重機で掘り下げていったところ、厚さ2m近くの客土で覆われていた。これを除去したところA区より150cmほど低くなかった。B区には東側の一部の中の島状になった部分を除き、御池ボラ層が見られなかった。

第IV層より下の層は北に向かって緩やかに下に傾斜はしているものの急激な地形の変化は認められなかった。そのためB区は後世のいずれかの時期に人為的に削られたものと思われる。

調査は第Ⅰ層を重機で除去し、第Ⅱ層を作業員の手作業で掘り進めた。調査区が住宅地跡のため、建物の基礎の部分など土層が擾乱された部分が点在したが、擾乱を受けていない部分から弥生時代を中心とする遺物や遺構が確認された（第18図）。また、畑や住宅地の造成のため第Ⅱ層の上部はかなり削平されており、多くの遺物・遺構が消失したものと思われる。

第Ⅲ層上面での遺構調査後、重機で第Ⅲ層を除去した。第Ⅳ層は下層確認のトレンド掘りの結果、縄文前期の轟B式土器が出土したため、手掘りで掘り下げた。しかし、この層における遺物の出土は極めて疎であり遺構も確認できなかった。さらに第Ⅴ層・第Ⅵ層を重機で掘り下げ、第Ⅶ層を手掘りで下げていった。この層は縄文早期の轟ノ原式土器が上層から、知覧式の円筒土器、角筒土器、前平式土器などの貝殻条痕文系の土器が下層から出土した。遺構としては礫群と集石遺構が11基検出された。

北側のB区からは溝が12条検出された。その内の1条は道路状遺構とみられ、桜島文明軽石（1471年文明3年）が堆積し硬化した床面が確認された。また、ピットが多數見つかった。

A区は、北側に向かって緩やかに下っておりB区との境で約1mの段差がある。このA区からは弥生時代の堅穴住居跡が6軒と3連の周溝状遺構、貯蔵穴、西北の隅に近いところから中世の周溝を伴う墓と思われる遺構が検出された。

調査はⅢ層上面までは調査区全面を行い、それより下の層については団地建物の基礎が建つ部分の調査となった。

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

縄文時代の遺物・遺構はアカホヤ火山灰層を挟んで上下の層から検出された。アカホヤ火山灰下層の黒色土（第VII層a）中より格ノ原式土器が出土した。B区のトレーンチでは格ノ原式土器の15cmほど下の層（VII層b）からいわゆる前平式と思われる土器が出土している。

遺構としてはVII層bの縄文早期の層から集石遺構が検出された。第VII層bは今から約7,500年前に降下したP11火山灰（末吉テフラ）層の下である。合計11基のうち4基がA区の北東部から検出され、残りのほとんどは調査区南西側の市道に面した部分に集中して検出された。この部分は礫群が広がっており集石遺構はその礫群の下から見つかった。礫群は調査区外の南西側へ広がっており、さらに数基の集石遺構が存在している可能性がある。また、この2つの集石遺構群の間は御池ボラより下は調査対象外の部分で掘り下げていないため不明であるが、両遺構群は連続して北西から南西へ広がっている可能性もある。

集石遺構（S I 1）

1号集石遺構（S I 1）は、A区北側で検出された。直径約90cmのほぼ円形に礫が集中しており、礫の密度は高い。実測時の礫の数は97個でその内81個が熱を受けて赤化していた。やや浅い掘り込みが確認された。

2号集石遺構（S I 2）は、A区S I 1の南側で検出されたものである。直径200cm程度の円形の中に礫が広がるが、中心部のやや北西よりに直径約70cmほどの礫の密な部分があり、その周辺はかなり疎らな状態となっていた。

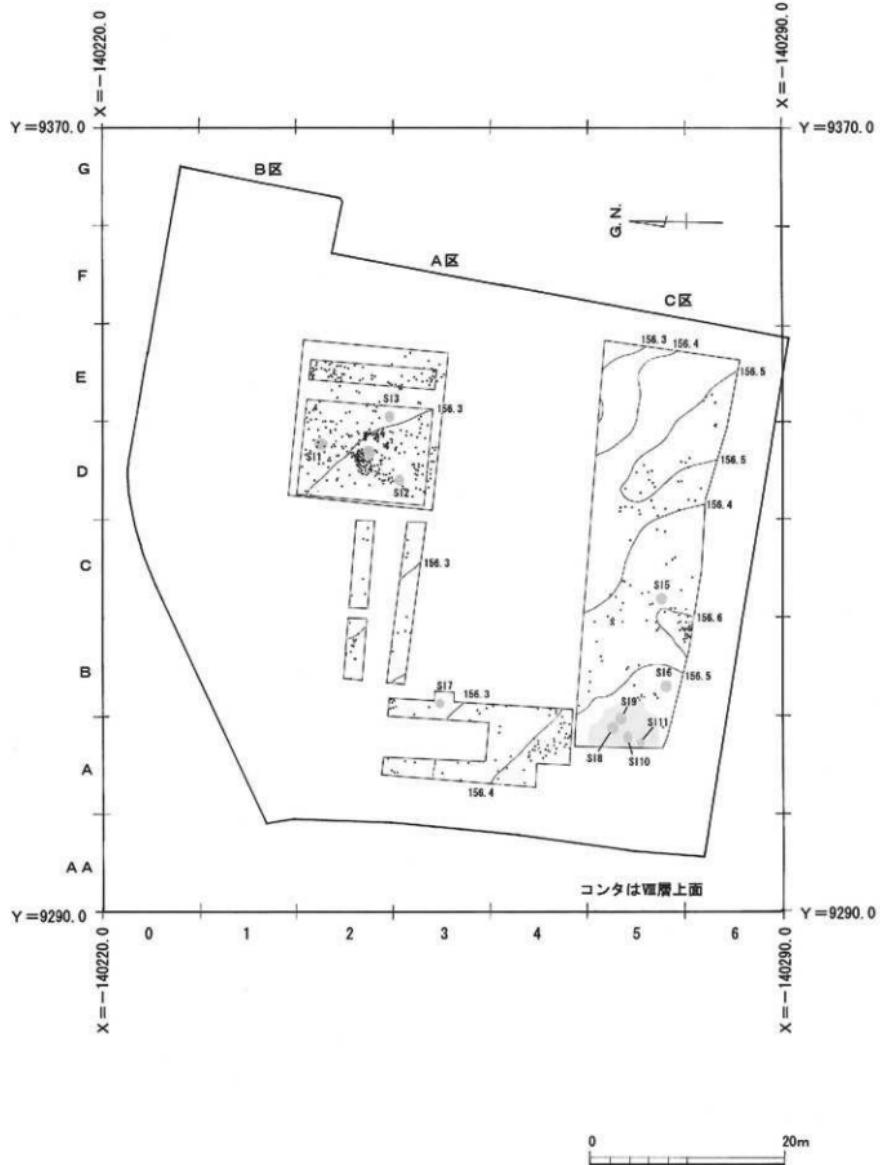
3号集石遺構（S I 3）は、A区で検出された4基の集石遺構の一つで1号集石遺構の2mほど北東にある。礫は中心から直径約260cmの円内に分布するが、疎らに広がっており中心部の直径約80cmほどの部分が密な状態である。やや浅い掘り込みが確認された。外側の分布が疎らな部分の礫は中心部の礫が流出して広がったものと思われる。貝殻条痕文系の縄文土器が数点出土（5、38、49）した。

4号集石遺構（S I 4）は、A区で検出された。直径が約150cmのほぼ円形に礫が検出され、最深部約50cmの掘り鉢状の掘り込みが確認された。掘り込みの一番下には配石と思われる大きな石が数個あり、掘り込み全体に高い密度で礫が入っていた。実測時の礫数は662個でほとんどの礫は赤化していた。また、20mm程度の炭化物が僅かに検出された。

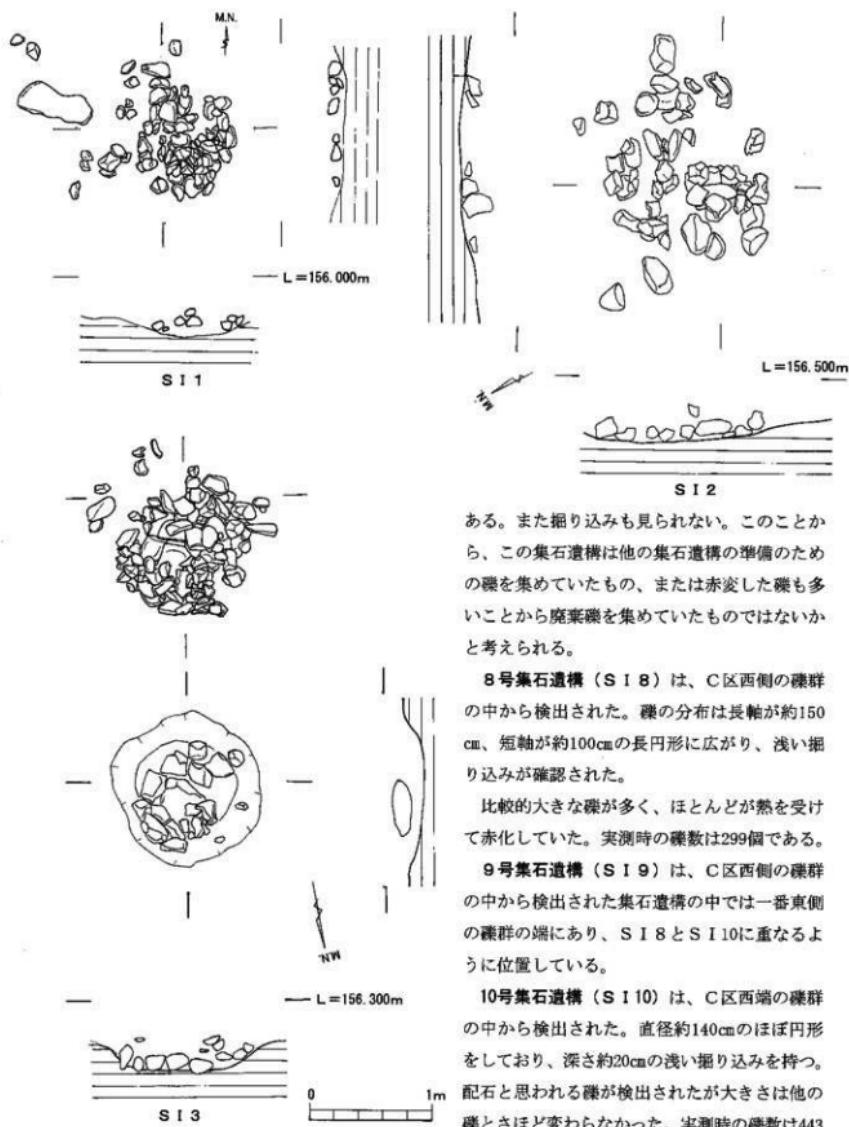
5号集石遺構（S I 5）は、C区南端の礫群の中から検出された。ほぼ円形に礫が集中しており、深さ約20cm、直径約100cmの深い掘り込みを持っている。実測時に検出した礫の数は186個でそのほとんどは砂岩系の石であり、熱を受けて赤化していた。

6号集石遺構（S I 6）は、C区西端の礫群の中から検出された集石遺構群から少し南東に離れた所で検出された。直径約50cmを計り、他の集石遺構に比べると小さな遺構で掘り込みは見られなかった。実測時の礫数は57個で、その内の6個だけが熱を受けて赤化していた。

7号集石遺構（S I 7）は、他の集石遺構と同じくA区西側の礫群の中から検出された。直径約110cmの円形に礫が広がり実測時の礫の数は98個あったが、他の集石遺構と比べて礫の密度がかなり疎らで



第4図 第VII層遺構分布図 (S = 1 : 500)



第5図 集石造構実測図1 ($S = 1 : 40$)

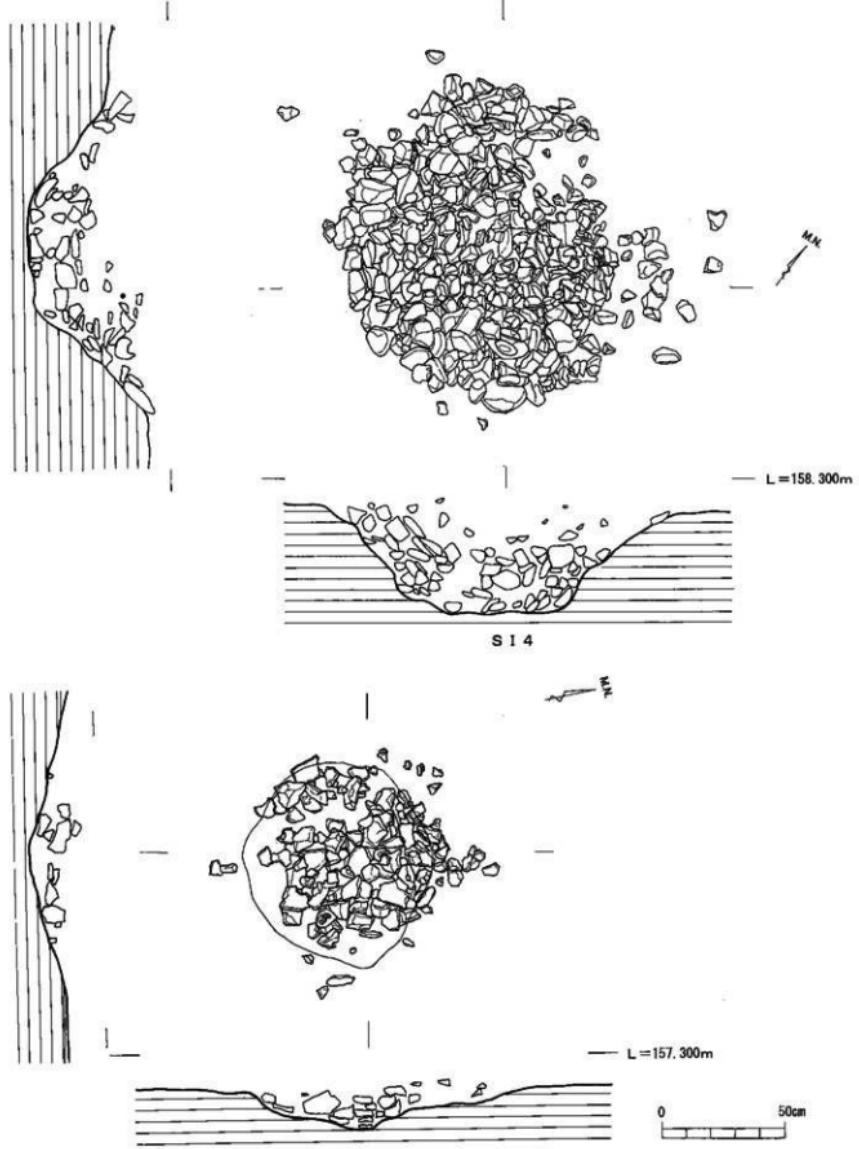
ある。また掘り込みも見られない。このことから、この集石造構は他の集石造構の準備のための礫を集めていたもの、または赤変した礫も多いことから廃棄礫を集めていたものではないかと考えられる。

8号集石造構 (S I 8)は、C区西側の礫群の中から検出された。礫の分布は長軸が約150cm、短軸が約100cmの長円形に広がり、浅い掘り込みが確認された。

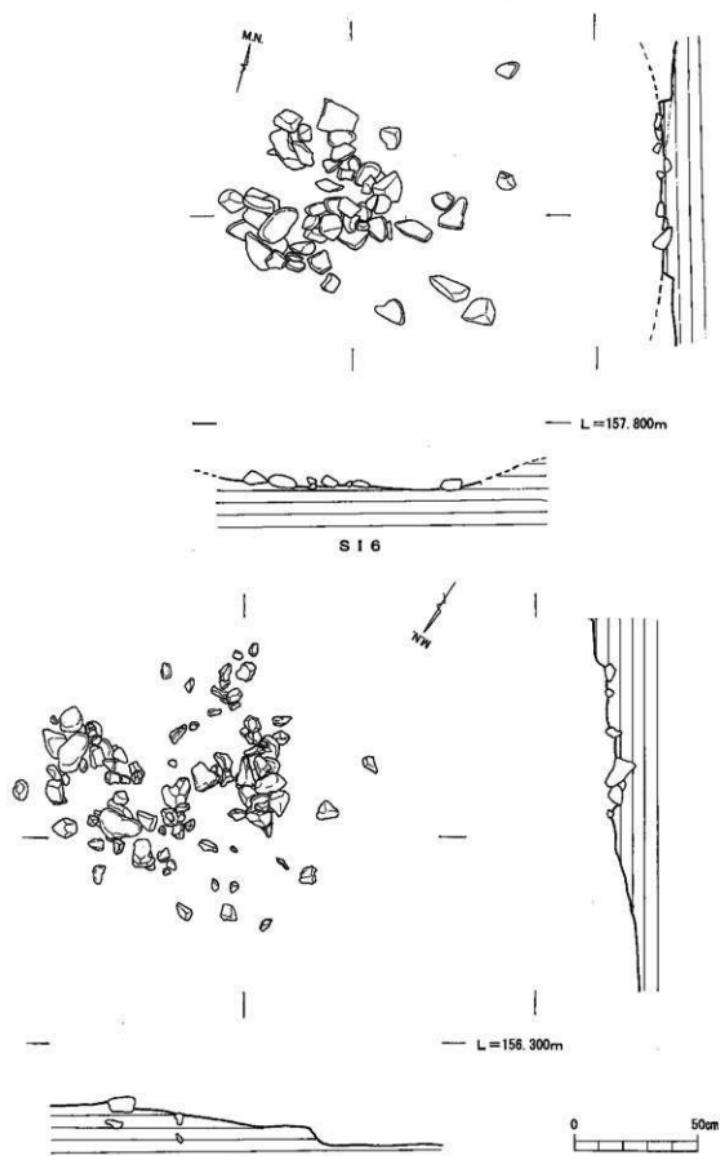
比較的大きな礫が多く、ほとんどが熱を受けて赤化していた。実測時の礫数は299個である。

9号集石造構 (S I 9)は、C区西側の礫群の中から検出された集石造構の中では一番東側の礫群の端にあり、S I 8とS I 10に重なるように位置している。

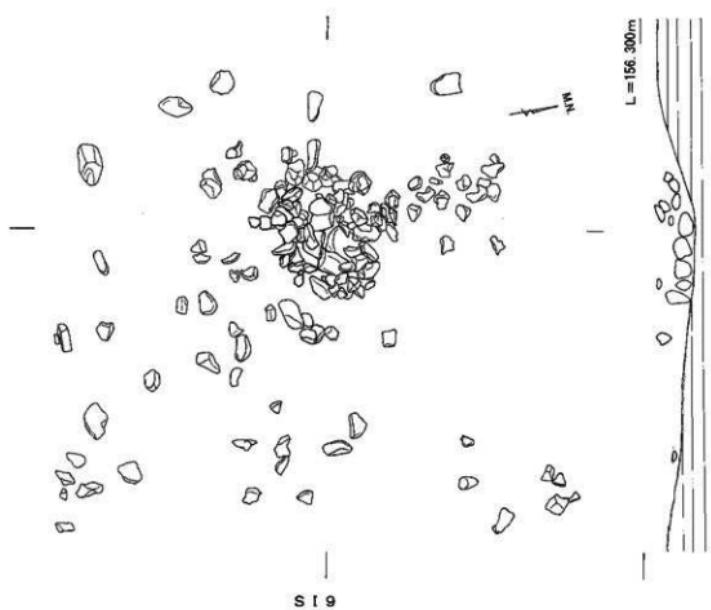
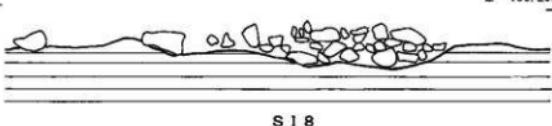
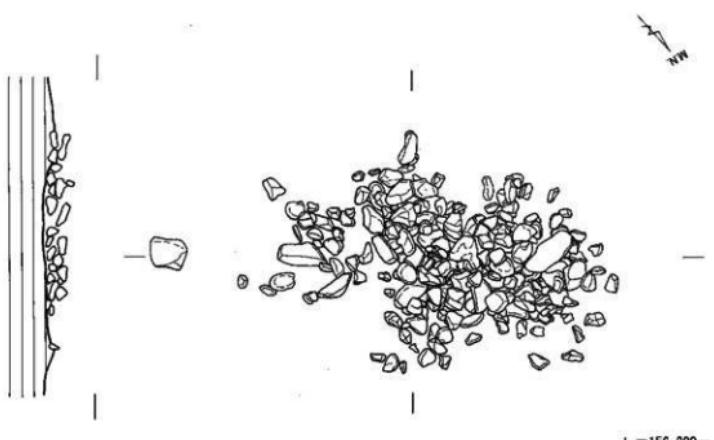
10号集石造構 (S I 10)は、C区西端の礫群の中から検出された。直径約140cmのほぼ円形をしており、深さ約20cmの浅い掘り込みを持つ。配石と思われる礫が検出されたが大きさは他の礫とさほど変わらなかった。実測時の礫数は443個でその内357個が熱を受けて赤化していた。



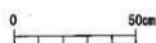
第6図 集石造構実測図2 (S = 1 : 20)



第7図 集石遺構実測図3 (S = 1 : 20)

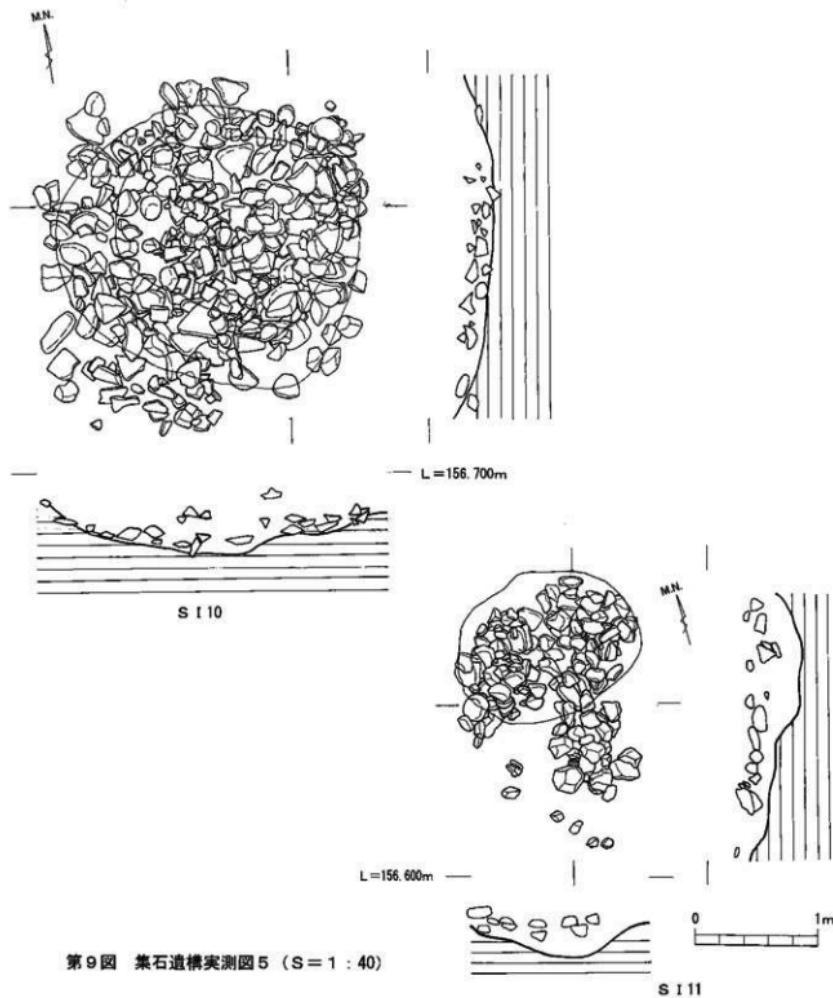


第8図 集石造構実測図4 (S = 1 : 20)

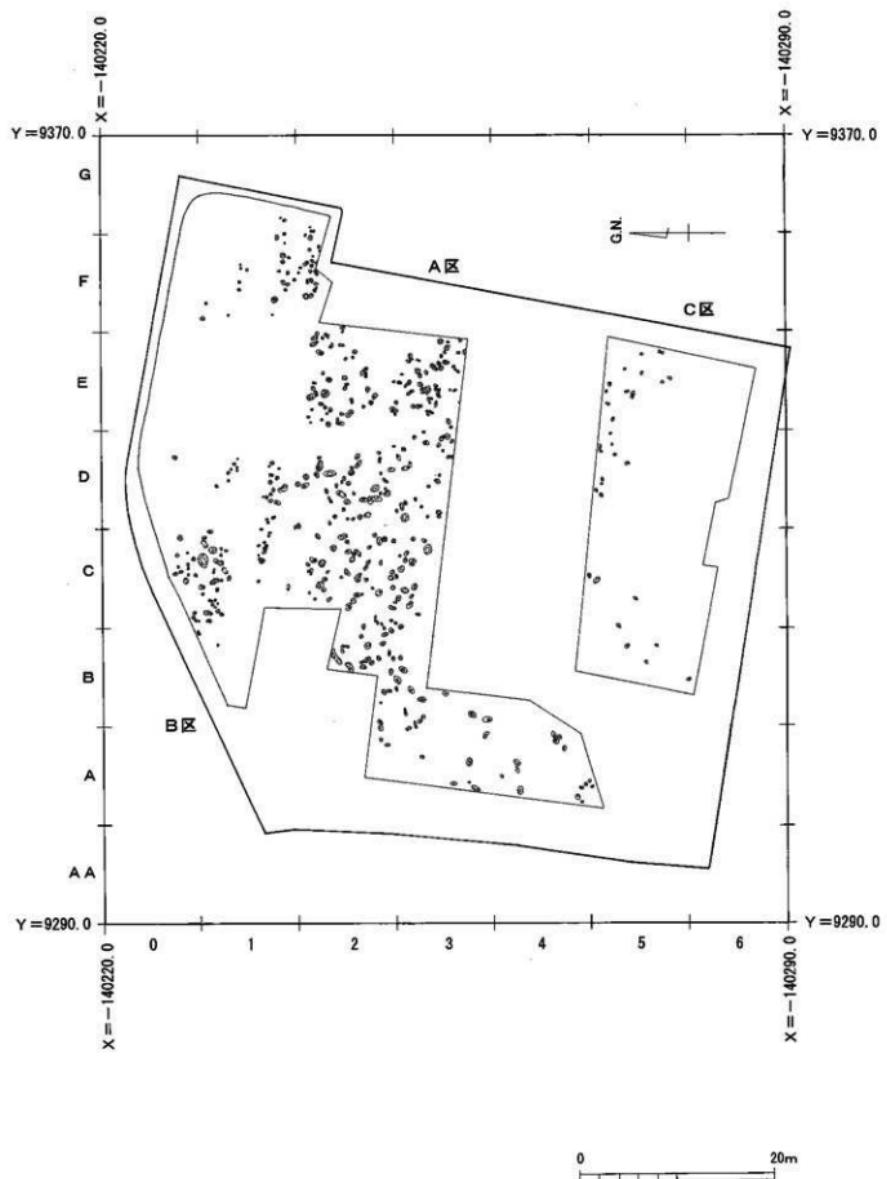


また、掘り込みの上部付近から炭化物の集中した箇所が検出された。ただし、この遺構は調査区の西端ぎりぎりの所で検出され、遺構の一部分は調査区外にあり実測ができなかったため疊数は実際の数より下回っていると考えられる。

11号集石遺構（S I 11）は、C区西端の疊群の中から検出された。疊は長径約80cm、短径約70cmの楕円形に広がっており、やや北側に偏って深さ約30cmの掘り込みが確認された。実測時の疊数は169個でほとんどが熱で赤変していた。また疊の大きさが大体揃っていた。



第9図 集石遺構実測図5 (S = 1 : 40)



第10図 第V層上面遺構分布図 ($S = 1 : 500$)

(2) 遺物

① 土器 (第12図～第17図)

縄文時代の遺物としては土器と石器が検出された。土器についてはアカホヤ火山灰の下の黒色土層(第VII層)から貝殻による条痕文を持つ土器や押型文を持つ土器が出土した。御池ボラとアカホヤ火山灰の間の黒色土(第IV層)の中からは突帯があり轟B式の特徴を備える土器が若干出土した。御池ボラの上の黒色土(第II層)からは縄文後期の土器が出土している。

1～23は胴部に貝殻条痕があり、口縁部に、又は口縁部と口唇部に連続刺突文を持つ、いわゆる前平式系統の土器である。

24は口縁部に刻目を施し、胴部上部に縱位の2段の楔形突帯、全体に貝殻腹縁刺突文を持つ知覧式土器の特徴を有する深鉢である。

26～28、30～34、36～44は貝殻条痕系土器の底部の特徴を持つものである。

45～56は胴部に貝殻条痕とその上に貝殻による刺突文を施した土器である。そのうち45～54は角筒土器である。また、45～48は波状口縁を有している。55、56は円筒土器である。基本的に第VII層bから出土している(49のみS I 3の礫中から出土)。

58は梢円押型文土器で、出土した押型文土器はこの1個だけであった。出土層は他の貝殻条痕文系の土器と同じVII層bである。

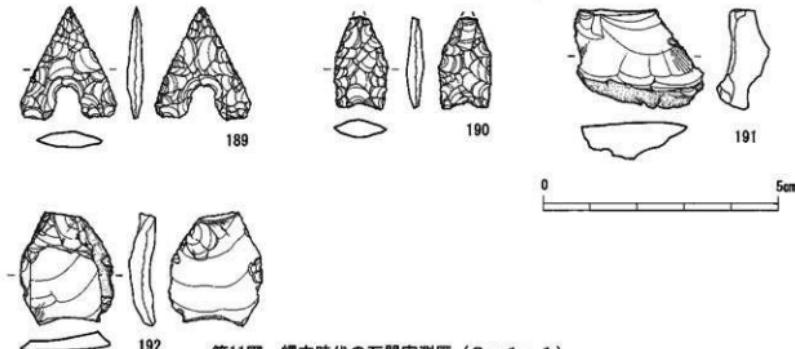
59は桙ノ原式土器で、60、61は縦方向の貝殻条痕文を持つ、縄文早期末の苦浜式土器である。

62はアカホヤ火山灰上の黒色土(第IV層)から出土したもので、縄文前期の轟B式土器である。3条のやや高い突帯を有する。A区中央付近に設定したトレンチで検出されたものである。IV層は御池ボラ(Ⅲ層)とアカホヤ火山灰層に挟まれた黒色土層である。厚さ80cmを越えるⅢ層のため、完全に封印されており後世に人為的・自然的攪乱を全く受けていない状態であった。このため同層を掘り下げた時に縄文前期の土器の検出を期待したがあまり出土しなかった。

63、66、67は御池ボラ上の黒色土の中から出土した縄文後期の土器である。

② 石器

石器は石鏃が2点(189、190)と剥片(191、192)が2点出土した。192以外はいずれもVII層bから出土している。4点ともに黒曜石製である。土器の量・様式の多様さに比べ、石器の出土量は僅少であった。



第11図 縄文時代の石器実測図 (S = 1 : 1)

第1表 遺物観察表（縄文土器1）

番号	種別	出土地区及 び取扱位置	器種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	脚間 (cm)	横 保・調 案		色 調		施 成	施 士	備 考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
1	縄文 土器	B VI b 111	深鉢	口縁～ 脚部	17.7			ナデ、ヨコナデ	工具による鋸歯の溝切形 み目、斜方向のナデ、工具 痕	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	1mm以下の白色光沢粒	
2	縄文 土器	C VI b 154	深鉢	口縁～ 脚部				横・斜方向のナデ	二段の連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	1mm以下の灰白・赤褐色・黒褐色、 透明光沢粒を含む	
3	縄文 土器	B VI b 133	深鉢	口縁～ 脚部	11.3			タテナデ	深い押圧溝、工具によ る二段の連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	2mm以下の白色光沢粒、1mm以下の 墨色の粒を含む	
4	縄文 土器	B VI b	深鉢	口縁				ヨコナデ	強い押圧溝、工具によ る二段の連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	にぶい 黄緑	黒褐色	良好	2mm以下の白色光沢粒、1mm以下の 墨色の粒を含む	
5	縄文 土器	ST 3-26	深鉢	口縁				ナデ	ナデ、二段の連続刻突文	塗	にぶい 橙	良好	3mm以下の灰褐色、1.5mm以下の 墨色光沢粒、微細な透明光沢粒を含 む	
6	縄文 土器	C VI b 99, 100	深鉢	口縁～ 脚部	14.3			ナデ、下から上方 のケズリ、その 後ナデ	工具の押圧による刻み、 横・斜方向の貝殻条痕文	明るめ 褐色	褐色	良好	3mm以下の灰褐色の粒、2mm 以下の墨色光沢粒、無色透明光沢粒を含 む	
7	縄文 土器	VI b 128	深鉢	口縁				斜方向のナデ	深い押圧溝、工具によ る連続刻突文、横・斜方向の 貝殻条痕文	塗	墨褐色	良好	0.5mm以下の灰白・黄白・褐色粒、 1mm以下の黒褐色、透明光沢粒を含む	
8	縄文 土器	B VI b 17	深鉢	口縁～ 脚部				ナデ	刻み、連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	灰褐色	にぶい 黄緑	良好	2mm以下の灰色の粒、1mm以下の墨 色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
9	縄文 土器	A VI b 1	深鉢	口縁～ 脚部	17.6			斜方向のナデの後 ヨコナデ	斜方向の連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	塗	褐色、 にぶい 黄緑	良好	1mm以下の灰白・黄白・透明光沢粒 を多量に含む	
10	縄文 土器	C VI b 88, 86	深鉢	口縁～ 脚部	17.0			横方向のナデの後 一帯斜方向のナデ	連続刻突文、横・斜方向の貝 殻条痕文	黒褐色	墨褐色	良好	0.5mm以下の灰白・黄白・灰色粒を 多量に含む	
11	縄文 土器	C VI b 26	深鉢	口縁～ 脚部	15.1			上革ナデ、斜方 向のヨコナデの後 斜方向のナデ	貝殻腹縁による連続刻突文、横・ 斜方向の貝殻条痕文	にぶい 黄緑	にぶい 橙	良好	5mm以下の黒褐色の粒、3mm以下の 灰褐色の粒、2.5mm以下の明赤褐、 墨色往復状光沢粒、白半透明・無色透 明、にぶい黄緑の粒を含む	
12	縄文 土器	B ブレンチ 2	深鉢	口縁～ 脚部				ナデ	連続刻突文、横・斜方向の 貝殻条痕文	にぶい 褐	塗褐色	良好	4mm以下の灰白粒・墨褐色、2mm以 下的透明光沢粒を含む	
13	縄文 土器	B VI b 85, 87	深鉢	口縁～ 脚部	15.9			斜方向の貝殻条痕	ハラ状工具による斜方向 の刻突文、口縁部は横方向 角、下部は斜方向の貝殻 条痕文、ススキ痕	にぶい 褐	にぶい 赤褐色、 黒褐色	良好	2mm以下で白色のにぶい黒色のある 軋磨紋、2mm以下で黄褐色の粒を含 む	
14	縄文 土器	B VI b 105, ST 3-21、2 24	深鉢	口縁～ 脚部				斜方向のケズリ、 下部はわずかに墨 変	口縫部はハラ状工具によ る刻突文、壁部の貝殻条 痕文、脚部は横・斜方向の 貝殻条痕文	にぶい 褐	にぶい 褐	良好	鐵錆な透明・半透明の光沢粒、4mm 以下の灰・褐・黒褐色の粒を含む	
15	縄文 土器	B VI トレ ンチA34	深鉢	口縁～ 脚部				やや斜方向のナデ	口縫部は工具による二段の 連続刻突文、下部はヨ コナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	良好	3mm以下の灰白・灰白の粒、2mm以 下的灰白・褐・赤褐色・黒褐色の粒、透 明・黑色の光沢粒を含む	
16	縄文 土器	B VI b 127	深鉢	口縁				斜方向のナデの後 斜方向のナデ、指 跡底	貝殻腹縁によるやや斜方 向の連続刻突文、斜・ 横方向の条痕文の後ナ デ	塗	塗	良好	2mm以下の灰白色、1mm以下の灰・ 褐・赤褐色・黒褐色の粒、透明光沢粒を 含む	
17	縄文 土器	B VI b 94	深鉢	口縁				斜方向のナデ	貝殻腹縁によるやや斜方 向の連続刻突文、斜・ 横方向の条痕文	にぶい 黄緑	灰褐色	良好	1mm以下の灰白・黄白・褐色・透 明光沢粒を含む	

第2表 遺物観察表(縄文土器2)

番号	種別	出土位置及び取上位置	基準	部 位	口徑(cm)	底径(cm)	壁高(cm)	横 構・調査		色 調		構成	施 士	備考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
17	縄文土器	B VI b 94	深鉢	口縁				横方向のナダ		にぶい 黄褐色	灰黒	良好	1mm以下の灰白・黄白・褐色化、透明光沢粒を含む	
18	縄文土器	C VI b 41	深鉢	口縁				横方向のナダ		にぶい 黄褐色	褐	良好	微細～1mmの透明・灰白・淡黃褐色、褐色の粒を含む	
19	縄文土器	B VI b	深鉢	口縁				横方向のナダ		にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細～1mmの透明・灰白・淡黃褐色、褐色の粒を含む	
20	縄文土器	B VI b 76	深鉢	口縁～ 底部				横方向の貝殻条痕 の後ナダ	貝殻剥離による透明削刃文、模・方方向の貝殻条痕文	明赤褐色	にぶい 灰褐色	良好	2mm以下の赤褐色化、1mm以下の灰白・灰褐色、灰色の粒、透明・黑色光沢粒を含む	
21	縄文土器	B VI b 54	深鉢	口縁～ 底部				ヨコナダ	貝殻剥離による横方向の 連続削刃文、横・斜方向の貝殻条痕文	褐	褐	良好	1mm以下の白・黄白・褐・赤褐色の粒、透明光沢粒を含む	
22	縄文土器	C VI b 29	深鉢	口縁～ 底部	17.9			横方向の貝殻条痕	貝殻剥離による透明削刃文、模・斜方向の貝殻条痕文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細～1mmの透明・灰の光沢粒、灰白・褐色・淡黃褐色の粒を多く含む	
23	縄文土器	C VI b 40	深鉢	口縁				やや斜方向の貝殻条痕、上部はその上にナダ	貝殻剥離による削刃の上 にナダ、下部は斜方向の 貝殻条痕	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細～1mmの透明・褐色の光沢粒、灰白・褐色・淡黃褐色の粒を含む	
24	縄文土器	B VI b 145	深鉢	口縁～ 底部	18.5			斜方向のケズリの 後ナダ	ヘラ等工具による削い叩き 跡があり、斜方向の貝殻条痕、 貝殻剥離による模・方方向の 連続削刃文	にぶい 赤褐色	黒褐色	良好	微細な黒色・透明光沢粒、1mm以下の灰・褐色の粒を含む	知観式、26と 同一個体と思われる
25	縄文土器	B VI b 115	深鉢	底部				斜方向のケズリ	貝殻剥離による模・方方向の 連続削刃文	にぶい 赤褐色	褐	良好	微細な黒色・透明光沢粒、1mm以下の灰・褐色の粒を含む	
26	縄文土器	B VI b 143, 147, 149, 150, 152	深鉢	底部～ 底部	10.4			斜方向のケズリ	ナダ、錐の剥離、貝殻 剥離による連続削刃文	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	良好	微細な黒色・透明光沢粒、1mm以下の灰・褐色の粒を含む	知観式、24と同一個体 と思われる
27	縄文土器	C VI b 67, 96, 129, 1 31, 133, 1 34, 135	深鉢	底部～ 底部	11.9			斜方向のナダ	横・斜方向の貝殻剥離による 貝殻条痕文	明赤褐色	褐、明 黄褐色	良好	2mm以下の灰白・透明光沢粒、1.5 mm以下の黒色光沢粒を含む	
28	縄文土器	B VI b 59, 43, 69	深鉢	底部	13.6			ナダ	横・斜方向の貝殻条痕	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	2mm以下の透明・黒色光沢粒、1mm以下の灰色化を含む	
29	縄文土器	A VI b 34	深鉢	底部		10.1		穂いナダ、風化化 れ、部分的に風化 物付着	丁寧なナダ	にぶい 黄褐色	暗赤褐色	良好	4mm以下の黒色・透明明瞭な物粒、3mm 大で赤褐色の粒、微細な石英粒を含む	
30	縄文土器	C VI b 8	深鉢	底部				横方向の貝殻条痕	斜方向の貝殻条痕（黒化 著しい）	にぶい 黄褐色	明赤褐色	良好	4mm程度のにぶい褐色の粒、3mm以下 の透明粒・赤褐色の粒、微細～0.5 mm以下の灰白・褐色光沢粒	角筒
31	縄文土器	B レンゲ 土器 3	深鉢	底部				ナダ	斜方向の貝殻剥離による 剥離、ヨコナダ	にぶい 褐	にぶい 褐	良好	1mm以下の白色光沢粒、微細な黄褐色 の粒を含む	
32	縄文土器	C VI b 23	深鉢	底部付 近				横方向の貝殻条痕	斜方向の貝殻条痕の後ナ ダ	暗赤褐色	褐	良好	4mm程度の赤褐色の粒、2mm以下の灰 白・明赤褐色の粒、無色透明・黒色光 沢粒を含む	
33	縄文土器	A VI b 31	深鉢	底部				ヨコナダ、穂いナ ダ	横方向の貝殻剥離による 貝殻条痕	にぶい 褐	にぶい 褐	良好	2mm以下の白色光沢粒及び赤褐色の 粒	
34	縄文土器	C VI b 65	深鉢	底部付 近				横方向の貝殻条痕	斜方向の貝殻条痕の後ナ ダ	暗赤褐色	にぶい 黄褐色	良好	2mm以下の褐・灰白・淡褐色の粒、無 色透明・黑色光沢粒を含む	
35	縄文土器	B VI b 17	深鉢	底部				ナダ	ナダ	にぶい 褐	にぶい 褐	良好	8mmの黒色不透明の巻片、5mm 大の輕石、灰色の粒	

第3表 遺物観察表（縄文土器3）

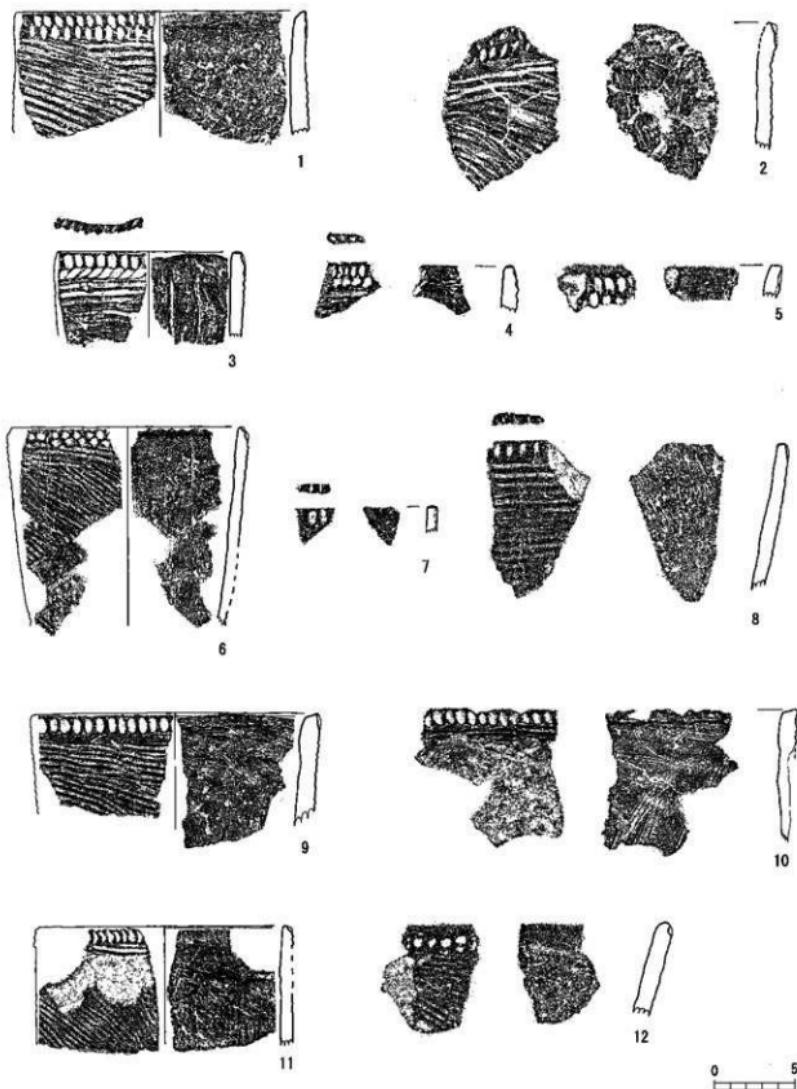
番号	種別	出土地名及 び取位置	器種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	横 保・側 露		色 国		構成	粘 土	備 考	
								内 面	外 面	内 面	外 面				
36	縄文 土器	C VII b 14, 18, 20	深鉢	底部		14.3		貝殻条痕の後相、 ナデ	横方向の後部方向の貝殻 条痕、貝殻条痕文化後 ナデ	褐色、 にぶい 黄緑	にぶい 良好	3mm以下の灰褐色の粒、2mm以下の 黒色・無色光沢粒、灰白・暗赤褐色 の粒を含む			
37	縄文 土器	C VII b 108, 111	深鉢	底部～ 底部		11.4		斜方向のナデ	斜方向の貝殻痕跡による 条痕等	にぶい 黄緑	にぶい 良好	5mm以下の灰白の粒、2mm以下の白 色光沢粒、3mm以下の灰色の粒			
38	縄文 土器	SI 3-10	深鉢	底部		16.4		招ナデの後ケズリ 又は船ナデ	風化著しく調整不明、底 部はアズリ又は船ナデ	にぶい 赤褐色	明褐	良好	微細な透明・半透明・黒色の光沢粒 を含む		
39	縄文 土器	B VII b 85	深鉢	底部		12.6		ナデ(風化著しい)	ナデ(風化著しい)	にぶい 褐色、 灰	にぶい 良好	微細～1mmの透明・褐色の光沢粒、 灰白・褐色・浅黄褐色の粒を含む			
40	縄文 土器	A VII b 24	深鉢	底部		13.4		貝殻条痕、一部貝 殻条痕の後ナデ	横方向の其該条痕	褐	にぶい 褐色、 灰	にぶい 良好	微細～1mmの透明・黒・褐色の光沢 粒、灰白・褐色・浅黄褐色の粒を含む		
41	縄文 土器	B VI トレ ンチ A 16, 1 7	深鉢	底部		15.6		風化著しく調整不 明	底部はナデ、外壁は風化 著しく調整不明	褐色	明赤褐	良好	2mm以下の赤白粒、2mm以下の透明・ 黒色光沢粒を含む		
42	縄文 土器	B VII 135	深鉢	底部		16.3		ナデ、指擦痕が多く 見られる	横方向の貝殻条痕	褐	にぶい 良好	4mm以下の灰白粒、2mm以下の透明・ 黒色光沢粒を含む			
43	縄文 土器	B VII b 110	深鉢	底部～ 底部				横方向のケズリの ようないナデ	やや斜方向の貝殻条痕	にぶい 良好	にぶい 良好	微細～1mmの透明・褐色の光沢粒、 灰白・褐色・浅黄褐色の粒を含む			
44	縄文 土器	B VII b 31 3-7, 13, 15	深鉢	底部		17.0		横方向の無い指ナ デ	横・斜方向の条痕	にぶい 赤褐色	にぶい 良好	微細な黄色光沢粒、2mm以下の黒・ 灰・黄褐色の粒を含む			
46	縄文 土器	C VII b 31	深鉢	口縁部 ～胸部				斜方向のケズリ	連続ヘラ跡み、斜方向の 貝殻条痕文の後ナデ、横 方向の貝殻痕跡による研 突文	褐	明赤褐色	良好	1mm以下の透明・半透明、黑色光沢 粒、2mm以下の灰・褐色の粒を含む	角質、液状口 締	
45	縄文 土器	A VII b 35	深鉢	口縁部 ～胸部				斜方向のケズリ	ヘラ等工具による連続削 み具、斜方向の貝殻条痕 の後、斜方向の貝殻痕跡 による研突文	褐	にぶい 良好	微細な透明・褐色光沢粒、半透明光 沢粒、1mm以下の灰・褐・褐色の粒 を含む	角質、液状口 締		
47	縄文 土器	B レンチ 1	深鉢	口縁部				斜方向の貝殻条痕 の後、ケズリ	ヘラ次工具による連続削 み具、斜方向の貝殻条痕 の後、横方向の貝殻痕跡 による研突文	明赤褐色	にぶい 良好	微細な透明・褐色光沢粒、2mm以下の 灰・黒・褐色の粒を含む	角質、液状口 締		
48	縄文 土器	C VII b 58	深鉢	口縁部 ～胸部				斜方向のケズリ	連続ヘラ跡み、斜方向の 貝殻条痕文のナデ、横 方向の貝殻痕跡による研 突文	褐	良好	微細な透明・褐色光沢粒、半透明光 沢粒、1mm以下の灰・褐・褐色の粒 を含む	角質、液状口 締		
49	縄文 土器	SI 3-12	深鉢	底部				縦ナデ	斜方向の貝殻条痕、 横方向の貝殻痕跡による連 続削み具、其該削刻削突文	明赤褐	にぶい 良好	4mm以下の褐色、3mmの大赤褐色の 粒、1mm以下のガラス質の藍物粒を 含む	角質		
50	縄文 土器	VII b 78	深鉢	底部				横方向のケズリ、 風化物付着	横方向の貝殻条痕による研 突文	褐色、 にぶい 赤褐色	にぶい 良好	2mm以下の透明光沢粒、1mm以下の 黑色光沢粒を含む	角質		
51	縄文 土器	B VII b	深鉢	底部				下から上へのケズ リ	斜方向の貝殻条痕、 研突文による研突文、 黒変	にぶい 褐色	にぶい 良好	微細な無色透明・黑色光沢粒、2mm 以下の灰・黒の粒を含む	角質		
52	縄文 土器	VII b 117	深鉢	胸部				ケズリと墨われる 文	斜方向の貝殻条痕、 横方向の貝殻痕跡による研 突文	にぶい 赤褐色	褐	良好	2mm以下の黒色粒、1mm以下の灰白 粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含 む	角質	
53	縄文 土器	C VII b 61	深鉢	胸部				斜方向のケズリ	横・斜方向の貝殻条痕の 後継部による貝殻痕跡 による研突文	褐	にぶい 赤褐色	1mm以下のガラス質・黑色光沢粒、藍物 粒を多く含む	角質		

第4表 遺物観察表（縄文土器4）

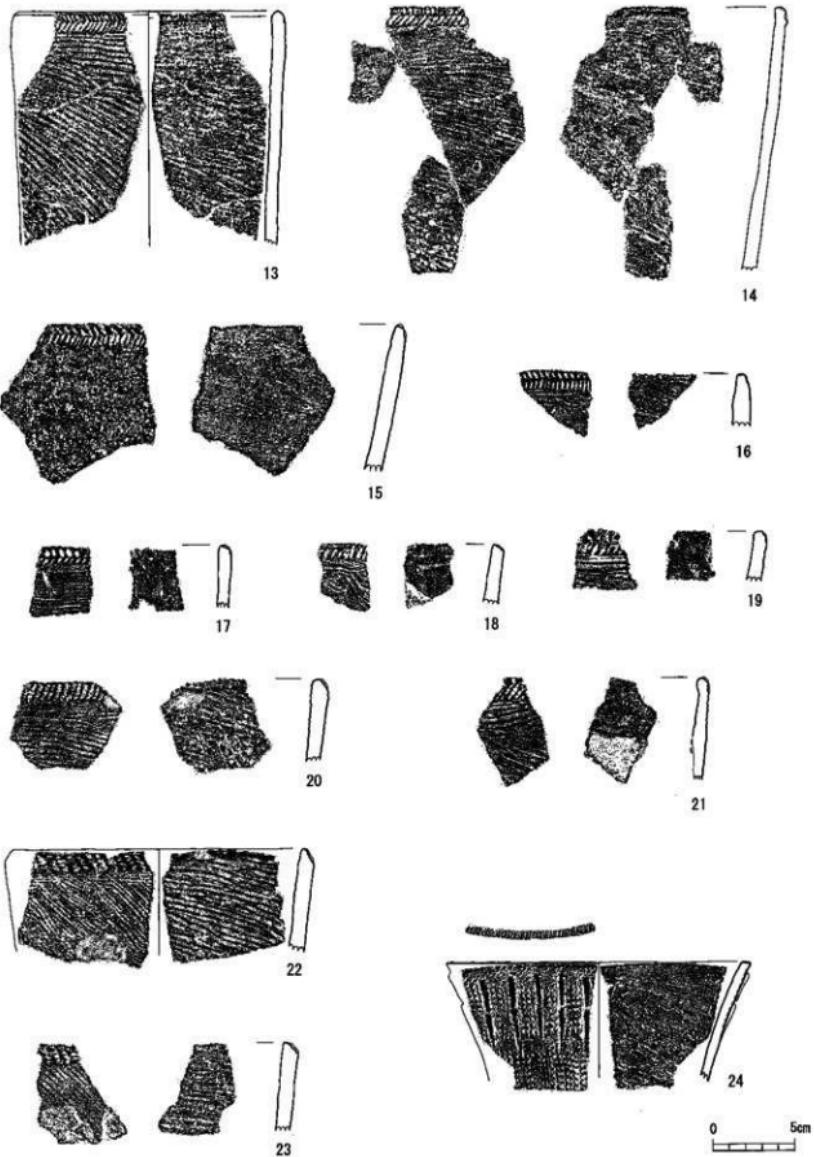
番号	種別	出土地区及 U取上位置	器種	部 位	山 横 (cm)	底径 (cm)	距高 (cm)	構 造・圖 雜		色 調		構成	胎 土	備 考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
54	縄文 土器	C VIb 5, 5 6	深鉢	胴部				下から上へのケズ リ	長方形の貝殻表面に嵌 れた貝殻底面による刻痕 文	明赤褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な褐色透明、黒色の粒、3mm以 下の茶色の粒を含む	角質
55	縄文 土器	A VI b 13	深鉢	胴部				下から上へのケズ リ、全体に墨文	斜方向の貝殻表面に嵌 れた貝殻底面によ る刻痕文	にぶい 黄褐色	明赤褐色	良好	微細な褐色透明、半透明、黒色の粒 を含む	角質
56	縄文 土器	A VI b 49, 50	深鉢	胴部				下から上へのケズ リ	横・斜方向の貝殻表面	にぶい 赤褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な褐色透明、半透明、黒色光沢 粒、2mm以下の黄灰、灰の粒を含む	角質
57	縄文 土器	A II -27, 174	深鉢	口縁部 ～胴部				横方向のナデの後、 斜方向のミガキ	横・斜方向の長いナデ、部分 的に斜方向のナデ	にぶい 黄褐色	暗赤褐色	良好	2mm以下で白色の光沢のある黒物質、 1.6mm以下で黑色の光沢物を含む	角質
58	縄文 土器	C VI b 142	深鉢	胴部				丁寧なヨコナデ	横円押摩文	にぶい 黄褐色、 灰褐色	にぶい 黄褐色	良好	7~5mmの灰白色粒、3mm以下の灰白・ 黄白・褐・赤・多孔・墨褐色の粒、 透明光沢粒を含む	角質
59	縄文 土器	B VI b 66, 61, 65, 67, 57	深鉢	口縁部 ～胴部	19.2			ヨコナデ、部分的 に工具痕、指痕有 り	丁寧なナデの後底の横 角を模方向に回転させな がら墨文	圓周面、 にぶい 黄褐色	無	良好	4mm大の灰白色粒を少量、2mm以下 の灰白、黄白、赤褐色、褐の粒、 透明光沢粒を含む	角質
60	縄文 土器	B VI b 9	深鉢	胴部				丁寧なナデ、ナデ	横・斜方向の擦挫痕状文	無	無	良好	3mm以下で褐色の粒、2mm以下 の灰白・黄白・黄褐色・墨褐色の粒、1mm 以下の墨白・金雲母の粒を含む	角質
61	縄文 土器	B VI b 22	深鉢	胴部				ヨコナデ、ナデ、 指痕底	横方向の擦挫痕状文	にぶい 赤褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下で白・黄白・灰色の粒、金 雲母の粒を多量に含む	角質
62	縄文 土器	A III 7, 8, 10	深鉢	口縁部 ～胴部	33.3			横・斜方向の貝殻表面	横・斜方向の貝殻表面痕、 三条の貼付突痕	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色、 褐灰	良好	3mm以下で白色・赤褐色、2mm以下 の乳白・透明光沢粒を含む	糞口式
63	縄文 土器	A II -14	深鉢	口縁部				横方向の貝殻表面 の後ナデ	横・斜方向の貝殻表面	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	1mm以下で白色光沢粒、1.5mm以下 の黄褐色の粒を含む	角質
64	縄文 土器	C VI b 1	深鉢	胴部				ナデ	横・斜方向の貝殻表面痕状文	暗赤褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰白、黄白、灰、褐、赤 褐色の粒を多量に含む	角質
65	縄文 土器	C VI b 103	深鉢	胴部				研・横方向のナデ	横・斜方向の条痕	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の赤褐色、2mm以下の灰 白・黄褐色・墨褐色、1mm以下の透明 光沢粒を含む	糞口式
66	縄文 土器	B トレンチ 1	深鉢	口縁部 ～胴部				斜方向のナデ、工 具痕が見られる	工具による連続削み、 斜方向のナデ、工具痕	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	1mm以下の白色光沢粒、微細な黄褐色 の粒を含む	糞口式
67	縄文 土器	SH-2	深鉢	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ、横方向の押摩 文、工具による連続削み 文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	1.5mm以下で白色的光沢のある黒物 質、1mm以下で黄褐色、黑色の粒を 含む	糞口式

第5表 石器計測表（縄文時代）

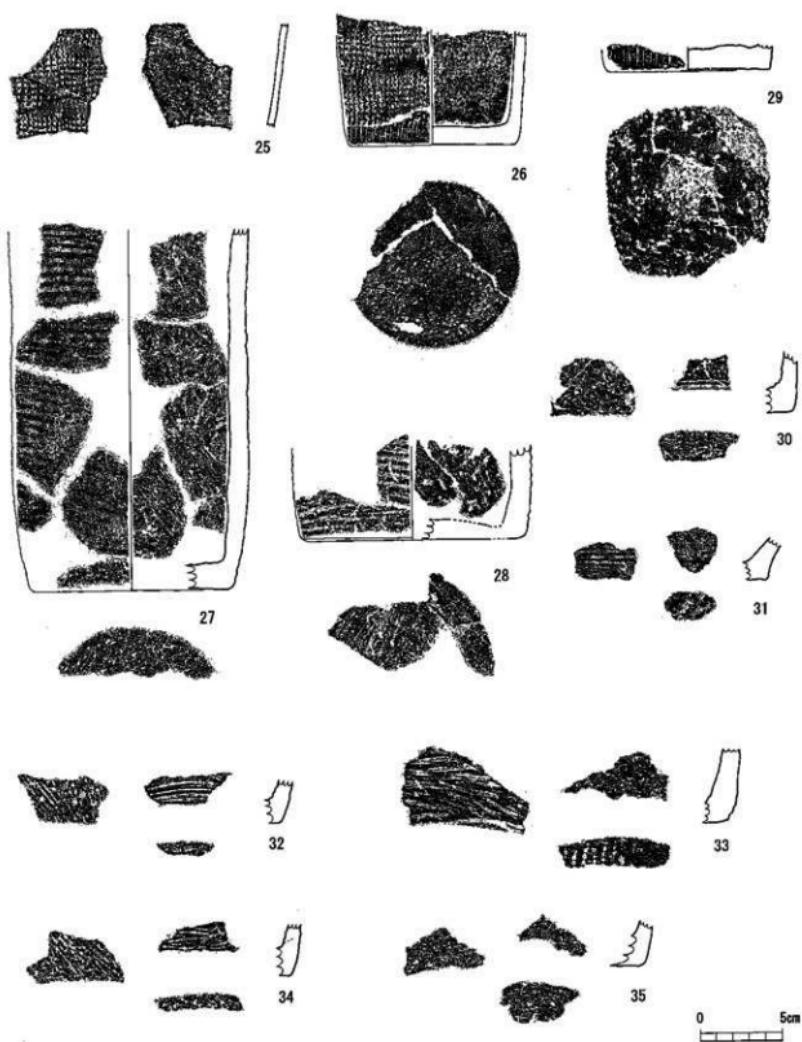
遺物番号	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
189	VI b 94	石鎌	2.4	2	0.35	2.7	黒曜石	
190	VI b 140	石鎌	1.95	1.1	0.35	1.2	黒曜石	
191	VI b 105	剥片	2.15	2.7	0.8	7.4	黒曜石	
192	A II 99	二次加工剥片	7.35	5.9	1.7	118.0	ホルンフェルス	



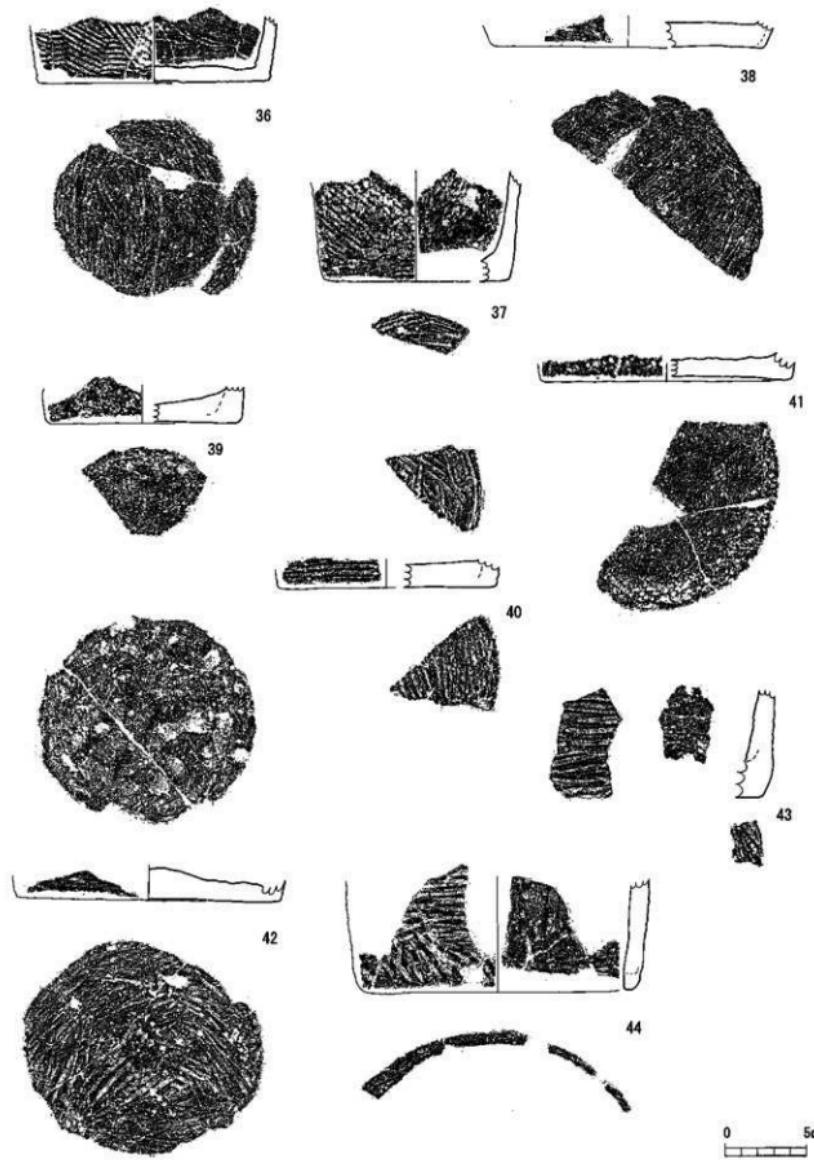
第12図 縄文土器実測図1 (S = 1 : 3)



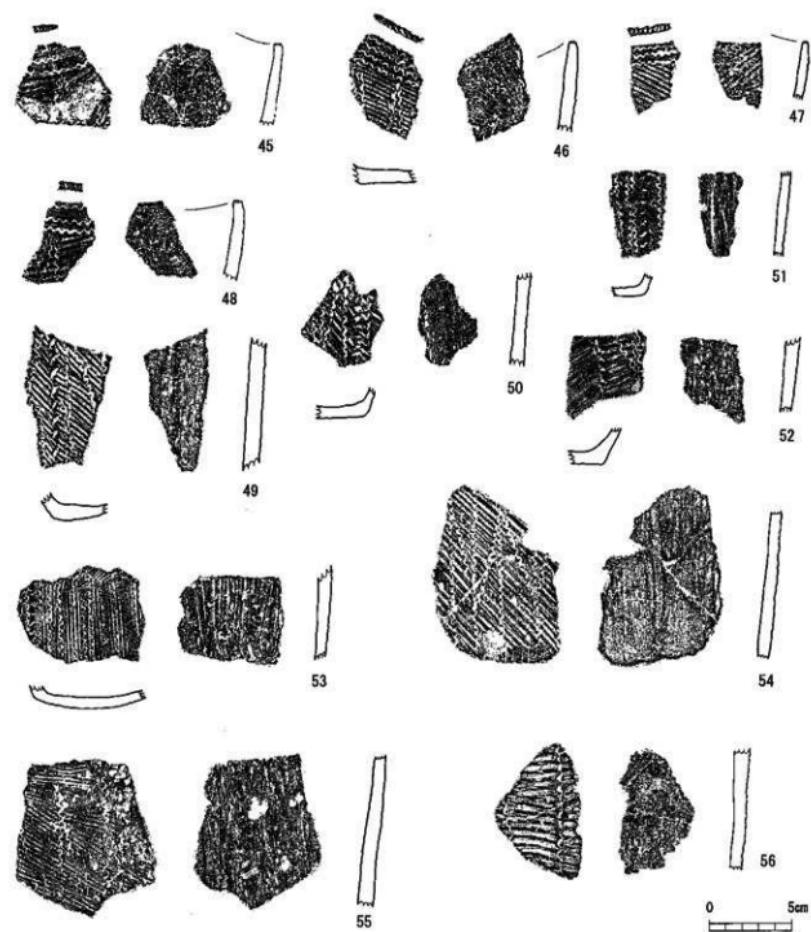
第13図 縄文土器実測図2 (S = 1 : 3)



第14図 縄文土器実測図3 (S = 1 : 3)



第15図 縄文土器実測図4 (S = 1 : 3)



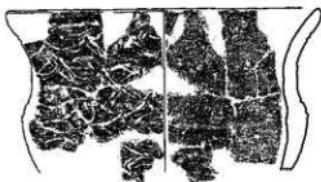
第16図 縄文土器実測図5 (S = 1 : 3)



57



58



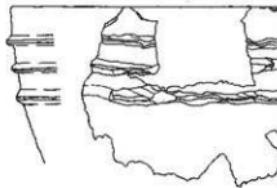
59



60



61



62



63



64



66



67

0 5cm

第17図 縄文土器実測図 6 (S = 1 : 3)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺物・遺構については第II層が遺物包含層となっており、遺構の検出は第III層の御池ボラ上面で行った。

(1) 遺構 (第18図)

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡6軒（内1軒は花弁状住居跡）、貯蔵穴1基、周溝状遺構3基が検出された。住居跡は埋土から出土した遺物から、全て弥生時代の後期以降の住居跡と思われる。

これらの遺構は全てA区から検出された。地形的に当遺跡周辺は北側を沖水川が流れており、土地区画整理事業が行われるまでは湿地帯となっていた。当遺跡は周囲より3mほど高い微高地になっており、居住区として適した場所となっているため集落が形成されたと思われる。

1号・3号竪穴住居跡や3基の周溝状遺構はB区との境にあり、B区とは約1mの高低差があるが、この段差は当時は存在せず後世に溝を掘る際に段差が生じたようである。可能性としてB区は北側に緩やかに傾斜しながら下っており、この削平された部分にもA区に続く遺構群があったと思われる。

竪穴住居跡 (SA)

1号住居跡 (SA 1) (第19図)

A区北端で検出された住居跡で、南側は1号周溝状遺構を切って造られている。東側は2号周溝状遺構の構を利用して築造されたと思われる。長軸約480cm、短軸約400cmで長軸は北に対して約40度東にずれている。硬化した床面を検出したが、西半分は風倒木により搅乱を受けている。遺物の点数は少なかつたが、住居内の埋土から壺の口縁部と底部、床面付近から台石が出土した。

2号住居跡 (SA 2) (第18図)

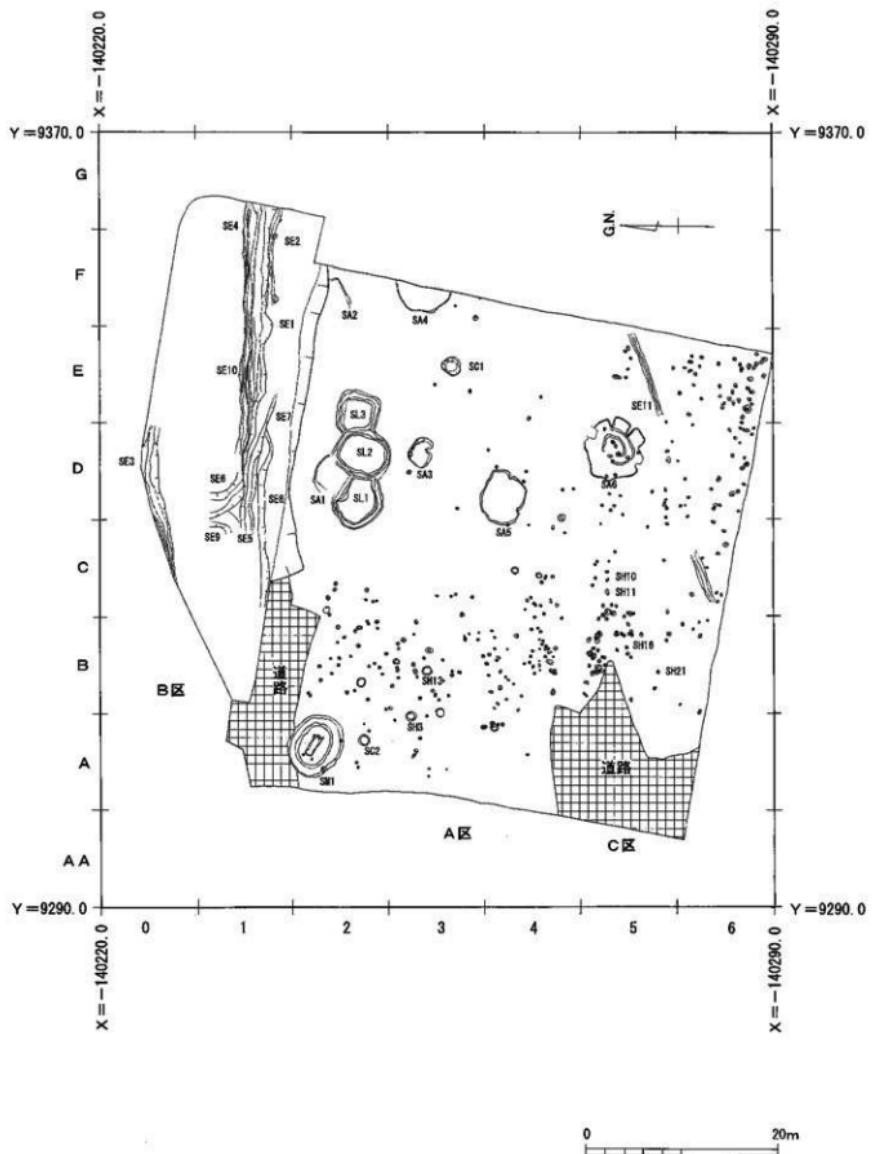
A区北東の隅にあり、遺物が多量に出土した。遺構上部はかなり削平されており、北半分もB区との段差で遺構自体消失しているなど、部分的にしか遺構の輪郭が検出されず、どのようなプランで造られているのか不明である。平面的に僅かに残った部分から推測して一辺が200cm前後の方形のプランかと思われる。推定される長軸は北に対して東へ約70度ずれている。壺類・鉢類が多く出土したが、削平の関係から細かい破片が多かった。石器類では台石と磨石、石包丁が出土した。

3号住居跡 (SA 3) (第20図)

2号周溝状遺構のすぐ南側に位置する遺構である。長辺300cm、短辺約220cm程度の小型の方形のプランであるが、南壁に間仕切り状の張り出しがある。北西の隅にピットを1個検出した。長軸は東に対して約15度南にずれている。硬化した床面を検出し、埋土からは壺類が出土した。

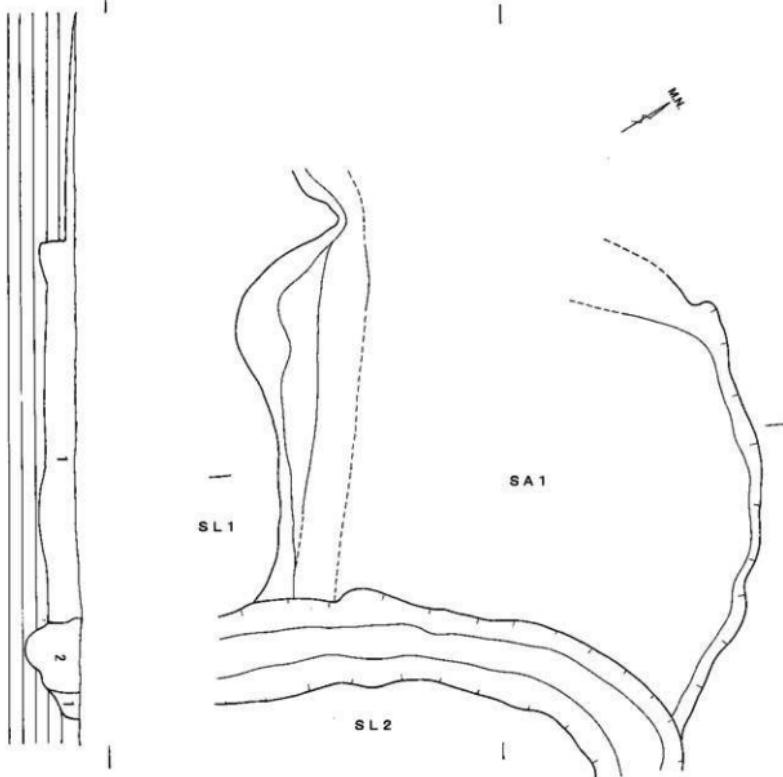
4号住居跡 (SA 4) (第20図)

A区東端で検出した住居跡で平面の半分以上は調査区外にある。広さは340cm×400cm以上であり、隅丸方形のプランと思われる。住居内北側にピットを1個検出した。長軸は北に対して約20度西にずれている。3号住居跡と同じく上部がかなり削平を受けており、掘り込みは10cm程度しかなかった。検出できた部分に関しては間仕切りは確認できなかった。床の硬化面を検出したがかなり凹凸がある。遺物はほとんど出土しなかった。

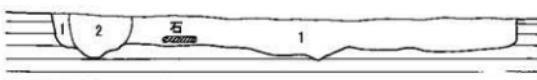


第18図 第Ⅲ層上面遺構分布図 (S = 1 : 500)

L = 158.800m —



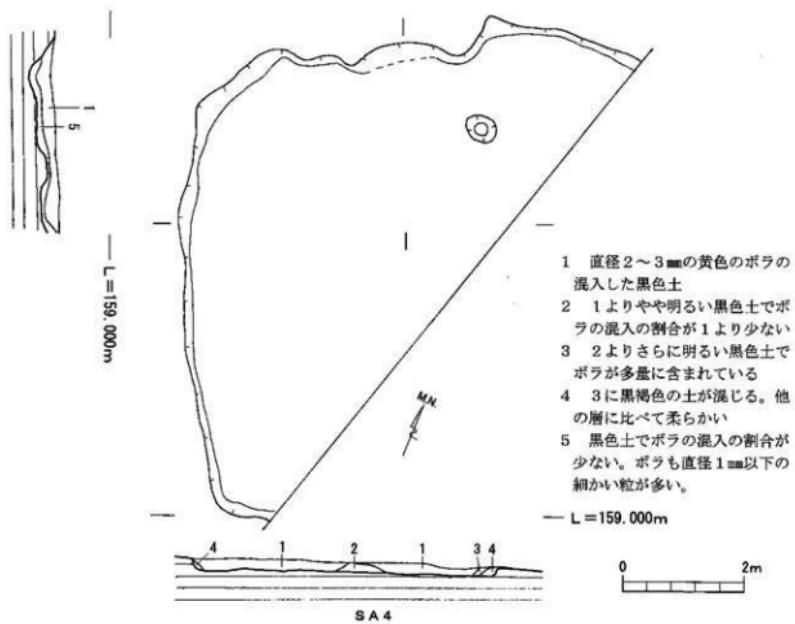
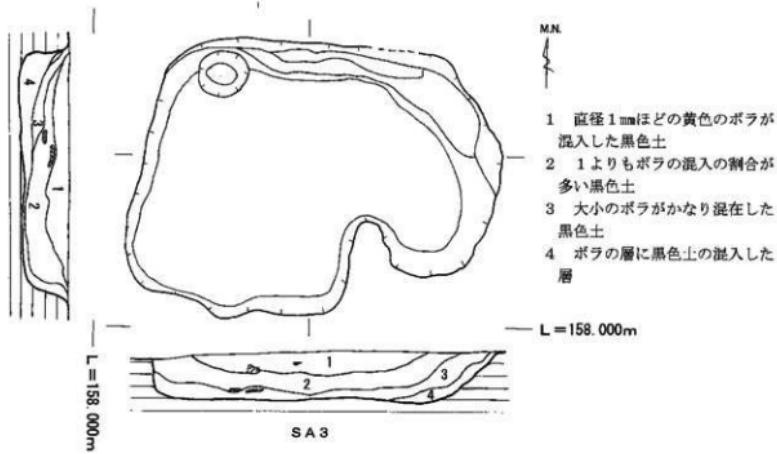
L = 158.800m —



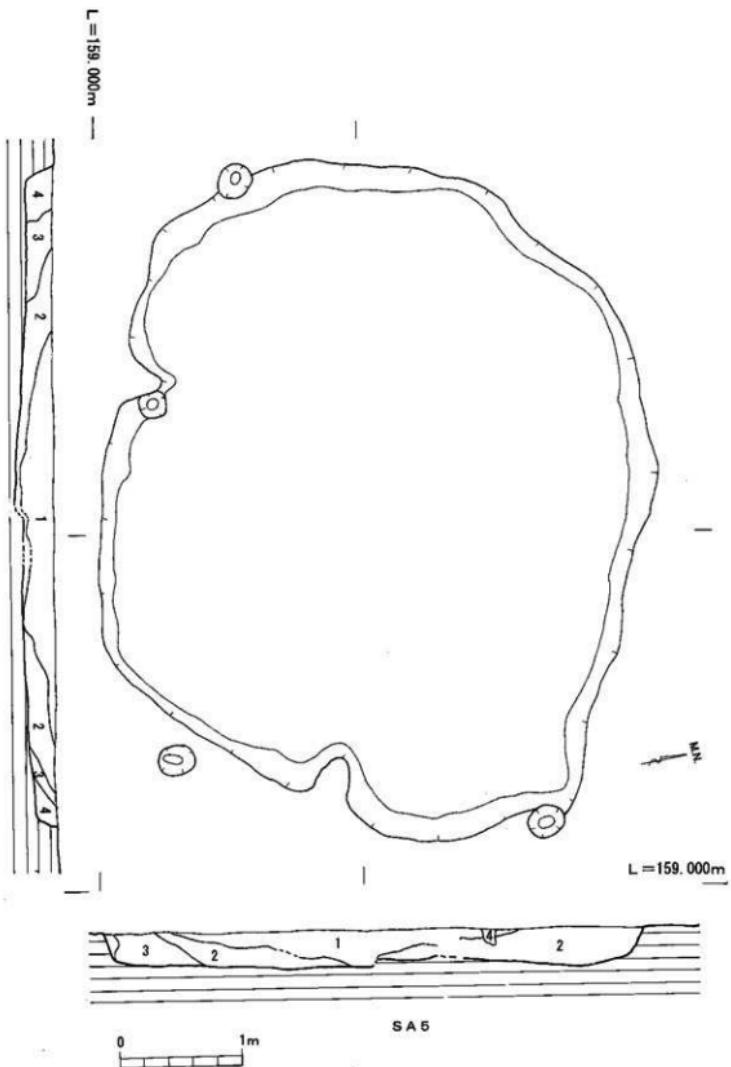
- 1 直径10~20mmの大粒の黄色い軽石が点在、直径5~10mmのオレンジ色の軽石と
直径1mm程度の白っぽい軽石が多量に含まれる。
2 SA 1を切っている溝の断面。1と同じ土質だが軽石の含有量が異なる。

0 2m

第19図 竪穴住居跡実測図1 (S = 1 : 40)

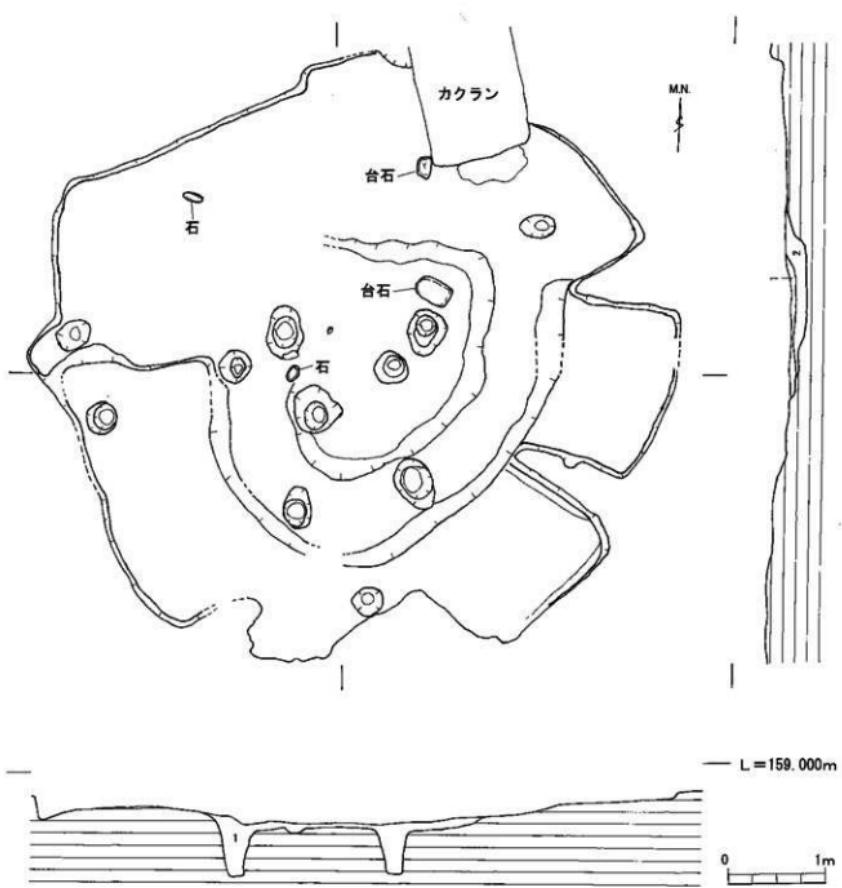


第20図 竪穴住居跡実測図 2 (S = 1 : 40)



- 1 直径2~3mmの黄色のボラの混入した黒色土
- 2 1よりやや明るい黒色土で、ボラの混入の割合が1より多い。
- 3 2よりさらに明るい黒色土でボラが多量に含まれている。直径1mm程度のボラも混じる。
- 4 3に黒褐色の土が混入する。他の層に比べて柔らかい。木根の痕と思われる。
- 5 黒色土でボラの混入の割合が少ない。ボラも直径1mm以下の細かい粒が多い。

第21図 壇穴住居跡実測図3 (S = 1 : 40)



- 1 黒褐色で黄色のボラを含む。しまりはあまりない。
3~10mm程度の炭化物を含む。
- 2 1と同質であるがボラの混入の割合が1より多い。

第22図 積穴住居跡実測図4 (S = 1 : 50)

5号住居跡（S A 5）（第18図）

A区ほぼ中央で検出した住居跡で、6軒の中で6号住居跡と並ぶ大型の住居跡である。短軸は東西方向に520cm、長軸は南北方向に460cmの方形に近いプランである。長軸はほぼ真東を向いている。硬化した床面を検出し、床面に近い深さから台石他の遺物を検出した。南側と東側に間仕切り壁かと思われる小さな張り出しがある。検出面からの掘り込みは約30cmで埋土が凹レンズ状に自然堆積していた。

6号住居跡（S A 6）（第22図）

6軒の中では一番南に位置する住居跡で、花弁状の張り出し部分を持つ。大型の住居跡で長さが最大部分で約700cm、最短部分で約620cmある。上部が削平を受けており、特に南側は平面的には花弁状の張り出しが判別できるが、掘り込みはほとんど分からぬ状態であった。張り出し部分から一段下がり、床面が検出され、中央部分はさらに一段下がっていた。この最下段の床の北側部分に台石が置かれた状態で出土した。床は硬化しており、柱穴を検出した。

貯蔵穴（S C 1）（第23図）

A区の東側、4号住居跡の5mほど南西に貯蔵穴を検出した。検出時は土坑かと思われたが、土層断面観察の結果、下方が広がっており袋状の貯蔵穴であることがわかった。

開口部の長径約180cm、短径約90cmの長円形で（検出面で一部が他の土坑に切られている）、床面の直径約180cmの円形、検出面から床面までの深さ約90cmである。床面から40cm～50cmはほぼ垂直に立ち上がりておりフラスコ状もしくはインク壺状の断面を呈する。開口部は一部が他の後世の土坑によって浅く切られており、また上部は削平されていることもあり、検出面から天井部までの長さは不明である。

遺物が確認できなかったので時代の確定は難しいが、4号住居跡や2号住居跡に近いことなどからこれらの住居跡と同時期に使用されていたものと思われる。

埋土は第II層の黒色土が流入して埋まっており、崩落はなくほぼ完全な形で残っていた。検出面での平面的な形状は円形の土坑と同じであり、半蔵するまでは土坑として調査をしていた。埋土ははつきり分層出来ないほど均一な状態であったが微かな違いで分けてみると8層に分けられた（第23図）。

これらの層はほぼ水平に分層される。これは埋土が流水とともに貯蔵穴に流れ込み、その後水だけが底や周囲の壁面から抜けて土だけが残ったものと考えられる。それが数回にわたって貯蔵穴が埋まるまで続いたと思われる。その間、もろいボラ層の壁面の崩落は見られないため、比較的短期間で埋まったものと思われる。

埋土の中に貯蔵物の痕跡の可能性もあり、埋土をふるいにかけたが、植物遺存体等何も検出されなかつた。住居が廃棄された時に貯蔵物は全て運び出され、その後自然に埋まっていたと考えられる。土層堆積の状況からも人為的に埋めた様子は見られなかつた。

周溝状遺構（S L 1～S L 3）（第24図）

1号住居跡の横に3基の周溝状遺構が検出された。同様の遺構が本遺跡の300mほど西にある都城市教育委員会が調査した池ノ友遺跡からも検出されている。

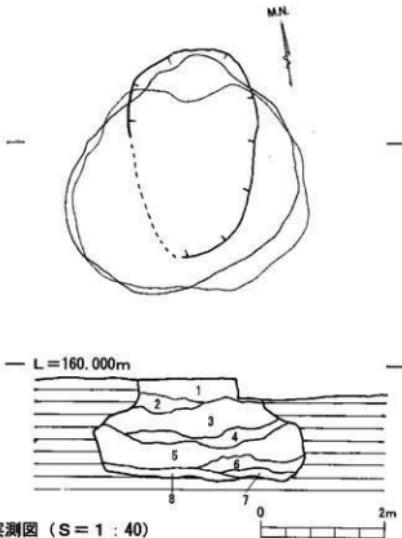
3基の遺構は一部が他の遺構に重なっており3連の周溝状遺構に見える。西側より1号周溝状遺構、2号周溝状遺構、3号周溝状遺構とする。周溝の埋土の堆積状況を見ると、中央の2号周溝状遺構が両

隣の遺構を切っており、3基の中では一番新しい遺構と言える。

両端の二つの遺構はどちらがより古いかは遺物等が出ておらず、分からなかった。3つの遺構とも上部はかなり削平されていると思われ、検出面では周溝以外はまったく何もなく、掘り込みや遺物等この遺構が何のために造られたのか推測する手がかりは得られなかつた。

西側の1号周溝状遺構は1号住居跡によって切られており、また1号住居跡と周溝の埋土はほとんど同じ種類の土であることから、時期差はあまりないと思われる。1号竪穴住居跡が出土遺物により弥生後期の遺構であると思われることから同時期の遺構ではないかと考えられる。また、他の二つの遺構も埋土は西側の遺構と同じであり、やはり弥生時代後期の遺構と思われる。

- 1 黄色土で1~2mmのボラ粒を若干含む。粘性のないしまった土でさらさらしている。
- 2 黒褐色土で直径1~4mmのボラ粒を若干含む。やや、粘性があり柔らかい。
- 3 黒色土で直径1~5mmのボラ粒を含む。しまりはあまりなく、削るとブロック状に崩れる。
- 4 黒色土で、直径1~3mmのボラ粒を含む。V層より若干ボラが少ない。若干粘性がありしまっている。
- 5 黒褐色土で直径1~4mmのボラ粒を多量に含む。しまっているが削るとぼろぼろ崩れる。粘性はない。
- 6 ボラ粒を含まない黒色土である。粘性があり、しまっている。
- 7 ボラ粒を若干含む黒色土で、あまりしまっておらず削るとボロボロ崩れる。やや粘性がある。
- 8 黒褐色土でボラ粒を多量に含む。あまりしまっていない。7層・8層は貯蔵穴の床面と考えられる。



第23図 貯蔵穴実測図 (S = 1 : 40)

(2) 遺 物

土器は竪穴住居跡を中心に調査区全体から出土している。削平・擾乱等で細かくなつた土器片が多かつたが、ある程度の大きさ・形を持つ74点を観察表に掲載した。

分類は器形で行ない、以下の5つに分類した。

I類	甕	68~89、93~107、109~111、114~132
II類	壺・小型壺	108、133~140
III類	高环	91、92
IV類	坏	112、113
V類	器種不明	141

量的に一番多かったのは I 類の甕で、S A 1、S A 2 をはじめ削平の激しい S A 4 を除きほとんどの住居跡から出土した。

1 号住居跡からは、胸部上部に三角形の突帯があり、口縁部が立ち気味で口唇部に窪みのある甕 (68・107) と底部 (69) の土器片 3 個が出土した。甕の特徴から弥生後期の土器と思われる。

2 号住居跡からは、大小 15 点の甕の口縁部や底部が出土した (70~82)。口縁部はわずかに外反したものが多い。弥生後期の土器と思われる。

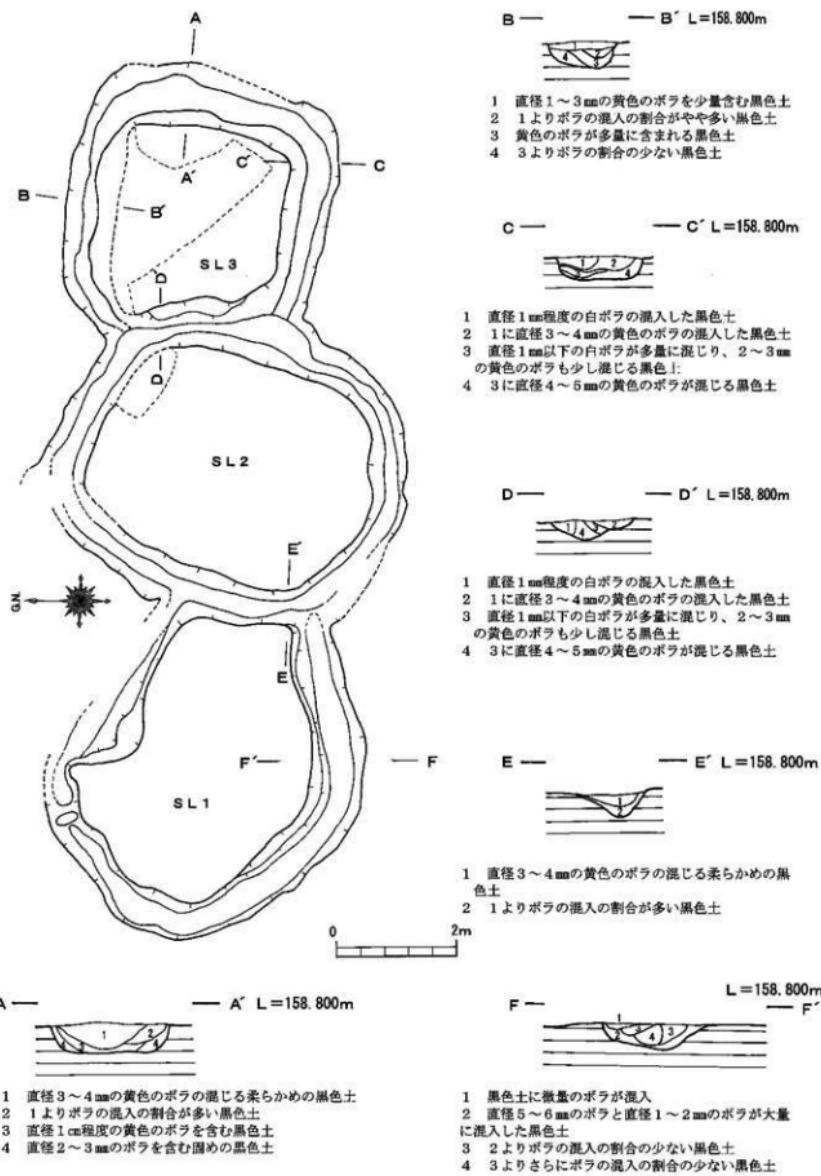
3 号住居跡は小型の住居跡だが、甕や壺など 11 点の遺物が出土した (83~92・102)。

5 号住居跡は刻目突帯を持つ甕が目立った (93・97・100・101・114)。

住居跡以外からも小形甕 (134、131) など弥生土器が出土した。134 は A 区東側のビットの中から出土した尖形の壺である。外面は底部を除いて全面に丁寧なナデを施してある。

141 は破片が小さく器形が判断できないが、櫛描の文様が施してある。

石器は S A 3 から石包丁の完形が 1 点 (201)、破片が 2 点 (別個体 202、203) 検出された。敲石・磨石は S A 5 を除くすべての堅穴住居跡から出土している。いずれも堅穴住居跡の床面近くから出土しており、堅穴住居跡に付随する遺物と思われる。



第24図 周溝状造構実測図 (S = 1 : 80, 断面図 S = 1 : 40)

第6表 遺物観察表（弥生土器1）

番号	種別	出土地区及び取上位置	器種	部 位	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	横 幅・調 度		色 質		構成	胎 土	備考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
68	弥生 土器	SA 1-11, 12, AES19, 330, 346, 348	甕	口縁部 ～胴部	30.7			横・斜方向のハケ メ、上部に遮断痕。 口部に僅かにス ス付着	口縁部：透い沈線状の僅 み、ヨコナデ、腹方向の ナデ、點付突起。全体に スス付着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	2mm以下の黄緑、赤褐色、墨緑の粒。 1mm以下の黄白、灰白、灰、褐色の 粒。透明光沢粒を多量に含む	
69	弥生 土器	SA 1-1	甕	底部		7.5		ナデ	ナデ、僅かにT.真底あり	権	権	良好	微細～2mmの透明光沢粒と灰白、に ぶい黄緑、黄緑の粒を含む	
70	弥生 土器	SA 2-14, 19, 28, 44	甕	口縁部 ～胴部	28.6			斜方向のハケメロ 縫合附近は側方向 のハケメ一部スス付 着	口縁部：ヨコナデ、ヨコ ナデ後ハケメ、一部スス 付着、貼付突起。縫合部 附近はヨコナデ後側方 のハケメ	にぶい 黄緑	性質、 墨緑	良好	3mm以下の灰、褐色の粒を含む。1 mm以下で白色半透明の軽地粒を含む	
71	弥生 土器	A II-116, 117, 133, , 171, 390, 404, 405, SA 2-5	甕	口縁部 ～胴部	21.1			横方向のハケメ	横方向のハケメの後模方 向のナデ、貼付目突起	にぶい 黄緑	にぶい 権	良好	2mm以下の黒色光沢粒、半透明光沢 粒、3mm以下の茶、灰、黄緑の粒を含む	
72	弥生 土器	SA 2-2, 3	甕	口縁部 ～胴部				ヨコナデ、横方向 のハケメ	ヨコナデ、横方向のハケ メ	灰黄	灰	良好	1mm以下で灰、黄褐色、赤褐色の 粒を含む	
73	弥生 土器	SA 2-24	甕	口縁部				ナデ	ナデ、スス付着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	3mm以下の灰、褐色の粒を含む	
74	弥生 土器	SA 2-12, 29	甕	胴部 ～底部		6.9		ナデ、一部遮断 痕、工具痕あり	横・斜・縦方向のハケメ、 ナデ、底部附近指痕痕 あり、一部スス付着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	7mm以下の褐色粒3mm以下の乳白色、 2mm以下の黒色光沢粒を含む	
75	弥生 土器	SA 2-15, 38, 43	甕	底部		7.5		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	3mm以下の灰、褐色の粒を含む	
76	弥生 土器	SA 2-32, 34, 36	甕	口縁部 ～胴部	21.4			ナデ?風化が著し い	ナデ、横方向のハケメ、 スス付着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	6mm以下の灰、灰、黄緑、褐色の粒 を含む	
77	弥生 土器	SA 2-6, 2 3, 48	甕	口縁部 ～胴部	24.1			墨衣、ナデ、胴部 下部に指痕痕	横方向のハケメ、スス付 着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	良好	1mm以下の透明、黒色光沢粒、5mm 以下の灰、黄緑、茶、褐色の粒を含む	
78	弥生 土器	SA 2-50, 53	小型 甕	口縁部 ～胴部	17.1	4.6	15.5	ナデ、横・縦方向の ナデ	ナデ、横・縦方向の ナデ	ナデ、スス付着	にぶい 黄緑	良好	微細な2mm以下の半透明な粒、灰、 茶の粒を含む	
79	弥生 土器	SA 2-4	小型 甕	口縁部 ～胴部	12.1	5.9	13.6	工具による下から 上方の下端など 口縁部に指痕 痕、指ナデ	底方向のナデの後ヨコナ デ、スス付着	にぶい 権、灰 黄緑	にぶい 黄緑	良好	2mm以下の灰白、黄白、灰、褐、灰 緑、墨緑、褐色の粒、1mm以下の透 明光沢粒を多量に含む	
80	弥生 土器	SA 2-36	甕	底部		6.0		ナデ、工具痕あり	ナデ、縦方向のミガキ	灰黄	にぶい 黄緑	良好	微細な透明、金色、黑色光沢粒、1 mm以下の灰、黄灰、褐色の粒を含む	

第7表 遺物観察表（弥生土器2）

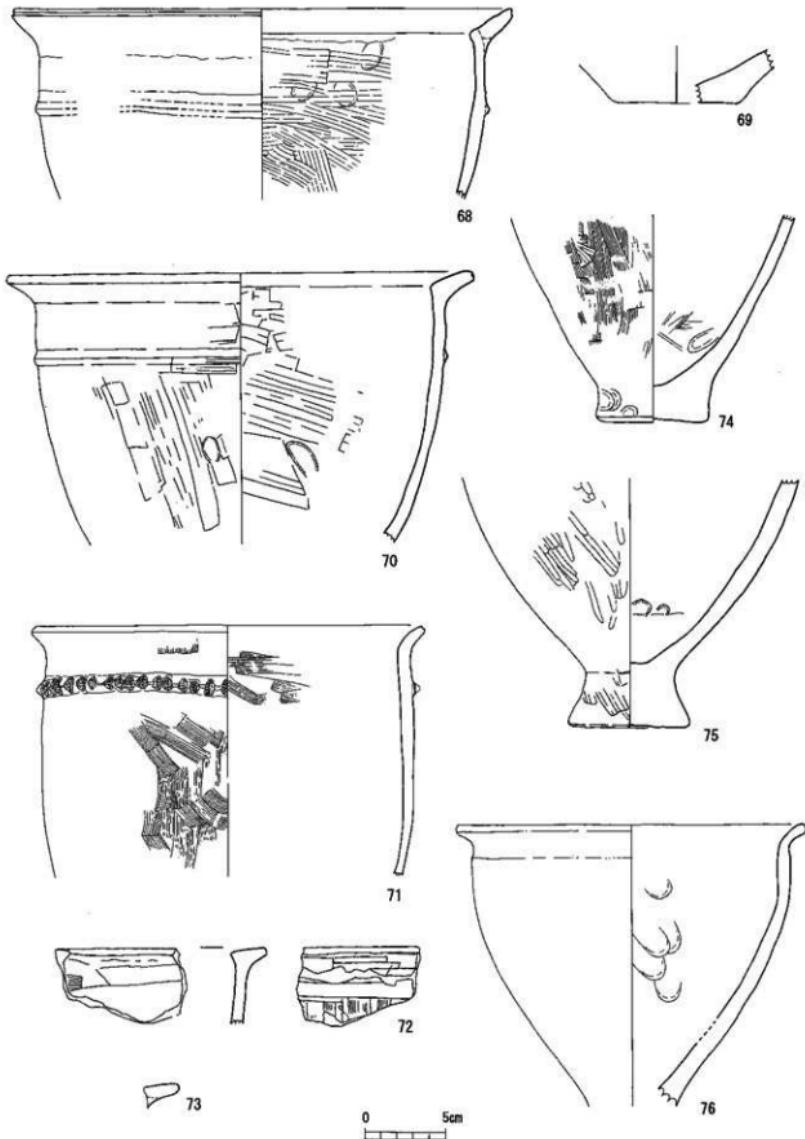
番号	種別	出土地区及び取上位置	器種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	施 槟・調 整		色 調	焼成	胎 土	備 考	
								内 面	外 面					
81	弥生 土器	SA 2 - 54	壺	底部		7.1		ナデ、指痕あり、 裏裏	ナデ、指痕あり、 裏裏	にぶい 青緑	良好	濃緑な透明・半透明・白色光沢、 2mm以下の灰・灰黄・褐色の粒を含む		
82	弥生 土器	SA 2 - 31	壺	底部		7.7		ナデ、多量のスス 付着	ナデ、斜方向のT工具によ るナデ	にぶい 青緑	良好	3mm以下の透明・半透明・黑色光沢 粒、2mm以下の灰・灰黄・褐色・黑 の粒を含む		
83	弥生 土器	SA 3 - 189	壺	口縁部 ～脚部	19.1			ヨコナデ、横方向 のハケメ	横方向のハケメ、薄くス ス付着	にぶい 青緑	良好	6mm以下の灰色、褐色の粒を含む		
84	弥生 土器	SA 3 - 77	壺	口縁部 ～脚部				黒化著しく調査不 明	黒化著しく調査不 明	にぶい 青緑	良好	5mm以下の灰・褐色の粒を含む		
85	弥生 土器	SA 3 - 129	壺	口縁部 ～脚部				ナデ、斜方向のハ ケメ	黒化著しく調査不 明、ス ス付着	にぶい 青緑	良好	6mm以下の褐色、5mm以下の 褐色粒を含む		
86	弥生 土器 3	SAS. A F 3	壺	口縁部 ～脚部				横・斜方向の工具 ナデ、斜方向のハ ケメ	横・斜方向の工具ナデ、 斜方向のハケメ	にぶい 青緑	良好	5mm以下の茶・黒・灰・褐色の粒を 含む		
87	弥生 土器 172	SA 3 - 99, 61	壺	口縁部 ～脚部	8.0			ナデ	ヨコナデ、斜方向のミガ キ	にぶい 青緑	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む		
88	弥生 土器 106	SA 3 - 90, 106	壺	脚部				ナデ、指痕あり、 一部に工具痕あり	綫・斜方向のミガキ	にぶい 青緑	良好	微細な透明光沢粒、1mm以下の灰・ 褐色の粒を含む		
89	弥生 土器 56, 59, 61, 62, 63, 108, 107, AII - 443, 446	SA 3 - 44, 46, 48, 61, 56, 59, 61, 62, 63, 108, 107, AII - 443, 446	壺	脚部～ 底部		7.5		ナデ、指痕ナデの痕 が残る	黒化著しく調査不 明	灰白 にぶい 青緑	良好	1mm～5mmの褐色・灰白の粒を多く 含む		
90	弥生 土器	SA 3	器種 不明	底部		5.9		ヨコナデ、ハケメ	ミガキ	にぶい 青緑	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む		
91	弥生 土器 100	SA 3 - 88, 100	高杯	口縁部 ～脚部				横・斜方向のミガ キ、黒共	横・斜方向のミガキ、口 唇部はヨコナデ	にぶい 青緑、 オブリ グ	良好	微細～2mm大的褐色・灰白の粒を含む		
92	弥生 土器 171	SA 3 - 83, 171	高杯	口縁部 ～脚部				横方向のミガキ、 黒共	斜方向のミガキ	黒共	良好	微細～2mm大的褐色・灰白の粒を含む		
93	弥生 土器 50	SA 5 - 50	壺	口縁部 ～脚部				横方向のナデ、斜 方向のハケメの上 をナデ削除	スリフ痕、斜方向のナデ、 貼付突痕、斜方向のハ ケメ	にぶい 青緑、 にぶい 青緑	良好	微細～2mm大的透明光沢粒、白灰・乳 白・黒・褐色・赤褐色の粒		
94	弥生 土器 A II - 208	壺	口縁部					ナデ	ナデ	灰共	良好	4mm以下の光沢粒、3mm以下の非 光沢粒		
95	弥生 土器 C SE 1	壺	口縁部					ナデ、わずかに擦 れ	ナデ	にぶい 青緑	良好	微細な半透明光沢粒、8mm人の褐色 の粒、2mm以下の灰・灰の粒を含む		
96	弥生 土器	A II - 63	壺	口縁部				ナデ	口唇部にわずかに 瘤み、わずかに擦 れ	にぶい 青緑	良好	1mm以下の透明・黑色光沢粒、2mm 以下の黒・灰・褐色の粒を含む		
97	弥生 土器	SA 5 - 2	壺	口縁部 ～脚部				横方向のハケメ	ヨコナデ、斜方向の褐色 の後ヨコナデ、斜方 向の角付斜突痕、突起部 り付け後ヨコナデ	灰共、 にぶい 青緑	良好	2mm以下の灰白・灰・黄青・赤褐 ・褐色の粒を多量に含む		
98	弥生 土器 A II - 472, 507	壺	口縁部 ～脚部					横・斜方向の工具 ナデ、斜方向のハ ケメ	横・斜方向の工具ナデ、 斜方向のハケメ、スス付着	にぶい 青緑、 にぶい 青緑	良好	4mm以下の茶・黒・灰・褐色の粒を 含む		
99	弥生 土器 561, 563, 565, 566, 568, 584, 591	AS55, 565- 561, 563- 565, 566- 584, 591	壺	口縁部 ～底部	29.0	9.7	24.0	斜方向のハケメの 後横方向のミガキ、 指痕方向あり	ナデ、横方向のミガキ、 貼付突痕、ハケメの後斜 方向のミガキ	穂	にぶい 青緑	良好	6mm以下の金色光沢粒、4mm以下の 黒色・透明光沢粒、3mm以下の灰白 色粒を含む	
100	弥生 土器	SA 5 - 23	壺	口縁部 ～脚部				ナデ、斜方向 のハケメ、黒共	ナデ、スス付着	黒	にぶい 青緑	3mm以下の灰・褐色の粒を含む		
101	弥生 土器	SA 5 - 42	壺	口縁部 ～脚部				ヨコナデ、横方向 のハケメをナデ削 除し、指痕	ヨコナデ、指痕、剥落、剥 離付突痕	にぶい 青緑	良好	4mm以下の赤褐色・2mm以下の灰 白・青・黑褐色・透明光沢粒を含む		
102	弥生 土器	SA 3 - 11, 12	壺	口縁部 ～脚部	32.6			ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ、一部ス ス付着	にぶい 青緑	良好	6mm以下で灰色の粒、2mm以下で赤 褐色粒を含む		

第8表 遺物観察表（弥生土器3）

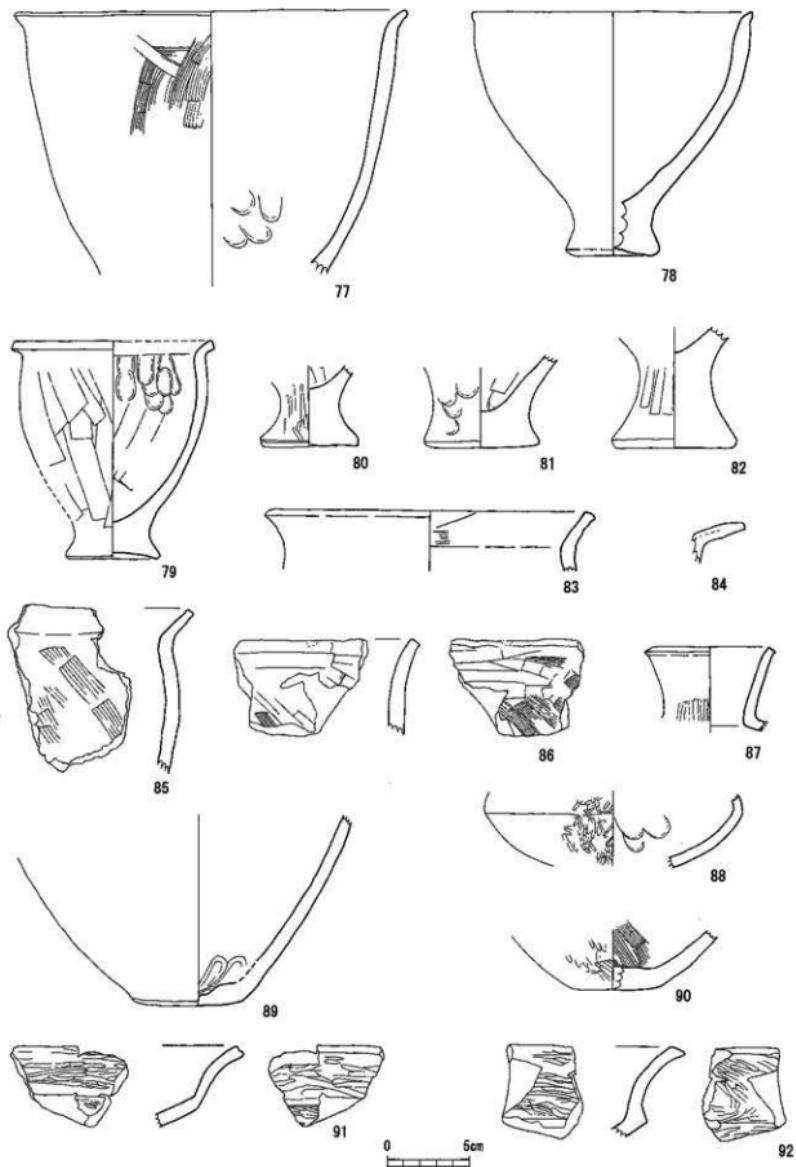
番号	種類	出土地名及び取上位置	器種	部位	H径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	横・縦・側		色調		組成	黏 土	備考
								内面	外面	内面	外面			
103	弥生 土器	A-II-580	壺	口縁部 ～胴部				横方向のナデ、横 斜方向のハケメ、 盛り向か向のナデ	横方向のナデ、横斜方 向のハケメ、貼付突 起	にぶい 黄褐色、 黒褐色、 暗灰	良好	3mm以下の赤褐色、2mm以下の黒 灰斑、1mm以下の乳白色、無鉛の透 明光沢を含む		
104	弥生 土器	A-II-100, 109, 111	甕	腰部 ～底部				横方向のハケメ、 ナデ、一部黒度	ヨコナデ、斜日貼付突 起、 スス付唇	にぶい 黄褐色、 暗灰	良好	1mm以下の灰白、灰、褐、赤褐色を 含む		
105	弥生 土器	A-II-204, 255	壺	口縁部 ～腰部				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰、褐色の粒を含む		
106	弥生 土器	A-II-666, 478, 532	壺	胴部				横・斜方向のハケ メの後、斜部方 向のナデ	横方向のミガキ、二条の 凹線状の溝のある貼付 突起	にぶい 褐	良好	3mm以下の灰白色、2mm以下の黄 白、褐、赤褐色、金色、透明光沢 を含む		
107	弥生 土器	SA-1-35, A II-327	甕	腰部				上部に指痕痕、全 体にハケメ	ヨコナデ、一条の貼付突 起	にぶい 黄褐色	良好	4mm程の明褐色の粒、3mm以下の灰 褐色、壁にぶい銀の粒、2mm以下の 黒灰、壁、半透明の粒を含む		
108	弥生 土器	A-II-409, 410	小型 壺	口縁部 ～腰部	12.4			ヨコナデの後、工 具による横方向の ナデ	ヨコナデの後、工具によ る、下から上の削り状 のナデ	灰褐色	良好	4mm以下の褐色、2mm以下の灰白、 灰、黃褐色の粒、透明光沢を含む		
109	弥生 土器	A-II-40, 41, 42, 43, A-II-568, 569, 571	壺	胴部				ナデ、一側に粘着 不規則のアラカ又は 粗面感と思われる 凹凸が全体的にあつた 所	横方向のナデ、斜方向の ハケメの後ナデ消し、一 条の施行した貼付突 起	にぶい 黄褐色、 にぶい 褐	良好	微細～3mmの透明、墨の光沢粒、 灰白、黒灰、にぶい赤褐色の粒を多く 含む		
110	弥生 土器	A-II-532, A-II-65, 68, 70	甕	腰部 ～底部		7.6		工具ナデ、粗面感 あり	横方向の工具ナデ、ナデ	にぶい 黄褐色	良好	微細な透明、墨、金色の光沢粒を含 む		
111	弥生 土器	664, A-II- 77	甕	腰部 ～底部		6.1		ナデ	ナデ	灰、褐 暗灰	良好	5mm以下の灰褐色の粒を含む。2mm 以下の透明光沢粒を含む		
112	弥生 土器	A-555, 556	壺	底部		7.6		ナデ、工具痕あり	ハケメの後ミガキ、	にぶい 黄褐色	良好	2mm以下で灰褐色、1mm以下で赤褐色 の粒を含む		
113	弥生 土器	A-II-521, 540, A-II- 66, 77	甕	底部		8.1		ナデ、工具痕あり	ナデの後ミガキ、一部ス 付唇	暗灰褐色	良好	4mm以下で灰褐色、2mm以下で半透明 の粘物質の粒を含む		
114	弥生 土器	SA-5-13	甕	底部		6.2		ナデ、指痕痕あり、 黒化等しい	ハケメの後ミガキ、単位 は不明	にぶい 黄褐色	良好	5mm大的灰色の粒、3mm以下の灰、 褐色の粒を含む		
115	弥生 土器	A-II-60, 62, 67, 68, 69, 627, 530, 542	甕	口縁部 ～胴部				横・斜方向の断毛 ナデ、下部は黒度	口縫部：ヨコナデ、全体 に縦方向の剥毛ナデ、上 部はその上にヨコナデ、 一条の貼付突起	にぶい 黄褐色、 黒褐色	良好	4mm以下の黄褐色の粒、3mm以下の灰褐色、 赤褐色の粒、1mm以下の白色 光沢粒を含む		
116	弥生 土器	A-II-291	甕	口縁部 ～底部				やや斜方向のハケ メ	ヨコナデ、横方向のハケ メ、斜日貼付突 起	褐	良好	3mm大的黑色粒、1mm以下の灰白、 灰、褐、墨褐色、透明、墨色光沢 粒を含む		
117	弥生 土器	SE1	甕	口縁部				ナデ	ナデ	褐	良好	5mm大的褐色の粒、2mm以下の灰、 黄褐色、褐色の粒を含む		
118	弥生 土器	B-II-1	甕	口縁部				横方向のナデ、斜 方向のナデ	横方向のナデ	にぶい 黄褐色、 暗灰	良好	5mm以下の灰白、灰黄褐色、4mm以 下的墨色光沢粒、無鉛の透明光沢粒 を含む		
119	弥生 土器	A-II-456	甕	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ		良好	3mm大的黑色粒、1mm以下の灰白、 墨褐色、透明光沢粒を含む		
120	弥生 土器	A-II-388	甕	口縁部				ヨコナデ、薄くス ス付唇	ヨコナデ、薄くスス付唇	灰褐色	良好	2mm以下で白色、1mm以下で墨色 の純い光沢粒を含む		
121	弥生 土器	A-II-189	甕	口縁部				ヨコナデ、指痕ナデ、 一部弱いヨコナデ、 スス付唇	ヨコナデ、ナデ、スス付 唇	灰褐色	良好	5mm大で赤褐色の粒、2mm以下で白 色の純い光沢粒、1mm以下の黄褐色 の粒		

第9表 遺物観察表（弥生土器4）

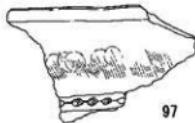
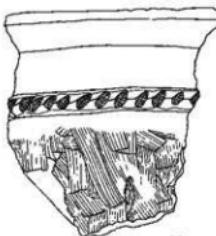
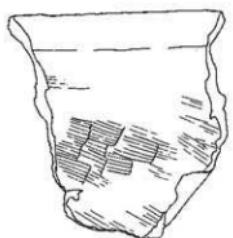
番号	種別	出土地区及 U取上位数	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	模様・圖案		色調		焼成	胎 土	備考
								内面	外面	内面	外面			
122	弥生 土器	B	甕	口縁部				ナデ、基底	ナデ、スス付着	黒褐色、 灰褐色	馬場	良好	2mm以下の墨褐色、微細な透明光沢粒を含む	
123	弥生 土器	A II-81, 91, 93	甕	口縁部～瓶部	21.3			ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	橙、灰 褐色	馬場	良好	3mm程度の墨褐色の粒を含む、2mm以下の無色透明光沢粒を含む	
124	弥生 土器	A II-85, 86	甕	口縁部～瓶部	23.7			ヨコナデ、ナデ、 一帯に指紋、少 量の化物付着	ヨコナデ、横方向のナデ、 スス付着、一条の貼付突 起	橙、灰 褐色	にぶい 程	良好	微細～2mmの透明・金色の光沢粒、灰白・褐色・褐灰色、3mm弱後の 明瞭な褐色の粒を含む	
125	弥生 土器	A II-322, 338, 339	甕	口縁部～瓶部				横方向のナデ、斜 方向のハケメ、指 痕跡	スス付着、横方向のナデ、 貼付突起、斜方向のハケ メ	にぶい 黄褐色、 灰褐色	馬場	良好	2mm以下の赤褐色、1mm以下の灰白・ 黒褐色、1mm以下の透明光沢粒を含 む	
126	弥生 土器	A II-356, 358	甕	口縁部				ヨコナデ、押正印	ヨコナデ、履ナデ	黒褐色	にぶい 程	良好	3.5mm以下の灰色、2mm以下の赤褐色、 1.5mm以下の金色の颗粒粒を含 む	
127	弥生 土器	A II-126	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい 程	にぶい 程	良好	1mm以下の金色光沢粒、2mm以下の 黄褐色・褐色・灰の粒を含む	
128	弥生 土器	CII	甕	口縁部				横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい 程	馬場	良好	2mm以下の灰褐色、1mm以下の黑色 光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
129	弥生 土器	A II-227	甕	口縁部				横方向のナデ、之 ガキ	ナデの後々ガキ	にぶい 黄褐色、 黑褐色	にぶい 黄褐色、 黑褐色	良好	2mm以下の黒・赤褐色の粒、微細な透 明光沢粒を含む	
130	弥生 土器	A II-166	甕	口縁部～瓶部				横方向のナデ、横・ 斜方向のハケメ	横方向のナデ、指痕跡、 斜方向のナデ、貼付突 起	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰白色、2.5mm以下の赤 褐色、微細な透明光沢粒を含む	
131	弥生 土器	A-534, 562, 592	甕	口縁部～瓶部				横方向のナデ、横・ 斜方向のハケメ	横方向のナデ、横斜方向 のハケメ、貼付突起	灰褐色	にぶい 黄褐色、 黑褐色	良好	3mm以下の赤褐色、2mm以下の黑 褐色、1mm以下の乳白色、微細な透 明光沢粒を含む	口縫部等に凹 みあり
132	弥生 土器	B	甕?	瓶部～ 底部				ハケメ	ハケメ、基底	黒褐色	にぶい 黄褐色	良好	4mm以下の黒・褐色の粒を含む	
133	弥生 土器	A566, A II- 42, 43	瓶 壺	口縁部 ～底部				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の黒・褐色の粒を含む	
134	弥生 土器	A II-491	小盤 甕	元形	4.6	4.3	10.6	ナデの後ハケメ、 口縁部付近に指痕 跡	口縁部に浅い沈澱、ナデ の後ミガキ	にぶい 黄褐色、 黑褐色	にぶい 黄褐色、 黑褐色	良好	3mm以下で光沢のある颗粒粒、2mm 以下の金色・白色光沢粒を含む	表面に凹みあ り
135	弥生 土器	A II-79, 91, A-560, 562, 565	甕	口縁部～瓶部	9.9			横方向のナデ、帶 底灰	横方向のナデ	黒褐色	にぶい 黄褐色	良好	2.5mm以下の透明光沢粒、2mm以下 の赤褐色・灰褐色を含む	
136	弥生 土器	SH-15	甕	口縁部 ～瓶部	11.9			横方向のミガキ、 ヨコナデ	横方向のナデの後横方向 のミガキ、口縁部は僅か に埋め、貼付突起	にぶい 黄褐色	地灰	良好	微細～1.5mmの透明・黒の光沢粒を 含む	
137	弥生 土器	A II-212, 222, 262	甕	瓶部～ 肩部				指ナデ	ナデ	黒褐色	程	良好	3mm以下の黒・赤褐色の程、2mm以下 の透明光沢粒を含む	
138	弥生 土器	A II-281 7号	口縁部					斜方向のナデ	斜方向の指ナデ	にぶい 黄褐色、 灰褐色	黒褐色	良好	微細～3mmの黒褐色・灰褐色、にぶい 程の粒、透明光沢粒を含む	
139	弥生 土器	A II-409 7号	口縁部					ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	良好	微細～1mmの進白・黒の光沢粒、灰 白・黒褐色の粒を含む	
140	弥生 土器	A	甕	瓶部				ナデ	標痕波状文、横方向のミ ガキ	標痕波状文、 横方向のナデ	にぶい 程	良好	5mm程度の黒褐色の粒を含む、3mm以 下的灰褐色・黒褐色の粒を含む	
141	弥生 土器	A II-206	基 盤 不明	瓶部				横方向のナデ	標痕波状文、ナデ	にぶい 程	にぶい 程	良好	微細～3mmの黒褐色・灰褐色の粒を含む	



第25図 弥生土器実測図1 (S = 1 : 3)



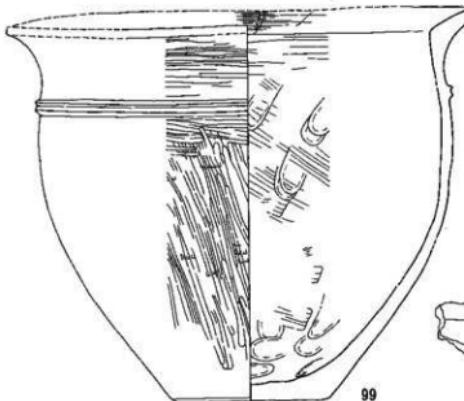
第26図 弥生土器実測図2 (S = 1 : 3)



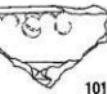
97



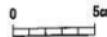
98



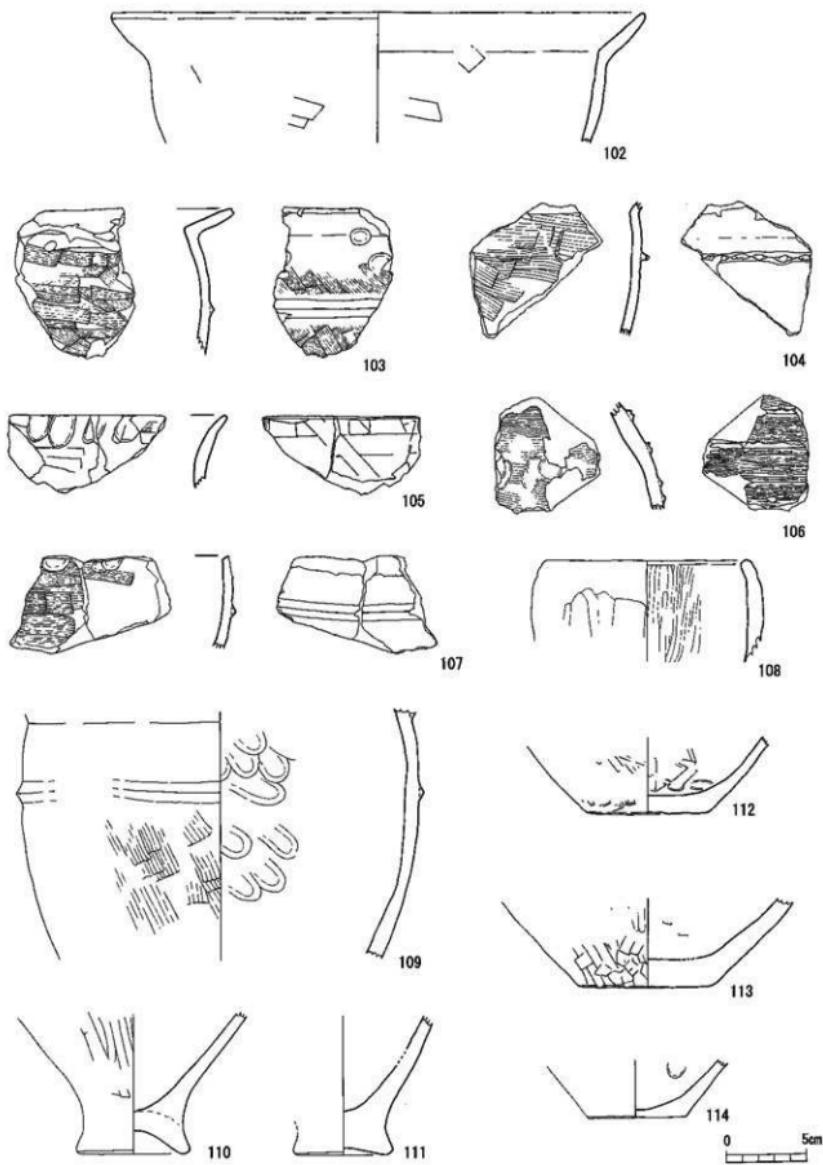
99



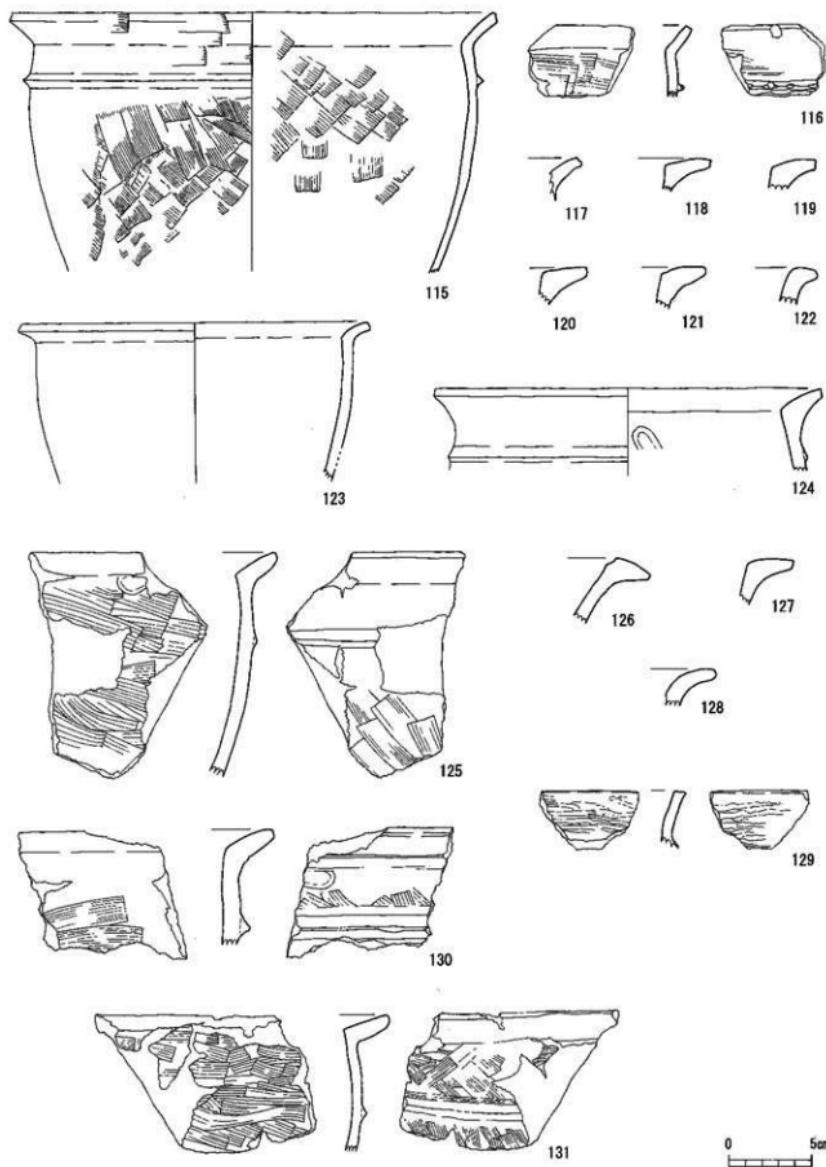
101



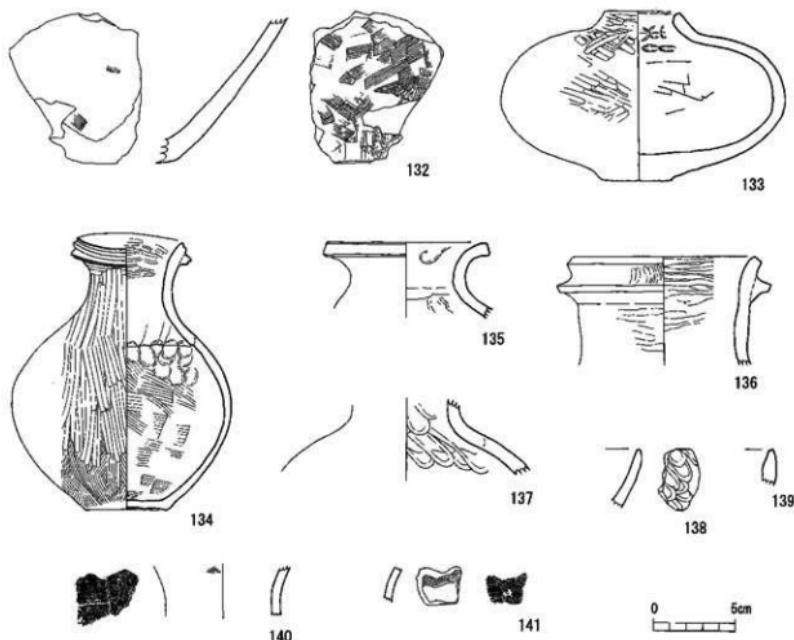
第27図 弥生土器実測図3 (S = 1 : 3)



第28図 弥生土器実測図4 (S = 1 : 3)



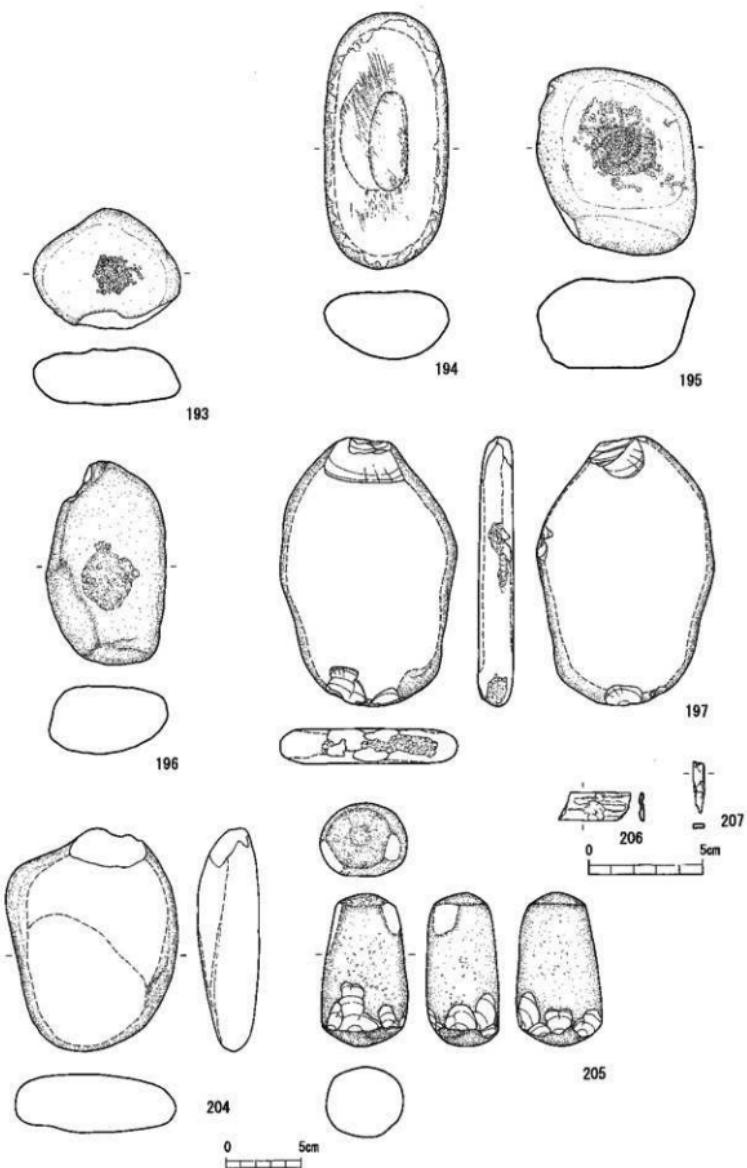
第29図 弥生土器実測図5 (S = 1 : 3)



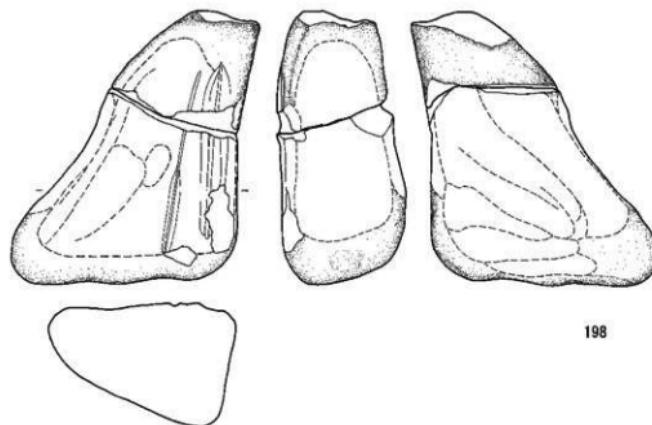
第30図 弥生土器実測図6 (S = 1 : 3)

第10表 石器計測表 (弥生時代)

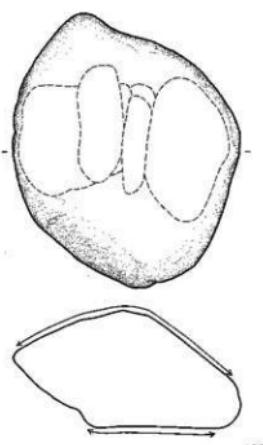
遺物番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
193	SA 2-55	敲石	8	9.8	3.8	476.7	砂岩	
194	SA 6-4	敲石	17.1	8.3	4.75	1078.7	砂岩	
195	SA 6-9	敲石	12.55	10.6	6.1	1298.4	砂岩	
196	SA 4-7	敲石	13.55	7.95	4.75	818.7	砂岩	
197	SA 6-2	砥石	18	11.8	2.35	798.6	砂岩	
198	SA 3-1、133	台石	22.45	23.5	10.5	8863.3	頁岩	
199	SA 3-57	石皿	22.7	18.6	10.1	6823.1	砂岩	
200	SA 1-26	磨石	16.9	8.8	3.5	832.8	砂岩	
201	SA 3-2	石包丁	5.7	9.6	0.6	52.5	ホルンフェルス	
202	SA 3	石包丁	3.5	5.05	0.45	12.7	ホルンフェルス	
203	SA 3	石包丁	3.3	2.5	0.8	10.6	ホルンフェルス	
204	SE10	砥石	14.8	11.4	4.1	1106.8	頁岩	
205	AI-377	敲石	10.15	5.75	4.8	448.2	砂岩	



第31図 石器実測図1 ($S = 1 : 3$) 鉄器実測図 ($S = 1 : 2$ 206~207)

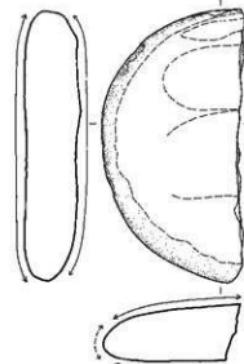


198

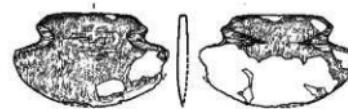


199

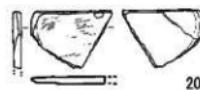
0 10cm



200



201



202



203

0 5cm

第32図 石器実測図2 (S = 1 : 5 198~200、S = 1 : 3 201~203)

第3節 古代・中世の遺構と遺物

(1) 遺構

本遺跡は調査前まで住宅地として土地利用されており、調査に入ったときの状態は全体平坦に整地されていたため調査区全体が元米平坦な地形だと思い、弥生～中世時代遺構の検出面である御池ボラ上層の黒色土層上面まで重機による表土剥ぎを行った。しかし調査区北側の一帯は層序が南側と異なり、整合性が見られなかった。そのため北側地区に数箇所トレンチを入れ、層序を確認した結果、住宅地として利用するのに平坦にするため客土を行なっていたことが判明した。その盛土及び客土は表土より約2m下まで続き、一部御池ボラ層も残っている箇所もあったが、大半はアカホヤ火山灰上面まで掘削及び造成が行なわれていた。この造成はいつ頃行なわれたのかは不明であるが、造成に用いた客土中にビニル等が混入していたことから、造成自体は新しい時期の造成と考えられる。

この結果を基に御池ボラ層が生きている箇所は御池ボラ層上面まで、それ以外の箇所はアカホヤ火山灰上面まで重機による盛土掘削・除去作業を行なった。

この遺跡の北側のB～G-0～1グリッドの他の区より約1m低い掘削された標高約157mの一帯を便宜上B区とし、A～F-2～4グリッドの範囲をA区、A～F-5～6グリッドの範囲をC区とした。重機掘削後、調査区全体にジョレン精査による遺構検出を行ったところ、周溝墓1基、土坑1基、溝状遺構10条、ピット群約300基を検出した。遺物は中近世の陶磁器、中世土師器等が出土している。

周溝墓（SM1 第31図）

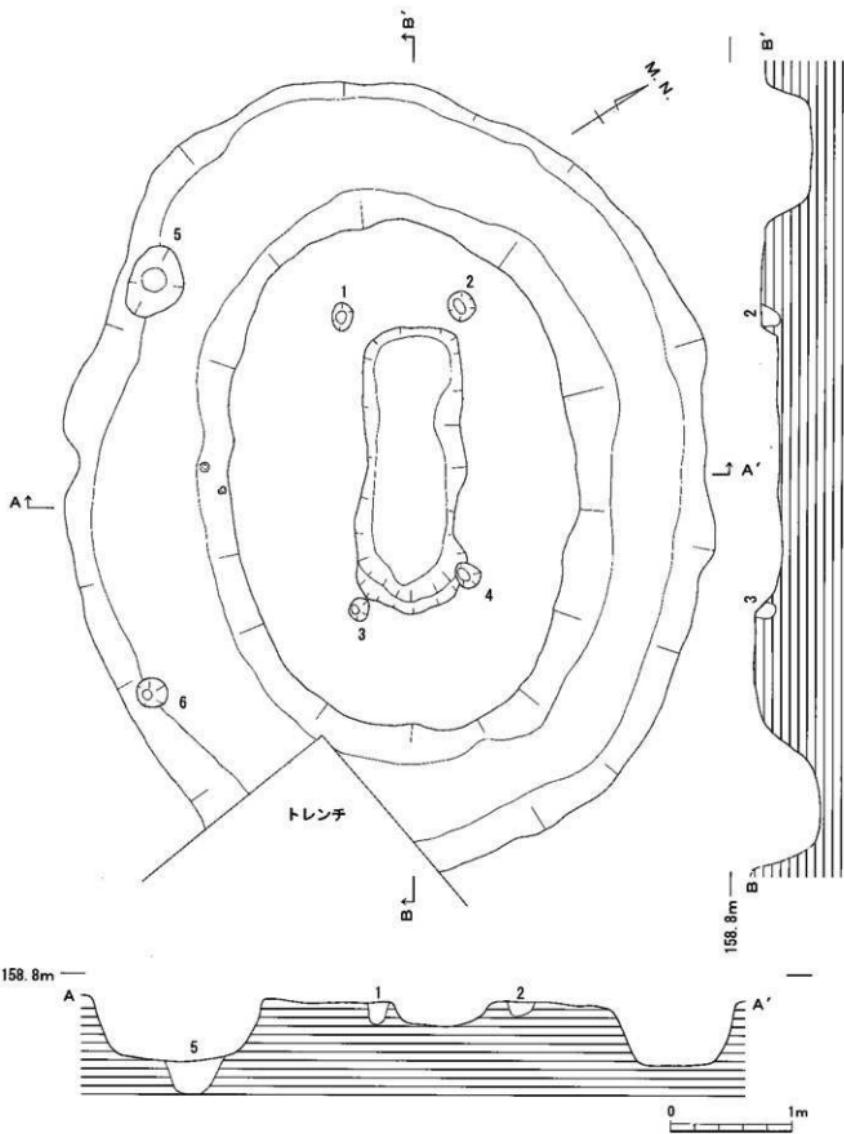
調査区北側のA 2グリッド御池ボラ層上面で検出した。周溝平面形は長軸6.4m、短軸5.4mを呈し、主軸はN-55.5°～Wを測る。溝は幅1.2～1.4m、深さ0.4～0.5mを測り、断面形は逆台形状をなす。陸橋部分はつくり出されておらず、深さはほぼ均一である。周溝の南側には柱穴が2基検出された。5・6の柱穴間は3.4mである。遺物は周溝の底部から5cm程浮いたレベルよりほぼ完形の土師器小皿が2点出土している（第33、38図163、165）。2点ともヘラ切底である。その他周溝内から3点土師器皿が出土している（第33、38図164、166、167）。墓壙は周溝内城の中央に位置しており、長軸2.4m、短軸0.8m、深さ0.2mの隅丸長方形を呈す。四隅には柱穴が見られるが、その性格は不明である。柱穴は直径0.2m、深さ0.15～0.2mで柱穴間は長辺2.2～2.4m、短辺9.6～10mである。墓壙内からは埴土をふるった際に刀子の茎と推定される鉄製品（第33図207）が出土している。一部木質が付着している。墓壙内の出土遺物はこの1点のみで土層及び出土遺物から埋葬状況が推測されるような痕跡は得られなかった。

溝状遺構（SE 1～10 第34図～第36図）

B区では溝状遺構が10条検出された。そのうち8条は南側で重複しながら東西に延びており、西側は消失している。なかでもSE 6は途中で北に渦曲して伸びている。検出面が短く、SE 7として検出された溝と同溝かと思われたが、埋土の状況等からその可能性は薄いようである。

またSE 9はSE 6と重なりながら東から北に大きく湾曲しているが、その両端共に消失しており、検出面はわずか約2m程度である。そのためSE 3との切り合い関係は不明である。

その他SE 3は調査区の北側で検出されており、東西に伸びている。遺物は中世の土師皿、近世陶磁器が出土している。



第33図 周溝墓実測図 ($S = 1 : 40$)

遺物の出土のない遺構が多く、遺構の時期を決めるのはやや困難であるが、調査区北側に集中した溝状遺構はその切り合い関係から前後関係を推察し、右表にまとめた。文明軽石を埋土に含むSE 1を基準に、おおまかに2グループに分けることができる。

SE 1より古いと思われるSE 2、10の新旧関係は不明である。SE 1の埋土が15世紀後半降下の文明軽石であることからSE 2、10ともその時期より古い時期に造られたものと思われる。しかし、SE 1の底面の硬化面を道状遺構と考えた場合、SE 10はそれに伴う側溝と考えられ、SE 1と同時期に使用された可能性がでてくる。以下、各溝の説明を行なうこととする。

新	SE 4	SE 3
	SE 7	
	SE 5	
	SE 6	
	SE 8	
	SE 9	
	SE 1 (文明軽石 15世紀後半)	
▼ 古	SE 2、10 (<SE 1)	

B区遺構新旧関係

SE 1 (第34図-①)

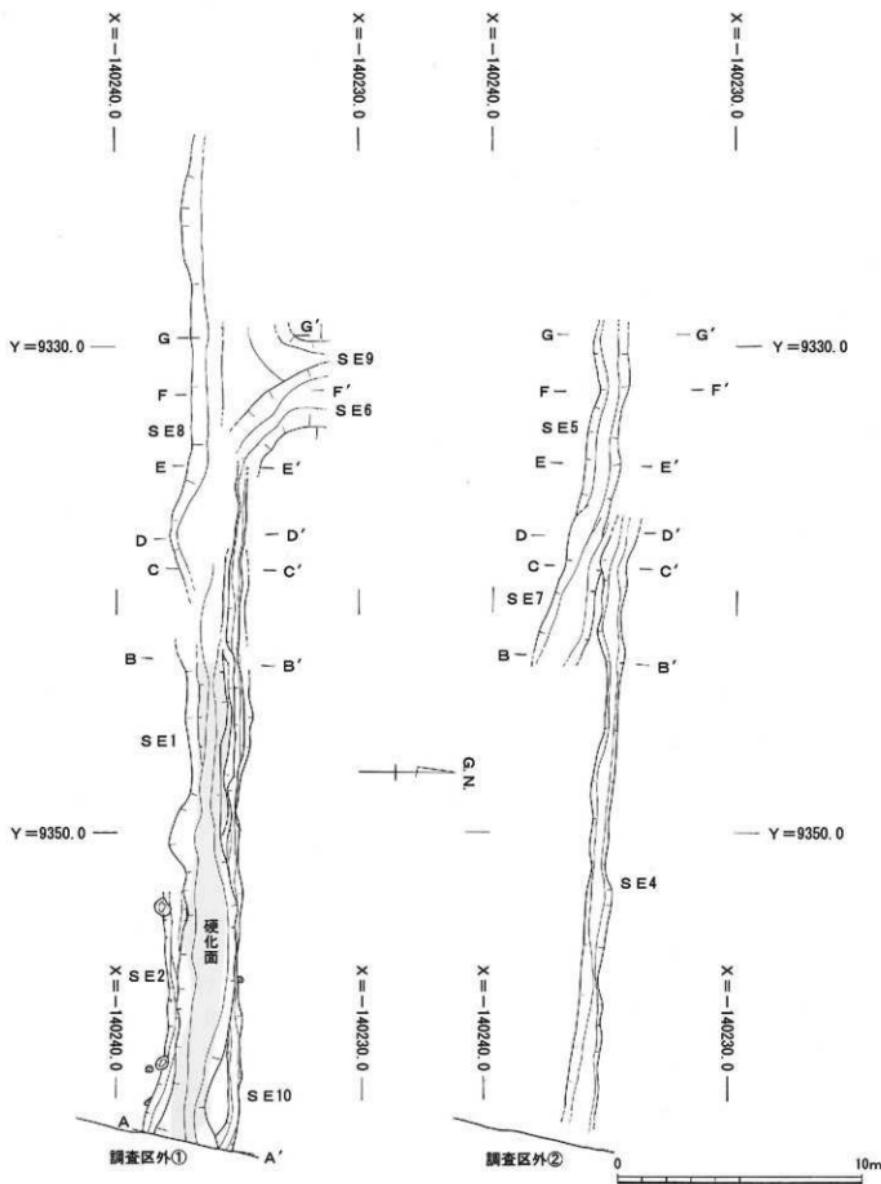
本溝の埋土は白いボラ(文明軽石。15世紀後半)であり、その底面と上面の二面に硬化面が見られることから道状遺構の可能性がある。SE 1は、B区の南東側に確認されている。ほぼ東西方向に延びており、西端は途中で消失している。溝底面の硬化面の規模は、全長(検出分)約23.5m、上幅約2.3m、下幅約1.3m、深さ約0.3mである。断面形は、緩やかなレンズ状を呈している。壁は緩やかに立ち上がる。

SE 2 (第34図-①、第36図)

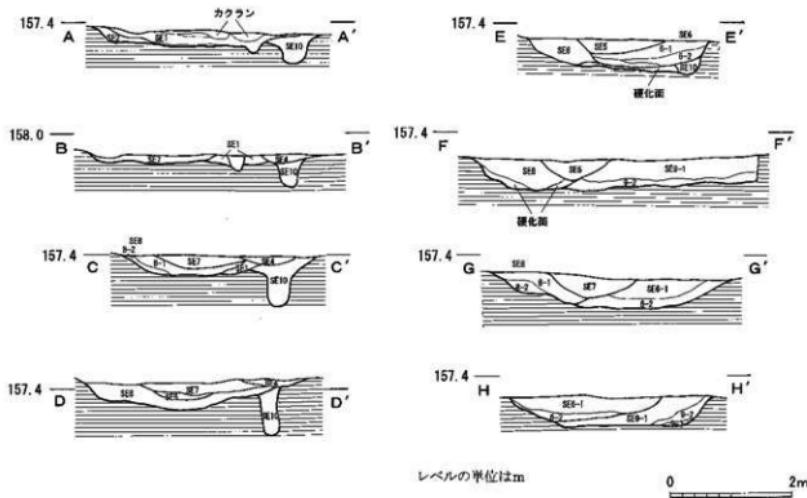
本溝は、B区の南東側に確認されている。SE 1と重なりながらほぼ東西方向に延びている。東端は調査区外に延び、西端は途中で消失している。本溝がSE 1に切られており、また、SE 10との新旧関係は不明である。溝の規模は全長(検出分)約24.5m、上幅約1.1m、下幅約0.4m、深さ約0.07mである。断面形は、緩やかなレンズ状を呈しており、壁は緩やかに立ち上がっている。

SE 3 (第16図)

本溝は、B区の北側に確認されている。SE 5、8と平行してほぼ東西方向に伸びており、他の溝との重複関係は見られず新旧関係ははっきりしない。両端とも調査区外に延びている。溝の規模は全長(検出分)約15m、上幅約1.2m、下幅約0.7m、深さ約0.6mである。



第34図 溝状遺構平面図 ($S = 1 : 200$)



- SE 1 にぶい黄褐色 (10 YR 7/4) 文明縣石火山灰。
- SE 2 黒褐色シルト土 (10 YR 2/2) やや軟質。御池ボラを2%程度、アカホヤ火山灰を7%程度含む。
- SE 3 黒褐色シルト土 (10 YR 3/1) しまりなし。御池ボラを若干含む。
- SE 4 黒色シルト土 (2.5Y 2/1) 御池ボラを20%程度含む。
- SE 5 黒褐色シルト土 (5 YR 3/1) 御池ボラを10%程度含む。
- SE 6-1 黒褐色シルト土 (7.5Y R 2/2) しまりなし。御池ボラ、炭化物を若干含む。
- SE 6-2 黒褐色シルト土 (7.5Y R 2/2) しまりなし。御池ボラ、炭化物を若干含む。
- SE 6-3 檻灰 (7.5YR 4/1) しまりあまり。
- SE 7 オリーブ黒シルト (5 Y 3/2) 御池ボラを15%程度含む。
- SE 8-1 オリーブ黒シルト (5 Y 3/2) 御池ボラを7%程度含む。
- SE 8-2 オリーブ黒シルト (5 Y 3/2) 御池ボラを7%程度、アカホヤを7%程度含む。
- SE 9-1 緑黒色シルト土 (10G 2/1) しまりゆるい。御池ボラを若干含む。
- SE 9-2 SE 9-1 の埋土の中で赤ホヤが5%程度混入した箇所。
- SE 9-3 青黒色 (5 PB 2/1) 硬化面。アカホヤ火山灰をわずかに含む。
- SE 10 黒褐色シルト土 (10 YR 2/2) しまりゆるい。御池ボラを2%程度含む。

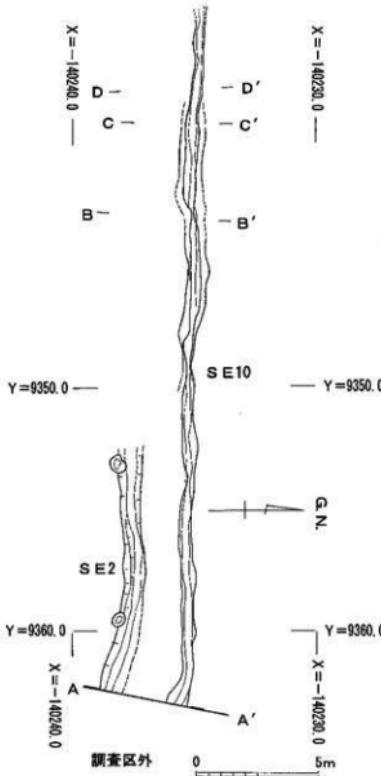
第35図 B区溝状遺構断面図 (S = 1 : 80)

断面形は、緩やかな橢円状を呈している。壁北側が段状になりながら立ち上がっている。

遺物は11世紀～13世紀の土師器（第38図-143, 144）、近世の薩摩焼（第39図-175）が出土している。

SE 4 (第34図-②)

本溝は、SE10と重なり合いながらほぼ東西方向に延びている。西端は途中で消失している。溝の規模は全長（検出分）約24.5m、上幅約1.1m、下幅約0.4m、深さ約0.1mである。断面形は緩やかなレンズ状を呈し、壁は緩やかに立ちあがっている。



第36図 SE 2, SE 10平面図 ($S = 1 : 200$)

(検出分) 約 5m、上幅約 1.8m、下幅約 1.3m、深さ約 0.2m である。断面形は、緩やかなレンズ状を呈し、壁は緩やかに立ちあがっている。

SE 8 (第34図-①)

本溝は、B区の南側に確認されている。SE 4、5、7と切りあいながら東西方向に延びている。東端はSE 7に切られ、東側は不明である。北側の壁はSE 7に切られた分と、確認トレンチによって削平されている。西端は、調査区西側端付近で消失する。溝の規模は、全長(検出分)約19m、上幅・下幅共に不明、深さ約0.42mである。断面形は、緩やかなV字状を呈している。硬化面が底辺に確認された箇所もあり、水が流れていたことがわかる。

SE 5 (第34図-②)

本溝は、B区の北西側に確認されている。SE 7、8と平行してほぼ東西方向に延びており、両端とも途中で消失している。溝の規模は全長(検出分)約8.4m、上幅約1.4m、下幅約0.6m、深さ約0.15mである。断面形は緩やかな楕円状を呈している。壁は北側が段状になりながら立ち上がる。重複関係は、SE 6・SE 9を切っており、SE 7に切られている。

SE 6 (第34図-①)

本溝は、B区の南西側に確認され、南東から北に途中大きく弯曲して伸びる溝で、西端は北側のSE 3へ向かって伸びている。新旧関係はSE 3にはSE 6の埋土が見られず、SE 3の覆土しか見られないことから本溝のほうが古い可能性がある。また、南東側はSE 5に切られており、その東端は不明である。溝の規模は全長(検出分)約5m、上幅約2.5m、下幅約1.3m、深さ約0.4mである。断面形は、緩やかな楕円状を呈す。壁は北側が段状になりながら立ち上がる。

SE 7 (第34図-②)

本溝は、南西側に確認されている。SE 4、5、8、1と重なり合いながらほぼ東西方向に延びている。東端は途中で消失しており明確ではないが、SE 1を切っている。また北側の壁の一部をSE 4に切られている。西端も途中で消失している。溝の規模は全長(検出分)約5m、上幅約1.8m、下幅約1.3m、深さ約0.2m である。断面形は、緩やかなレンズ状を呈し、壁は緩やかに立ちあがっている。

S E 9 (第34図-①)

本溝は、B区の南西側に確認されている。SE 6と重なりながら東から北に湾曲して延びる溝で、西端は北側のSE 3へ向かって流れている。新旧関係は第35図の上層断面図にはSE 6、9の埋土が見られず、SE 3の覆土しか見られないことから本溝のほうが古い可能性がある。また、本溝はSE 6に、南側の壁はSE 5に切られており、上幅等不明である。東端は途中で消失している。溝の規模は、全長（検出分）約2m、上幅、下幅不明、深さ約0.5mである。

S E 10 (第34図-①、第36図)

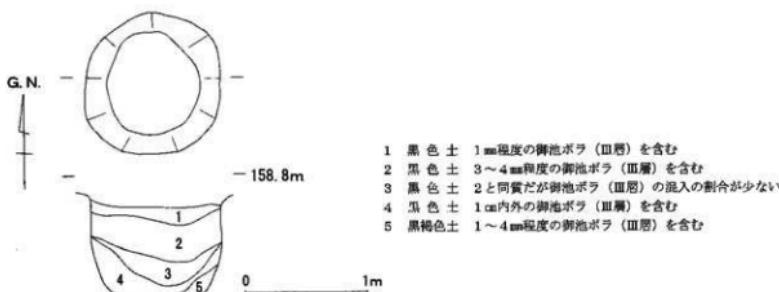
本溝は、B区の南西側に確認されている。上面両壁の一部をSE 4に切られている。西端も途中で消失している。本溝がSE 8を切っており、溝の規模は、全長（検出分）約28m、上幅約0.9m、中幅約0.5m、下幅約0.3m、深さ約0.8mである。壁は、一旦直立に立ち上がりその後脇に広がり、外傾して立ち上がっていきため断面形は漏斗形を呈している。SE 1の底部の硬化面を道状遺構と考えるとその側溝の可能性がある。遺物は黒色土器底部（第38図-170）が出土しているが、文明軽石を埋土中に含むSE 1に切られていることから本溝はSE 1より古い時期となるので遺物の時期と合わせ、遺物は流れ込みの可能性が考えられる。

土坑 (S C 2 第37図)

周溝墓の南側、A 2グリッド内に位置する。直径約1.0m、深さ約1.4mで壁はほぼ垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。埋土中より黒色土器片（第38図-169）が出土している。

ピット群 (第16図)

III層上面では約300基の柱穴を検出した。埋土はII層の黒褐色土にIII層の御池ボラが混入したもののがほとんどである。分布は調査区北西側、南側に偏っている。特に周溝墓付近では直径80cmを越えるピットが数基検出された。そのうちSH 3、SH 13では土師器皿が出土している（第38図-150、151）。また、調査区南西側で検出したSH 21からはほぼ完形の土師器壺が出土した。しかしこれらのピット群からは据立柱建物となるような規則性のある並びをしているものは検出できなかった。



第37図 S C 2 実測図 (S = 1 : 40)

(2) 遺物（第38図、第39図）

土師器・須恵器（第38図）

142、144～147、152は壊である。152以外は口縁部のみの出土のため底部調整は不明である。152はSH21より出土している。底部は糸切りで口縁部は若干外反する。143、148～151、153～160は小皿である。153は粗雑なつくりで内面中央がレンズ状に膨らんでいる。143、151、159は糸切り離しである。その他はヘラ切り離しで、底径は6～7cmの間にこれらの遺物はおさまる。

162～167は周溝墓（SM1）の周溝埋土より出土している。162は高台付杯である。高台はハの字に開く。体部は高台脇で強く外反し立ち上がる。163は土師器の小皿である。底部は静止ヘラ切り離し技法を施す。体部と底部の厚みの差が大きい。164も土師器の小皿である。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。165も土師器の小皿で163と近い位置から出土しているためセットではないかと考えられる。焼成の際にへたったのか、体部が立ち上がらず平坦になっている。底部切り離しにはヘラ切りだが粗雑ですわりが悪い。163同様口縁端部は水平に成形されている。166、167の底部は糸切り切り離しである。双方とも体部はハの字状に開いていき、口縁端部は軽く外反する。また、底部は底部中央に向かって強く削られて器形が深くなっている。167には中央に削り残しのへそ状の突起がある。166は底部中央は欠損しており不明である。169、170は黒色土器である。170は内面見込みに段を有する。SE3の遺物であるが、埋土中出土のため以降の時期を特定するのは不可能である。

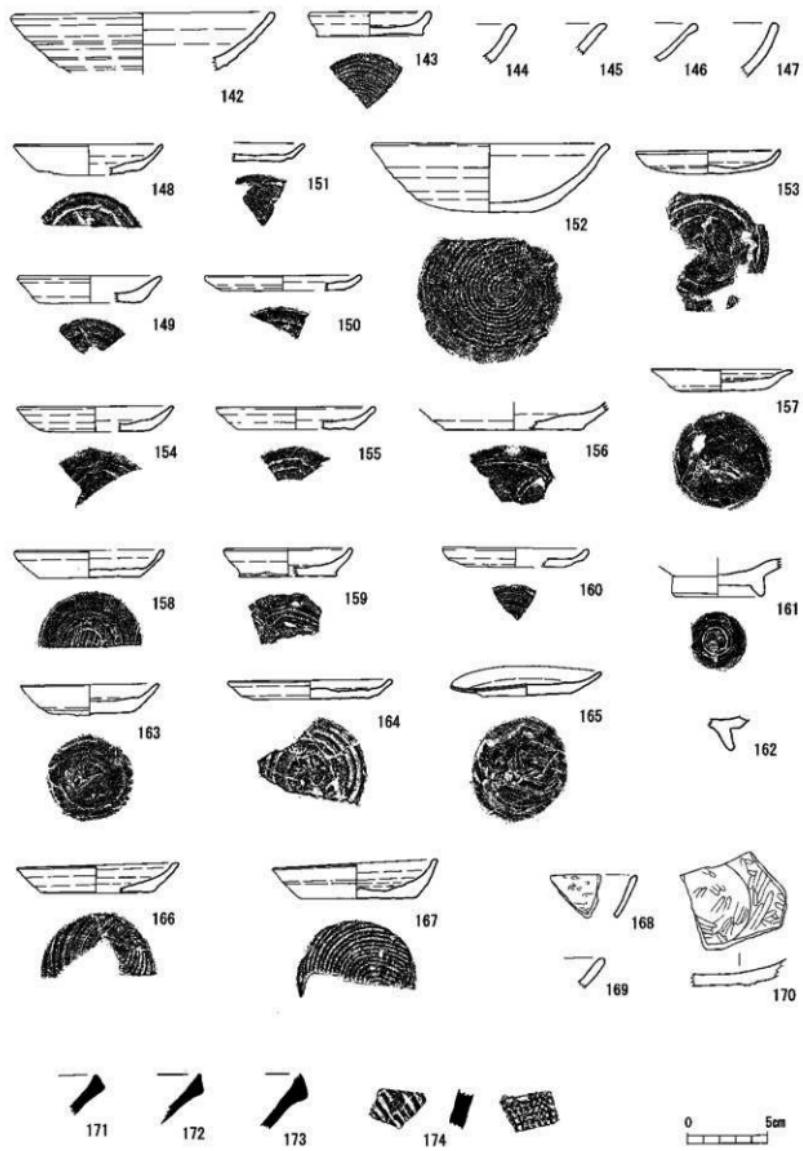
171～174は須恵器で、171～173は鉢の口縁部である。

陶磁器（第37図）

175はSE3出土の壺陶器片である。口縁付近のみ施釉か。内外面釉が胎土にきれいにのらず、縮れている箇所が見られる。釉薬は光沢があり、薄く施釉されている。特に外面に拭取ったのかと思われるような箇所もある。細かい貫入がみられる。薩摩焼の可能性がある。181は青磁合子である。蓋部分はロクロ成形なのかは不明。脣部に鷲唐草文を施す。底部付近、口唇部は無釉である。178は青磁端反碗で、14世紀～15世紀の中国産である。上田分類D類に比定される。D-II類の可能性もあるが、口縁部しか残存していないためこれ以上は細分できない。

178は青磁皿である。初期高麗青磁であり、11世紀～12世紀前半のものと思われる。全面施釉されているが高台は一部無釉の箇所も見られる。しかしこれは意図的なものではなく、単に粗雑なつくりのためだと思われる。見込周辺や内面口縁付近に沈線が施されている。ほぼ完形で、初期高麗青磁の小皿出土は九州管内でも稀であり南九州での出土は初めてであろう。181、179とセットで出土している。今回の調査では惜しくも遺構を検出できなかったが、想定される遺構としては墓壙等が想定される。大宰府編年の皿III類に近い特徴を持っているが、高台は皿類よりも低めである。白色耐火土の目痕は、外面高台に3点のみで内面には見られない。一番上で焼成されたものであろうか。体部は内湾しているが、口縁部付近でわずかに外反する。高台疊付の釉は削り取られておらず、また一部釉がかかっていない。ただ、他の箇所と比べて疊付の釉は薄い。

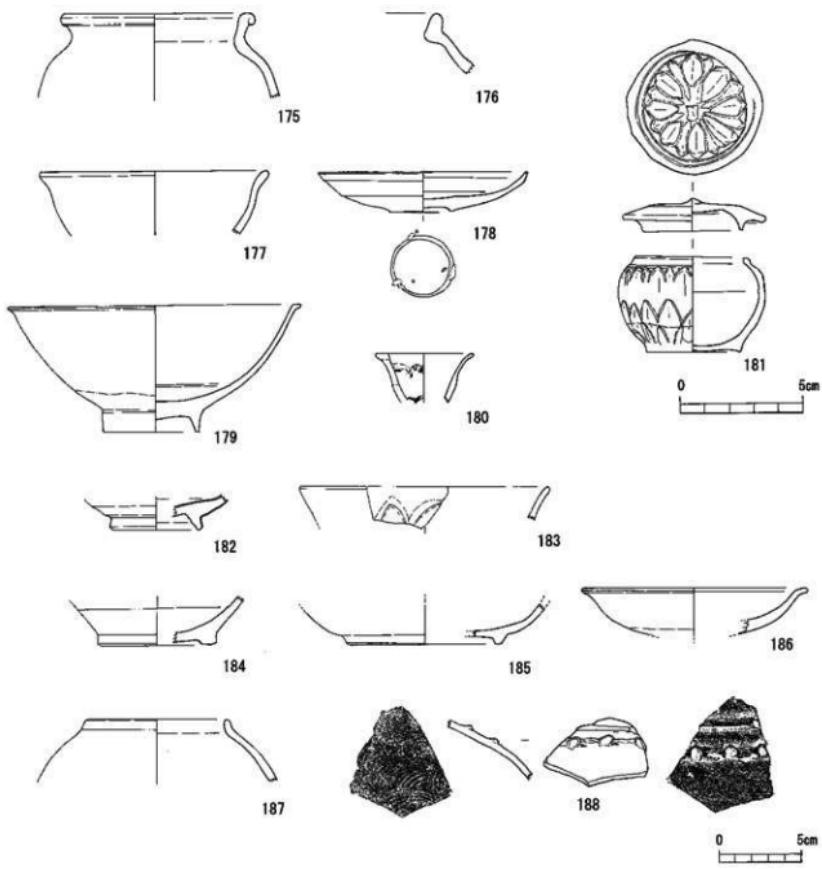
179は白磁の端反碗で、12世紀中～13世紀の中国産である。器形の特徴は高台は薄く、その外面は直立するが内面は若干斜行している。口縁部は外面に屈折し、上端部は水平である。内面見込には段が見られる。また、釉薬は高台脇より下は無釉である。以上の特徴から大宰府編年V-4類と推定される。180は端反の小杯染付である。19世紀の肥前系と思われる。施釉にムラがあり、均一ではない。内外に焼成時に付着した灰らしき点々が見られる。



第38図 土師器・須恵器実測図 (S = 1 : 3)

第11表 遺物観察表（土師器・須恵器）

番号	種別	出土地点及 目次上位置	器種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	構 造・調 査		内 面	外 面	統成	評 価	備 考
								内 面	外 面					
142	土師器	A	外 口縁部 ～全体	口縁部 ～全体	16.5			ナデ	ナデ	にぶい 黄褐色	外、黄 褐色	微細～1mmの灰白・灰褐色の粒を含む	良好	
143	土師器	B SE 3	里	口縁部 ～底部	7.4	6.7	1.5	ナデ	ナデ、糸切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	微細～1mmの透明光沢粒、褐色粒を含む	良好	
144	土師器	B SE 3	外	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい 黄褐色	外、黄 褐色	2mm以下の灰白・褐色・黒の粒を含む	良好	
145	土師器	C II	外	口縁部				模様向のナデ、袋 形化付着	模様向のナデ	にぶい 黄褐色	外、黄 褐色	1mm以下の灰白・褐・灰褐色の粒を含む	良好	
146	土師器	A II B 4	外	口縁部 ～全体				ナデ	ナデ	にぶい 黄褐色、 灰褐色	外、黄 褐色	1mm以下の褐色・浅黃褐色・灰白の粒を含む	良好	
147	土師器	C II	外	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい 黄褐色	外、黄 褐色	1mm以下の褐色・浅黃褐色・灰白の粒を含む	良好	
148	土師器	SH-11	里	口縁部 ～底部	9.4	6.6	2.1	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な黄褐色の粒を含む
149	土師器	SH-10	里	口縁部 ～底部	9.0	6.6	1.7	四転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む
150	土師器	SH-3	里	口縁部 ～底部	9.8	7.7	1.0	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む
151	土師器	SH-13	里	口縁部 ～底部				ナデ	ナデ、糸切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な褐色の粒を含む
152	土師器	C SH-21	外	口縁部 ～底部	15.0	5.6	4.3	ナデ	ナデ、糸切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	2mm以下の褐色色、鐵錫な白色粒・ 透明光沢粒を含む
153	土師器	A III-419	里	口縁部 ～底部	9.0	6.6	1.5	回転ナデ	回転ナデ、坂状工具類、 ヘラ切り底	回転ナデ、坂状工具類、 ヘラ切り底	回転ナデ、坂状工具類、 ヘラ切り底	回転ナデ、坂状工具類、 ヘラ切り底	良好	鐵錫な灰・褐色の粒を少量含む
154	土師器	C II	外	口縁部 ～底部	9.9	6.7	1.6	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な黄褐色の粒を含む
155	土師器	C H-180	里	口縁部 ～底部	10.0	7.2	1.4	四転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む
156	土師器	A III-180	里	口縁部 ～底部		8.7		回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	浅黃褐色	浅黃褐色	浅黃褐色	良好	1mm以下の灰・褐色の粒を含む
157	土師器	A III-383	里	ほぼ完 形	8.9	5.9	1.4	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な半透明光沢粒、8mm次の褐色 の粒、2mm以下の黃褐色・灰の粒を含む 1mmの淡黃褐色の粒を含む
158	土師器	A III-389	里	口縁部 ～底部	9.4	6.3	1.7	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底、 墨あり	灰褐色	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	微細な半透明・黑色光沢粒を含む
159	土師器	A III-390	里	口縁部 ～底部	7.0	6.2	1.8	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	2mm以上の灰・褐色の粒を含む
160	土師器	A	里	口縁部 ～底部	9.1	6.1	1.2	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細で1.5mmの褐色・明赤褐色の粒を含む
161	土師器	A III-165	裏 合 付 环	底部		5.9		ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	3mm以下の灰・褐色の粒を含む
162	土師器	SM	里	底部				ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	灰褐色	良好	微細な褐色色・透明光沢粒を含む
163	土師器	SM-1	里	口縁部 ～底部	8.7	5.6	2.0	ナデ	ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細～1mmの褐色・明赤褐色の粒を含む
164	土師器	SM	里	口縁部 ～底部	10.5	7.4	1.2	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細で灰・赤褐色の粒、黑色光沢粒を含む
165	土師器	SM-2	里	円形容	9.5	6.0	0.8～ 1.9	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	2mm以下の灰・褐色の粒を含む
166	土師器	SM A III-38 5	里	口縁部 ～底部	10.2	7.2	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	微細な白色粒・黑色透明光沢粒を含む
167	土師器	SM A III-39 5	里	口縁部 ～底部	10.3	7.3	2.1	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	良好	6mm以下の赤褐色の粒、微細～1mm の灰・黃褐色の粒を含む
168	土師器	SM-16	外	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	褐色	褐色	褐色	良	微細な褐色色・黑色光沢粒を含む
169	土師器	SC 2	外 (内)	口縁部				内墨	回転ナデ、ミガキ	黑	黑、灰 褐色	黑	精良	微細な透明光沢粒、微細な灰・褐色 光沢粒を含む
170	土師器	B SE10	外 (内)	底部				内墨、ミガキ	ナデ、回転ナデ	黑	浅黃褐色	精良	1mm以下の灰・褐色の粒を含む	
171	須恵器	A III	こね 棒	口縁部				回転ナデ、自然納	回転ナデ、一部自然納	灰	灰	堅淡	精良	
172	須恵器	A III-278	こね 棒	口縁部				回転ナデ、一部自 然有	回転ナデ、自然納	灰	灰	堅淡		5mm太で灰色の片状、1mm位の黄灰 色の粒を含む
173	須恵器	B C 1	こね 棒	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	褐色	堅淡	精良	2mm以上で黄褐色の粒を多く含む
174	須恵器	B VIトレン チAII	不明	網部				平行タタキ	格子目タタキ	灰褐色	灰褐色	堅淡	良	1mm以下の褐色色、微細な透明光沢 粒を含む



第39図 陶磁器実測図 ($S = 1 : 3$ 、181のみ $1 : 2$)

182は白磁碗である。無釉部分である高台疊付から内面箇所が赤く発色している。外面はヘラケズリ痕が明確に入っている。

183は青磁碗である。片切彫の蓮弁文が外面に入っている。14世紀～15世紀である。上田分類のB類に比定する。蓮弁部の盛り上がりはみられるが、間弁、鏡は失っている点からB-I'類と思われる。

184は白磁碗である。高台付近底部しか残存していないためはつきりとはいえないが、高台高は低く、高台内側は斜行し、高台外は水平に削られ、疊付外面端部が若干浮いている点、そして見込みに段があることなどから大宰府編年碗X I類の可能性がある。11～12世紀の中国産と思われる。

186は陶器皿である。高台脇まで化粧土が掛けられている。薩摩焼の中でも龍門司系の製品と思われる。19世紀か。188は陶器の壺である。同心円状のタキ痕が内外面にみられ、網状貼付突帯文が胴部に施されている。17世紀代の薩摩焼である。器壁は薄く丁寧に製作されているが、釉薬の掛け方は粗雑であり、掛けムラが全体に見られる。

第12表 遺物観察表（陶磁器）

番号	出土 地名	基 準	区分	出 量		色 調		地 土	技 法		文 様		產地・年代	
				口径	底径	高さ	内 面		成形・焼成	装 飾	内 面	外 面		
175	B区 SE3	素	陶器	(11.6)	—	(5.0)	オーリーブ黒 (ST 3 / 2)	オーリーブ黒 (ST 3 / 2)	泥に赤褐色 (ST 3 / 2)。 口縁付近のみ 施釉か。	—	—	—	薩摩焼？	
176	B区 SE3	素	陶器	—	—	(3.7)	—	—	—	—	—	—	—	
177	A区	壺反転	青磁	(14.2)	—	(3.6)	灰オーリーブ (ST 5 / 2)	灰オーリーブ (ST 5 / 2)	灰白 (ST 5 / 2) / 1)	—	施釉	—	中国。14世 紀～15世紀	
178	A区	II	青磁	12.8	3.9	2.5	—	—	—	—	—	—	初東高麗青 磁。11世紀 ～12世紀前 半	
179	A区	壺反転	白磁	18.0	5.85	7.8	灰白 (ST 7 / 2)。 黒い斑 所は淡黄 (ST 7 / 3)	灰白 (ST 8 / 1)	高台疊 より施釉。	—	見込に施あ り	—	中国。12世 紀中～13世 紀。	
180	B区 (壺反)	小杯	釉付	(6.0)	—	(3.0)	壺オーリーブ灰 (ST 7 / 1)	灰 (K 5 / 1)	灰白 (ST 7 / 1)	施釉	—	草葉文？竹葉 文？	19世紀、肥 前窓	
181	A区	合子	青磁	—	5.5	3.7	1.2	明暎灰 (100Y 8 / 1)。黒點 部分は灰白 (ST 8 / 1)	無釉部分は灰白 (ST 8 / 1)	手づくね 成形後ロ クロ成形 か。	模文	—	絞蓮弁文	—
182	B区	壺	白磁	—	(5.2)	(2.0)	刷オーリーブ灰 (ST 7 / 1)	灰白 (K 8 / 1)	高台疊付 ～高台内 面施釉	—	—	—	—	
183	B区	壺	青磁	(15.4)	—	(2.1)	灰オーリーブ (ST 5 / 2)	灰オーリーブ (ST 5 / 2)	灰 (ST 6 / 1)	片安陀	—	蓮弁文	中国。14世 紀～15世紀	
184	B区	壺	白磁	—	(7.2)	(3.0)	灰白 (ST 7 / 2)	—	高台疊 より施釉。	見込に施あ り	—	—	中国。11～ 12世紀	
185	B区	瓶	白磁	—	(9.0)	(2.5)	灰白 (ST 7 / 1)	灰白 (ST 7 / 1)	灰白 (ST 8 / 1)	高台疊付 施釉割	—	—	—	
186	B区	壺	陶器	(13.8)	—	(2.9)	化粧土は灰白 (ST 8 / 1)。 無釉部分は灰オーリーブ (ST 6 / 2)	灰 (ST 6 / 1)	—	内・外高台疊 付化粧土	—	—	薩摩焼、纏 門式、19 世紀か	
187	B区	土瓶	陶器	(8.8)	—	(3.9)	口縁付近に 外は無釉部。 無釉部分に よい施釉。	によい施釉 (100Y 4 / 3)	によい施釉 (ST 5 / 4)。1 mm以下の灰白。 灰褐色の施釉を含む。	口縁付 部、施 釉後 に施釉	—	口縁付近の み施釉。	—	薩摩焼？
188	B区	壺	陶器	最大幅5.9	(4.2)	—	暗灰黄 (ST 6 / 2)	暗灰黄 (ST 5 / 2)	灰 (ST 4 / 1)。1 mm下 の灰白 砂粒をわずかに 含む。	—	網状貼付突 帯文	—	薩摩焼。17 世紀。	

第4節　まとめ

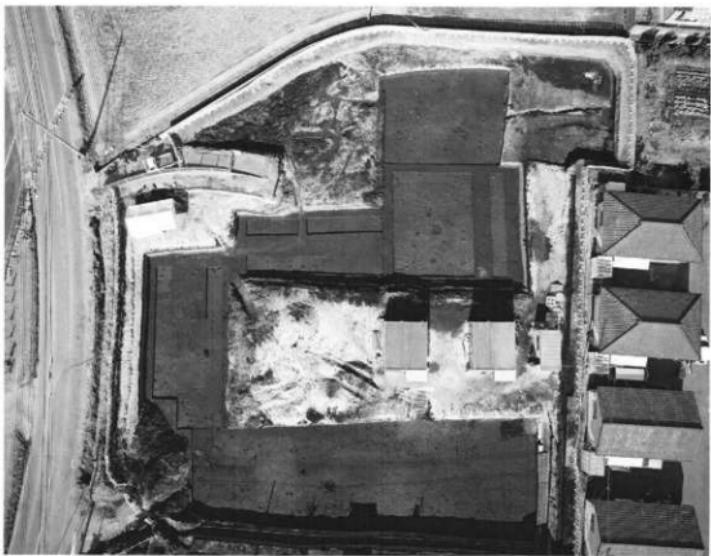
池島遺跡は、上部がかなり削平及び擾乱を受けており、遺物・遺構がかなり失われているのではない
かと考えられるが、それでも検出された遺構・遺物の多様さから推し量ると、古くから人々が生活する
のに適した土地であり、連綿と人々の営みがあったことが窺われる。

縄文時代早期では集石遺構や各種の土器が検出された。弥生時代では竪穴住居、貯蔵穴、性格が不明
だが周溝状遺構が3基連なって検出された。古代・中世については、建物跡としては確認は出来なかつ
たが、周溝を持つ墓や多くのピット群、土師器や須恵器のほか高麗青磁を中心とする陶磁器類が検出さ
れた。

この遺跡は周辺よりやや高く、水害に遭いにくかったこと、すぐ近くには川があり交通の便も良好で
あったことなどの地形的な環境がどの時代においても居住に適した地であったと考えられる。



池島遺跡全景（東より）



第V層上面検出状況（全体）



第VII層上面検出状況（A区北側・B区）



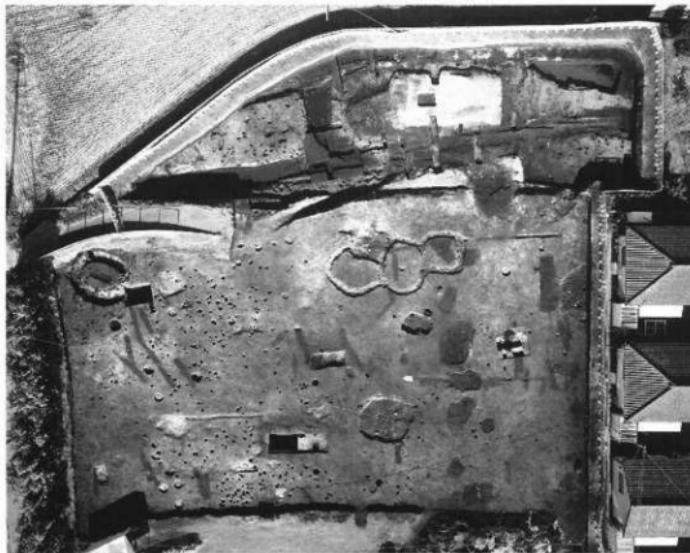
第VII層上面（B区）



A区北側第V層（アカホヤ火山灰）上面 遺構検出状況



A区北側及びB区第V層上面 遺構検出状況



第Ⅲ層上面遺構検出状況



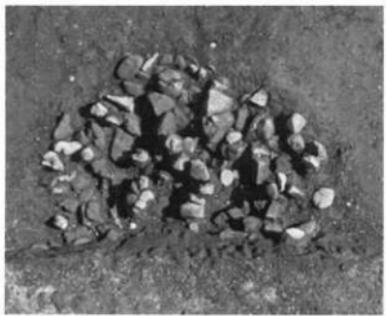
第Ⅴ層疊群検出状況



S I 1



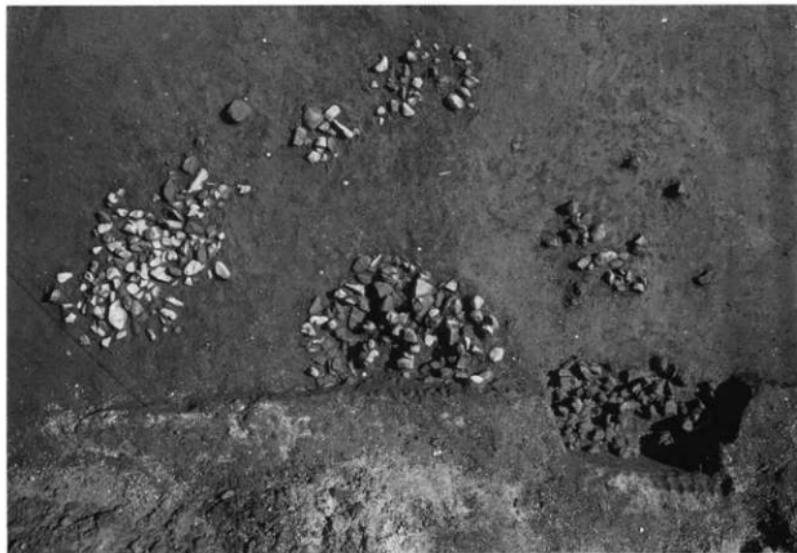
S I 8



S I 10



S I 11



(左より) S I 8、9、10、11



S I 4 検出状況



S C 1 半截状況



遺物出土状況 134の壺



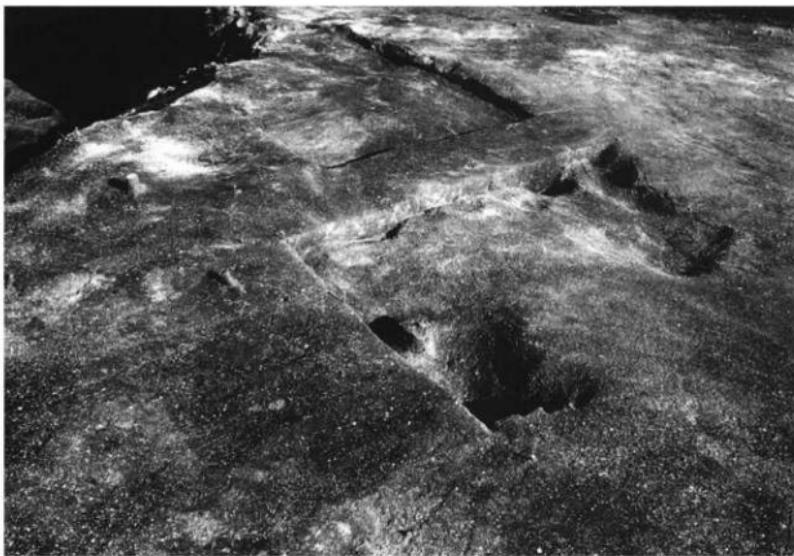
弥生土器出土状況



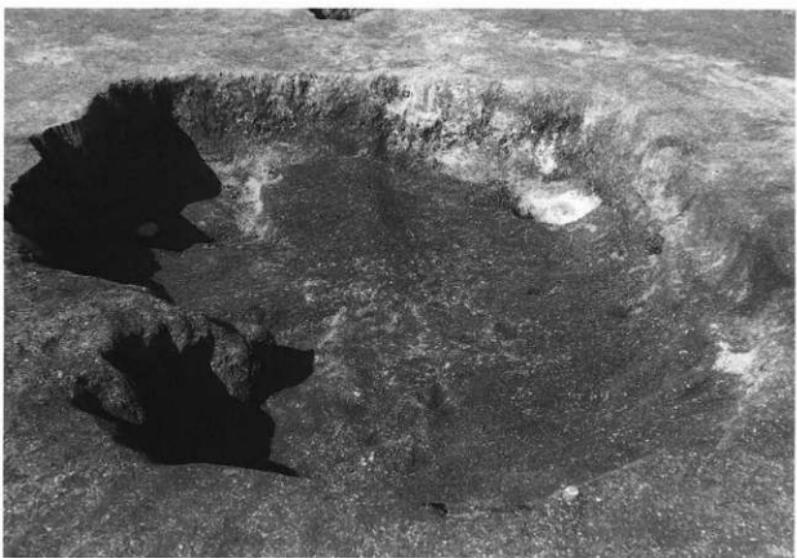
S L 1 ~ 3 掘出状況



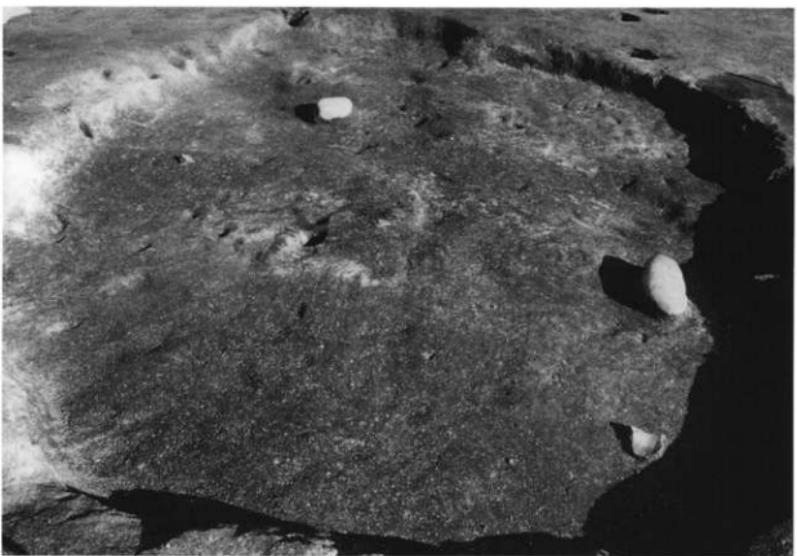
S A 1 完振状況



S A 2 ベルト断面



S A 3 完掘状況



S A 5 完掘状況



S A 6 完掘状況



(左より) S L 1・2・3 完掘状況



B区 溝状遺構完掘状況（東より）



S E 1 (写真中央、桜島文明軽石が堆積した状態) 西より



3連の周溝状遺構 (SL 1~3)



貯藏穴断面 (北より)



SE3 東より



SE10 完掘状況（東より）



周溝墓（SM1）完掘状況



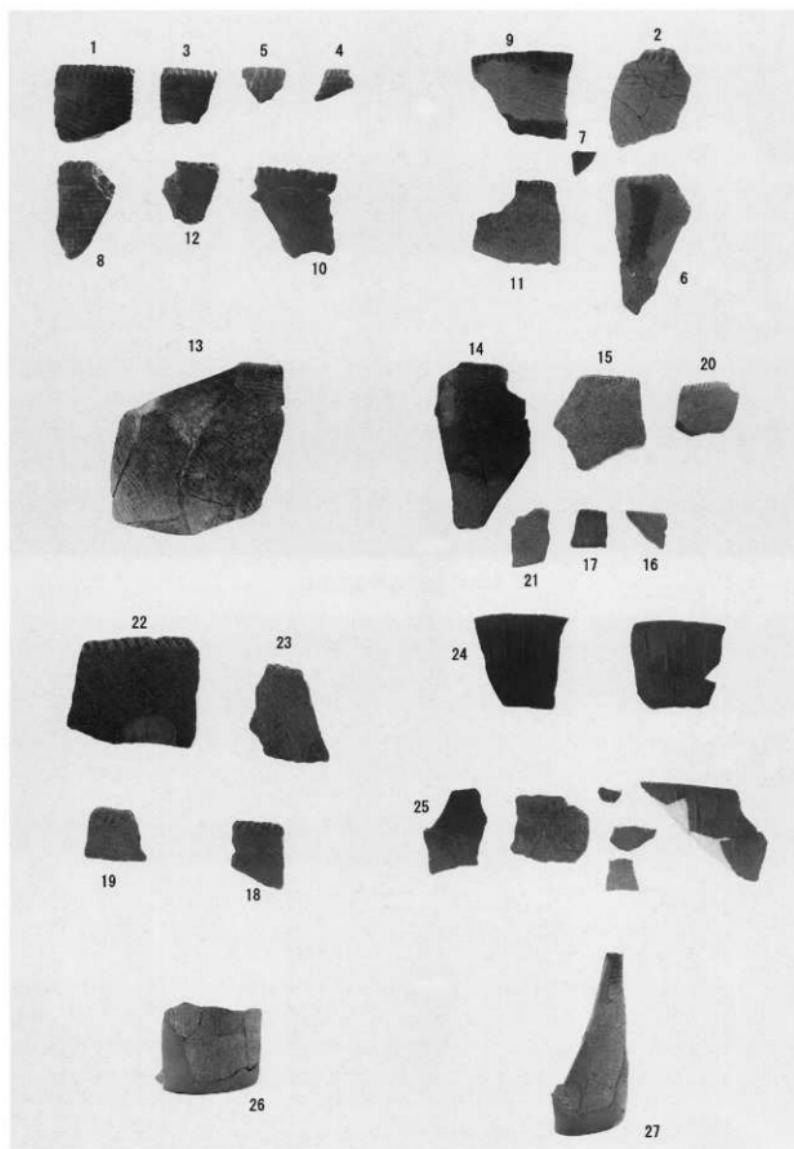
SM1 主体部半截状況 1



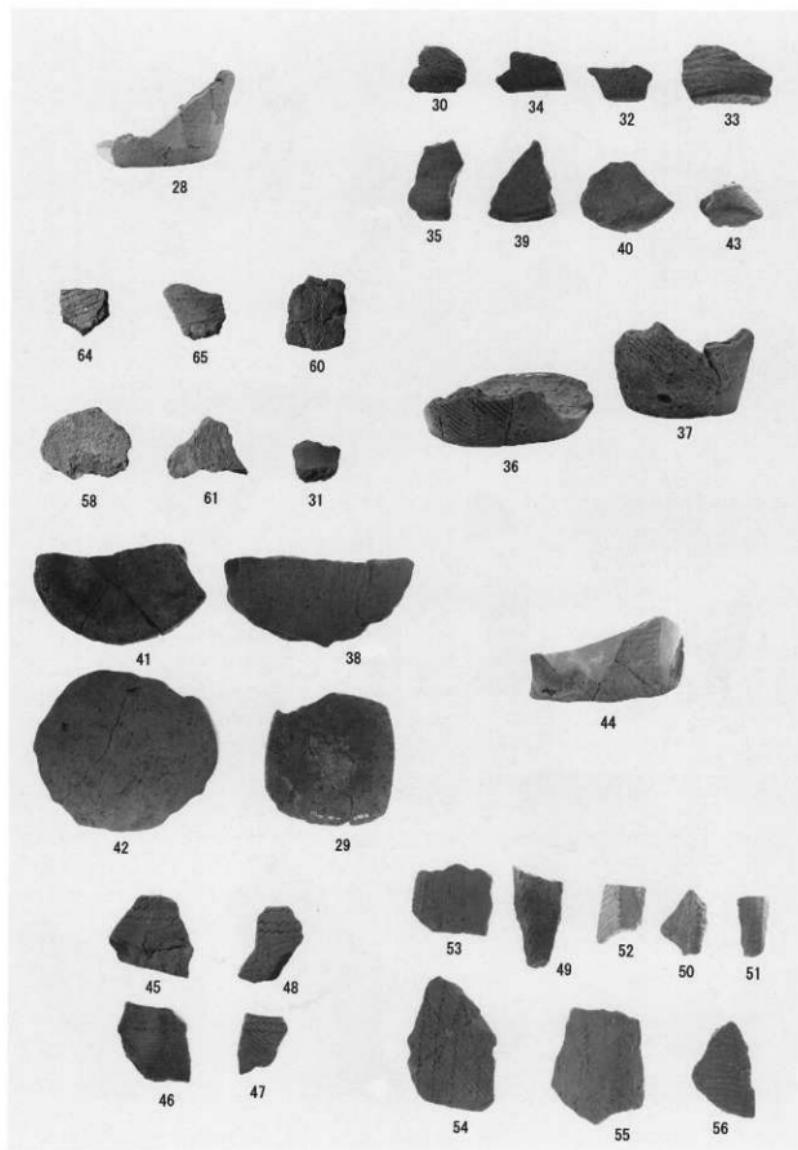
SM 1 主体部半截状況 2



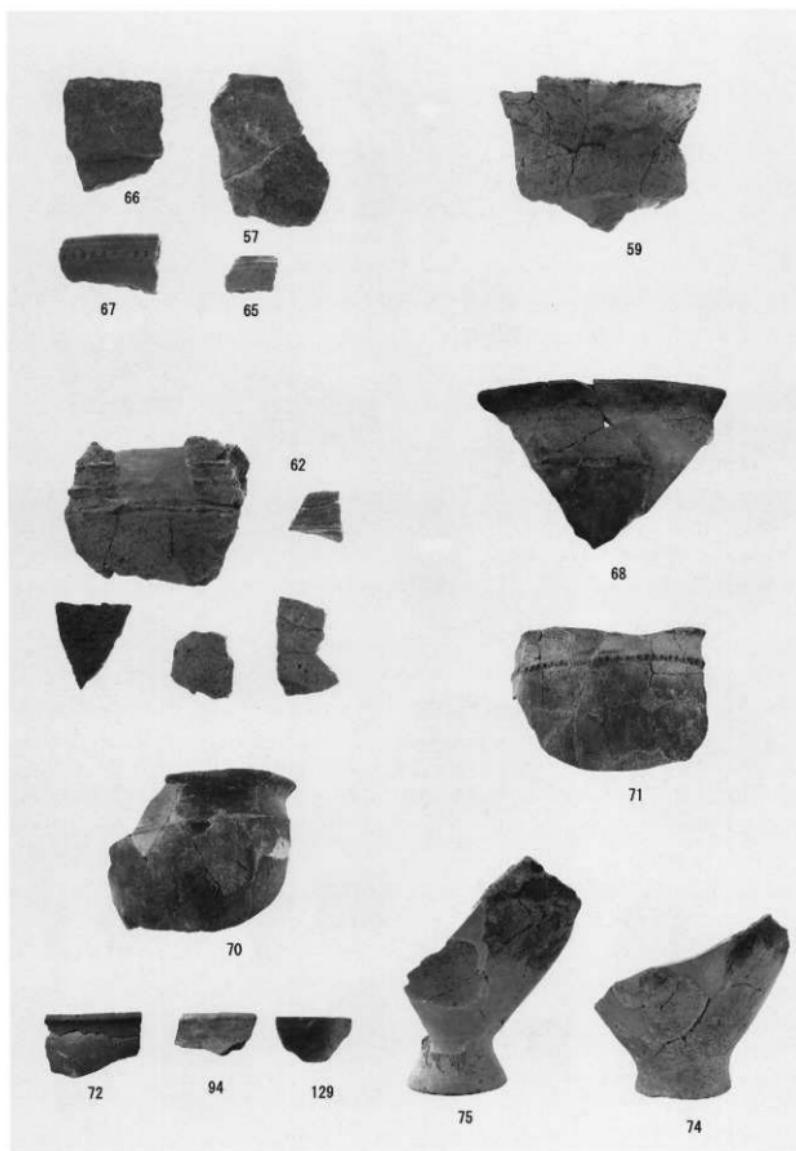
SM 1 主体部検出状況



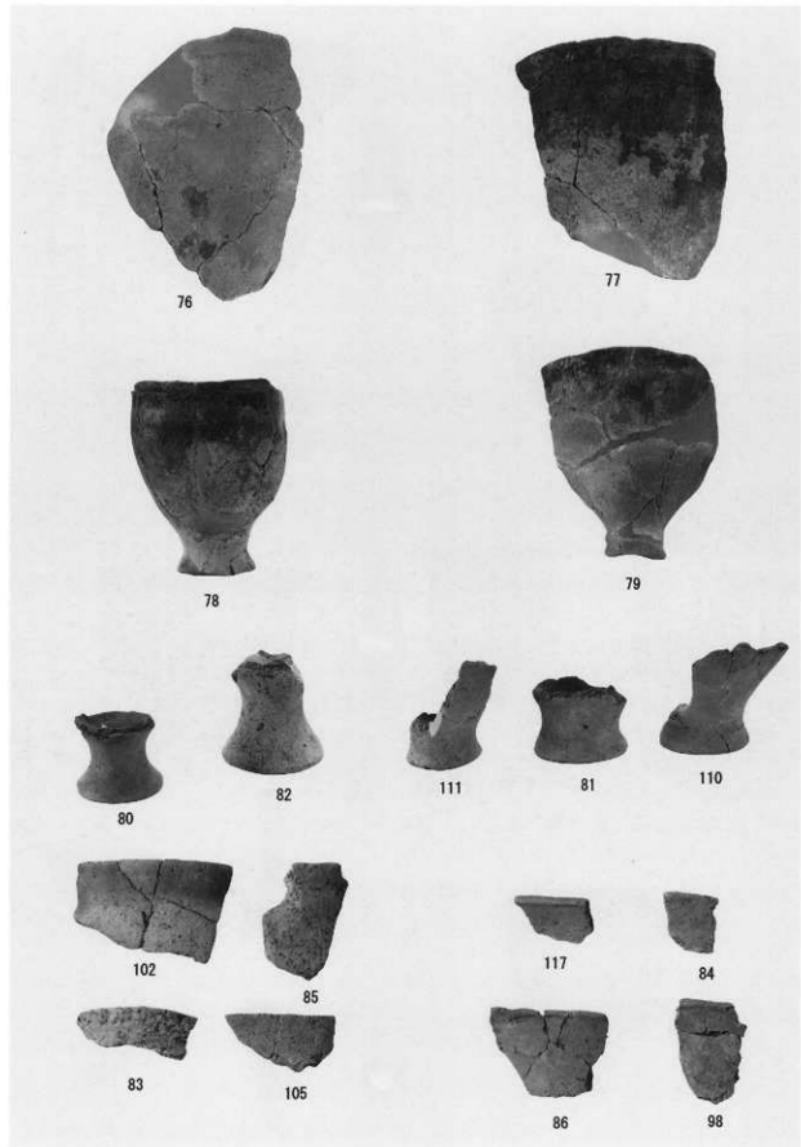
遺物写真 1



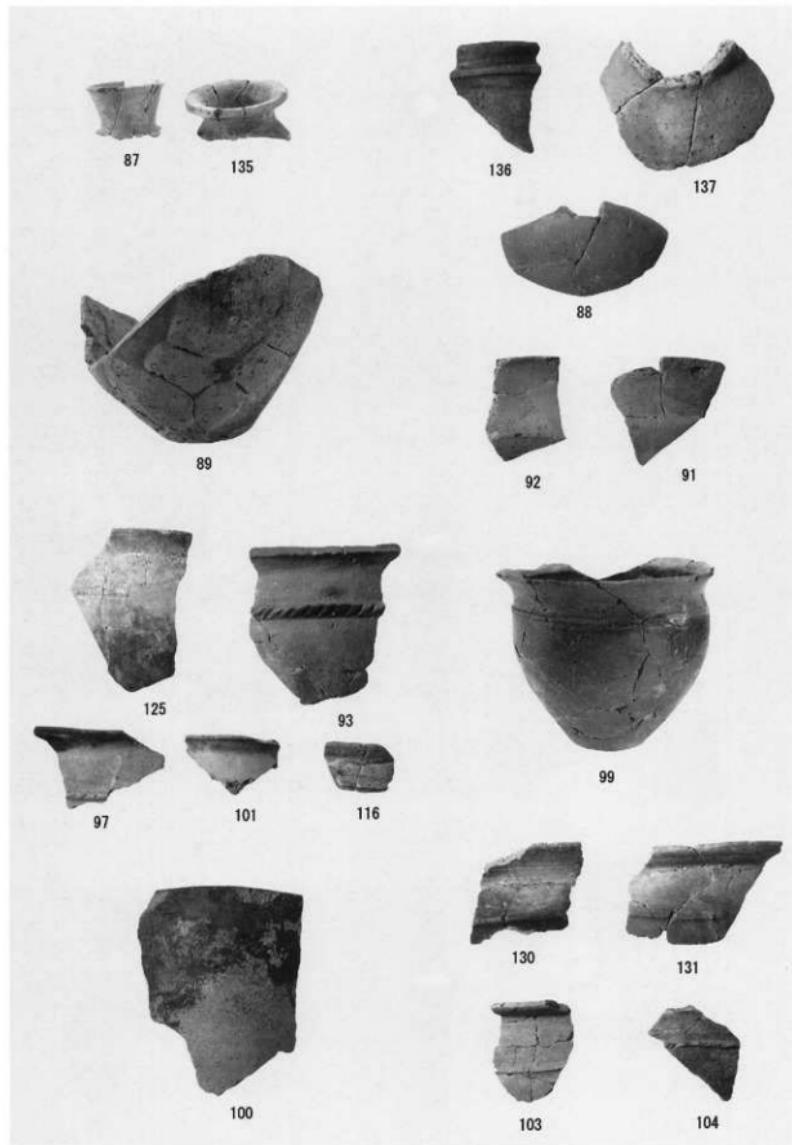
遺物写真2



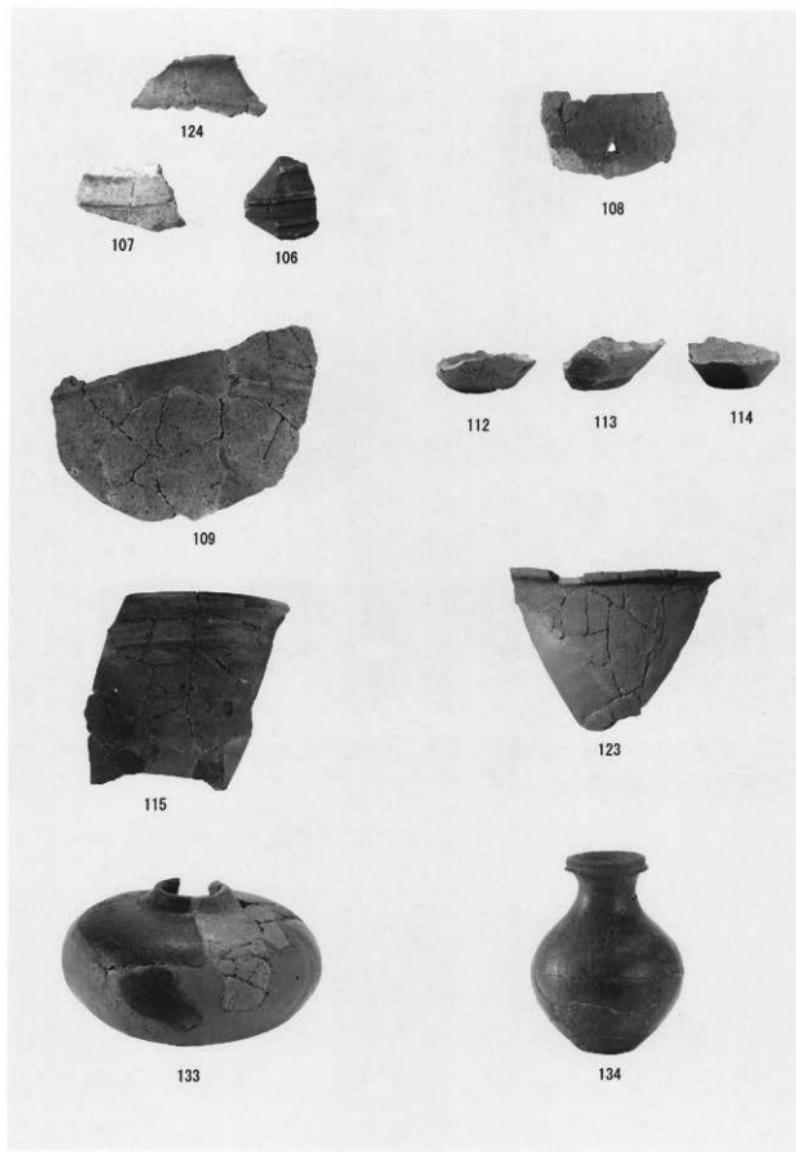
遺物写真 3



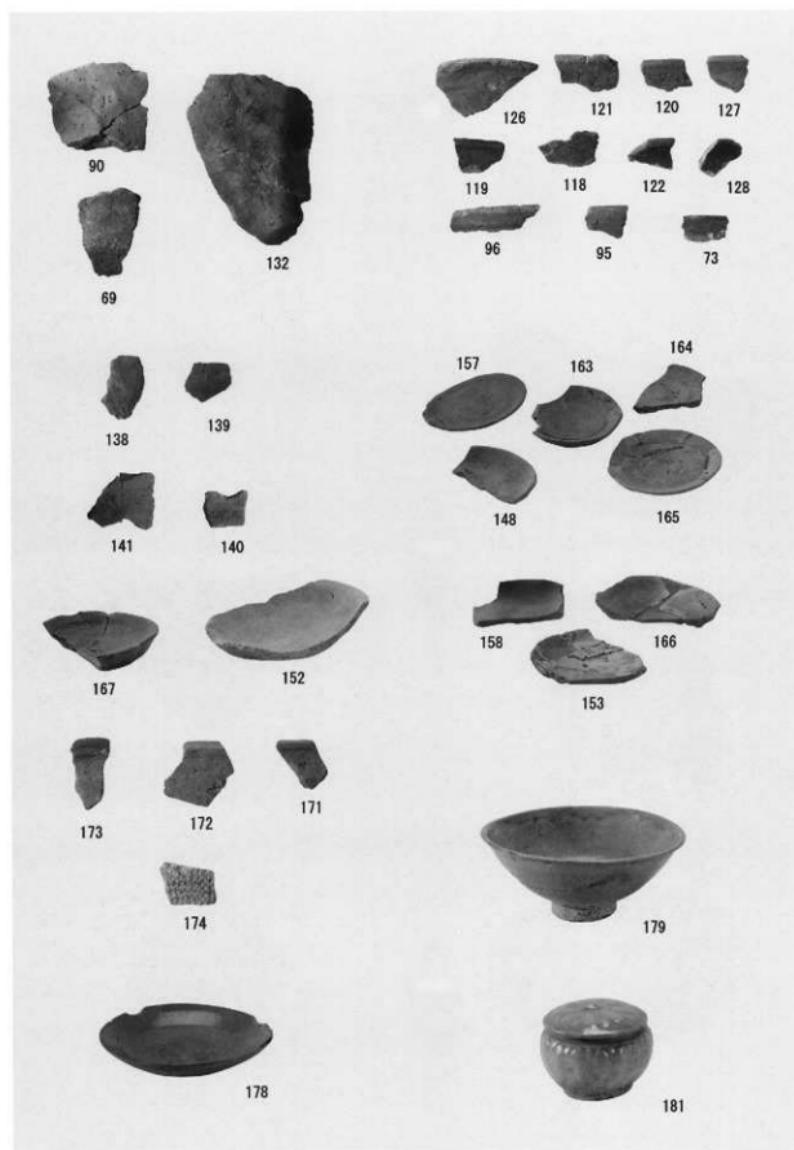
遺物写真 4



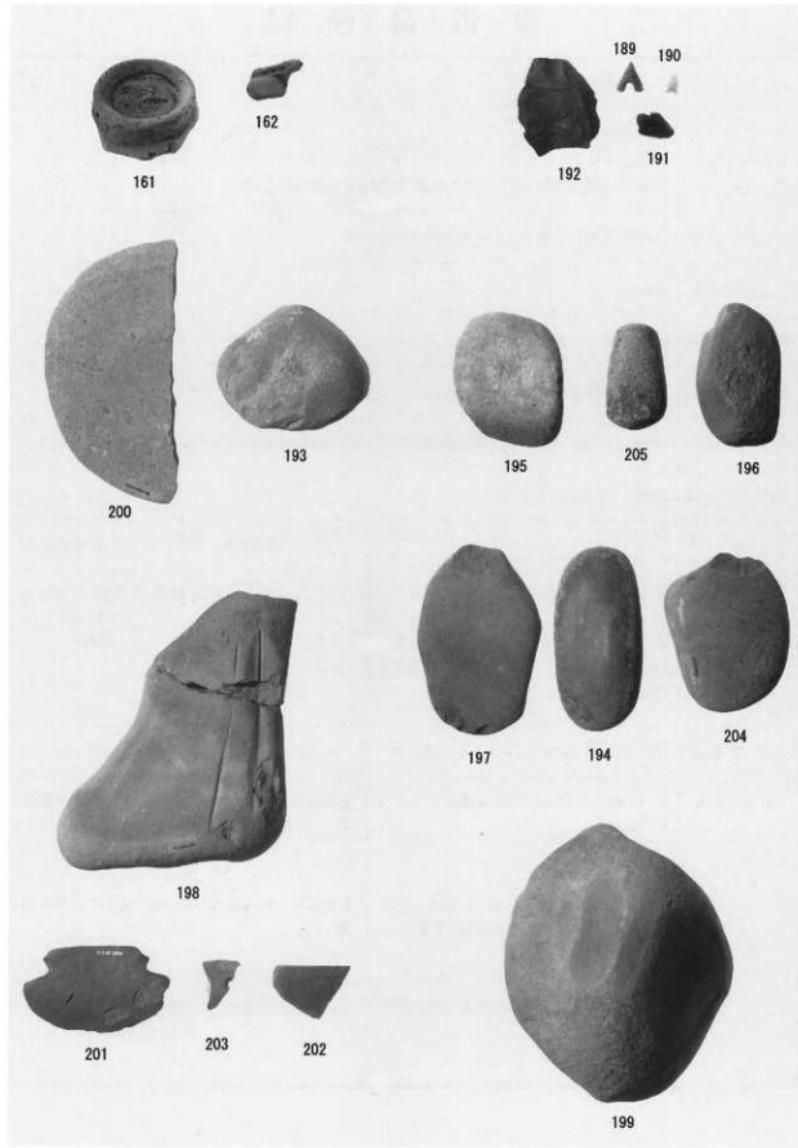
遺物写真 5



遺物写真 6



遺物写真 7



遺物写真 8

報告書抄録

ふりがな	いけしまいせき						
書名	池島遺跡						
副書名	県営早水団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第84集						
編集執筆担当	柳田 宏一、柳田 晴子						
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 Tel. 0985-36-1171						
発行年月日	西暦 2004年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
池島遺跡	宮崎県 都城市 早水町 3882番地 外	45202	4015 31° 52' 10" 付近	131° 21' 48" 付近	2001.9.12 2002.1.31	3,400	県営早水団地 建設事業に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
池島遺跡	住居跡 散布地	縄文時代	集石遺構	打製石器・縄文土器	この地方での縄文早期遺構の確認は珍しい。		
		弥生時代	竪穴住居跡、周溝 状遺構、貯蔵穴	磨製石器・弥生土器	弥生時代後期の集落を確 認した。		
		中世	周溝墓、溝状遺構	土師器・陶磁器	高麗青磁出土は稀 中世の周溝墓検出		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第84集

池島遺跡

県営早水団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 株式会社エスアイエス

〒880-0852 宮崎県宮崎市高洲町50-4
TEL 0985-27-8899 FAX 0985-28-3025
